
婚約者は鴉天狗

アマノガサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

婚約者は鴉天狗

【Nコード】

N1419Y

【作者名】

アマノガサ

【あらすじ】

この春に高校生になった少女——烏丸真希は、ごく普通の高校生活を満喫していた。

しかし、季節が梅雨へと移りはじめた頃、雨の町中で奇妙な格好をした人物と出会う。さらにその顔にはこれまたおかしい黒いお面が。

誰が見ても関わり合いになりたくないその人物。けれど、その出会いは真希の人生を大きく変えていく事になる。

序章（前書き）

過去に某所に投稿歴のあるものの改稿版です。

ジャンルとしてはラブコメになります。

よろしければおつき合い下さい。

公募様式を一部変更し、改行等を挟んでございますが、携帯等ではやや読みにくいかと存じます。申し訳ございません。

序章

序章

「接触の対象は、その娘さんだ」

重く響く声を出しながら一枚の写真を放り投げたのは、見上げるような巨体にもっさりとしたヒゲ面の男。歳は四十過ぎといったところか。おそらく特注であろうスーツに身を包み、じつとある一点を見つめている。

その先には、放り投げられた写真を受け取ったもう一人の人物がいる。不思議な白装束に身を包み、鳥のような人間のような、不気味とも言える黒いお面を付けた性別も年齢不明の者。スーツの男よりは低い身長だが、それでも百八十に届きそうな長身である。

暗雲垂れ込める空模様。すでにいつ泣き出しても不思議ではない天気の中、二人のやり取りは続いて行く。

傍から見れば、思わず目を向ける程度には目立つ二人組みだが、今の彼らに気がつく者は稀だろう。

何故なら彼らは今、樹高三〇メートルはくだらない、巨木の枝の上という常識外れな場所に居るのだから。

「……む？」

写真を見て、お面の人物がわずかに驚いたような声を発する。声からして、こちらも男のようだった。

手に持つ写真に写るのは、どこかの高校の制服を着た、活発そうな一人の少女。つり気味な目にショートの髪がよく似合っていた。

「どうかしたのか？」

その様子を不審に思ったスーツの巨漢が問うが、

「いや、気の強そうな相手じゃ思うてな」

お面の男は小さく頭を振り、写真を投げ返した。

「先方のご両親にはすでに話を通してある。問題が無いのなら、まずは一度会って来い。どう転ぶかは分かんが、いずれにしても我らにとつては新たな一歩だ」

「……分かつておる」

お面の男はくるりと背を向け、遠くを見る。高い位置から見えるのは、彼方に広がるどこかの町並み。

不意に、お面の男の身体が前方に傾き、そのまま枝の上から落下する。

しかし、スーツの巨漢は驚きも慌てもしない。そうしている間に、お面の男は数秒も無い落下の後、激しく地面に叩きつけ——られはしなかった。

二人が乗っていた巨木の近辺に、何かが落ちたような形跡はない。また、どこかに運よく引っかけた様子もない。お面の男は、木から落ちると同時に完全に消え失せていた。

不意に、少し遠くからカラスの鳴き声が聞こえてきた。

スーツの巨漢はその声に反応し、今までお面の男が見つめていた先を眺める。その先の空に、一羽のカラスが飛んでいるのが見えた。彼はそれを確認すると、小さく笑みをこぼし、次の瞬間、音もな

くスーッと消えて行った。

まるで最初から何もいなかったかのように、いつの間にかその姿は、巨木の枝の上から完全に消え去ってしまっていた。

風が吹き抜け、木々が葉を擦り合わせるざわめきだけが、残される。

第一章 その1

第一章

土砂降りの雨が降っていた。家の屋根やアスファルトの路面を叩くその音は、さながら轟音のようである。そんな雨の中を、傘を持たぬ一人の女子高生が駆けて行く。

ショートに切り揃えられた黒髪。整った顔立ちながら、そのつり気味の黒い目が、どこか気高い雰囲気を出していた。

学生力バンを頭上に掲げ、なるべく顔に雨が当たらないようにしてはいるが、無駄な努力でしかない。

「あつちやー。こんなことなら寄り道しないでとっとと帰っておけばよかったか」

ひた走る少女、烏丸真希は、からすまき降水確率二〇パーセントを過信した今朝方の自分を軽く呪った。

とつくにずぶ濡れになっている制服やスカートは、重みを増すとともに身体に張り付き、その健康的な身体のラインをうかがわせてしまっている。

平均よりも幾分高い身長で、猫科の動物を連想させる均整の取れたスレンダーな肉体は、走る姿と相まって、一つの芸術の様でもあった。

——とにかく帰ったらシャワー浴びない——ん？

真希は進行方向上、赤色の傘を指す人物の背中を捉え、わずかに

眉をひそめた。何故なら、濃い灰色の世界でよく目立つその傘は、正月芸や時代劇でよく使われるような蛇の目傘だったからだ。

一般的に常用される類の傘ではない。よほど物好きか何かでなければ、そもそも持つてすらいらないはずの代物だ。

そんな珍しい傘を差した人物が、行く先に居る。

——怪しい。

真希の脳裏をそんな評価が掠めたが、このまま走り続ければすぐにでも追い越せる状況である。最悪、話しかけられても聞こえない振りをして逃げればいい。

そう結論を出し、真希は速度を緩めずに雨の中を走り続けた。ところが、ここで彼女にとって予想外の事態が起きる。

「む？」

真希が対応を決定した瞬間、計ったかのように傘の人物が振り返ってきたのだ。その顔を見て、真希は雨に濡れた道路の上で急ブレーキをかけざるをえなかった。

振り返った人物と、急制動をかけて止まった真希は、二メートルほどの距離を開けて対峙する。

——うわっちゃー……

真希は思わず止まってしまった自分を引っ叩きたい気分になった。止まるべきではなかった。走り抜けなければならなかったのだ。

振り返った人物は、真希より頭一つ分ほど背が高い、おそらくは百八十を超える長身だった。不可思議な白装束に身を包んでおり、なんと足元にはわらじを履いている。

この時点で相当に怪しいことは間違いないが、それをさらに増幅させているのが、その顔に付けられた真っ黒なお面だった。鳥のような人間のような、そんな印象を持つお面である。

「お主、もしかや烏丸真希という名か？」

いきなりの言葉に、真希の心臓が跳ね上がった。会ったことも無いどころか、一度見たら忘れられないだろう不審人物、声からして男に顔と名前を知られている。

真っ先に彼女が疑ったのはストーカーだが、

——さすがにこんなのはいないわね。

すぐにその可能性は捨て去った。捨て去ると同時に、真希はさりげなく重心を移動させておく。隙あらば逃げ出せるように。幼い頃祖父に習った武道の基礎は、飛び出しの速度を飛躍的に高めてくれるはずだ。

「む？ 人違いじゃったか？」

雨に視界を遮られる上、真希が濡れ鼠状態なこともあって、お面の男は彼女を正確に認識出来ないようだ。

おそらく、もっとよく確認しようという意図で、ゆっくりと真希の方へ近付いてくる。

一步、二歩、三步目で、真希はアスファルトを蹴って飛び出した。一瞬でお面の男の隣をすり抜け、全力で走り出す。

「なっ、ちょ待——」

後方からそんな声が聞こえて来たが、そんなものには構わない。

ここで逃げなければ絶対に厄介なことになると、真希の本能が告げていた。

しばらくがむしゃらに走り、そろそろ我が家が近くなった所で、真希は一度背後を確認しておくことにした。振り返った先には雨に打たれる街並みがあるだけで、あの怪しい人物の影は無い。

「よし、撒いた」

小さくガッツポーズ。心の中で祖父に感謝を告げる。

一息ついてから彼女は再び走り出し、すぐに自分の家に到着。勢いよく我が家の玄関のドアを開けた。

「ただいまー。お母さん、タオルちょうだい。あとすぐシャワー浴びるから」

ずぶ濡れのまま上がるわけにはいかないため、真希は玄関先で母親を呼ぶ。

「あらあら、真希ちゃん傘はどうしたの？」

真希の呼びかけに応じ、一人の女性がタオルと桶を持って玄関へやってきた。

高校生の娘を持つにしては、見た目が驚くほど若い。現在四十を越えたところだが、最低でも三十代前半、ともすれば二十代後半と言っても通じてしまいそうな容姿をしている。

だが、その雰囲気は熟練した母のものだ。その名を、からすまみはる烏丸美春という。

「二〇パーセントだから持ってかなかったの。お風呂場空いてる？」

「まあまあ、二〇パーセントでも折りたたみくらいは持つて行くようにしなさいな。空いてるから、雨を落としてきなさい」

諭すように顔を近づける美春。真希とは違い、背中まで長く伸ばしたストレートの黒髪がわずかに揺れた。

背格好は真希と同じか少し低い程度。しかし、身体の発達具合は母娘でかなりの差があった。主に胸囲という形で。

「そうする。けど、今日の雨じゃ折りたたみなんかあってもなくても同じだと思うけどな」

「それもそうね。今日はこんなに豪雨になるって言ってなかったのだけれど」

美春は左手を頬に当て、右手で左肘を押さえつつ軽く首をかしげる、いわゆるおばさんポーズで家の中に届く雨音に耳を済ませている。

「天気予報なんてアテにならないよ。そのことが身に染みて分かったわ」

乱雑に雨を拭ったタオルを美春に渡し、ずぶ濡れの制服を桶に放り込むと、真希は下着姿で風呂場へ向かった。

脱衣場でその下着も外して洗濯機に放り込むと、風呂場に飛び込んで熱いシャワーを浴びる。

雨で冷えた身体にお湯の熱が伝わるのが心地いい。先にあった不可解な出来事の記憶も、雨と一緒に流れてしまえと思う。

ピンポン……

呼び鈴の音が聞こえて来る。こんな大雨の日に、訪問者とは珍し

い。宅配便の予定はないので、おそらくセールスマンの類だろうと真希は当たりを付けた。

美春はセールスマンのあしらい方が上手い。頂く物を頂いたら、さっさと追いつ返すはずだ。

そんな事を考えながらシャワーを終え、真希はバスタオル一枚を身体に巻いて台所へ向かった。

熱いシャワーの後は冷たい飲み物と相場は決まっている。ちょっぴり鼻歌交じりに彼女が台所へ入ると、

「おう。邪魔しとるぞ」

台所と一緒にになっている居間の椅子に、まさかの人物が座っていた。

不可思議な白装束に黒いお面をつけた、ついさっき撒いたはずのあの不審人物が、堂々とそこに存在している。

「どうした？ 儂の顔に何か付いておるか？」

言葉を失って口をパクパクさせている真希の方を向いて、お面の男は首をひねった。お面のせいで全く表情が見えないが、真希は何となく片眉を跳ね上げている顔を想像する。

「あ、あんた、何でここに……」

顔を引きつらせながら、やっとの思いで言葉を絞り出した真希の反応を見て、

「儂の目的地は、元々この家じゃったからな」

お面の男は少し笑ったような声を出した。

つまり、この不審人物は元々真希の家に行く途中で、たまたま外で彼女に会ったが逃げられたので予定通りここへ来て、今当たり前のようにそこに座っているということになる。

そう理解した真希は、フツと怪しく笑って、

「お母さん！ 変なのが家に上がってるから警察呼んで！」

「な、ちょ、待てえ！」

真希の大声に慌てたのはお面の男だ。椅子から立ち上がり、素早い動作で真希に近付いてきた。

「きゃっ」

長身の身体に一瞬で詰め寄られた真希は、驚きのあまり反射的に手を振り上げる。しかし、その手はひよいとお面の男に掴まれてしまった。続けて反対の手も振り上げるが、やはり相手に掴まれてしまふ。

結果、彼女はちょうど万歳をしているような格好で身動きを封じられてしまった。

「落ち着かんかい。何もせん」

「十分してるじゃない！ 放しなさいよこのヘンタイ！」

掴まれた手を振りほどこうとして、真希が身体をよじる。しかし、がつちりと掴まれた手はびくともしない。

「おぬ、誰が変態じゃ！」

「あんたしかいないでしょうが！ 変な格好で変なお面かぶって、それで何処がヘンタイじゃないってのよ！？」

「これは鴉天狗の正装じゃ！ お面は……わけあって外すことは出来ん」

なぜか最後の言葉は若干弱々しくなった。しかし、今の真希にはそんな微妙な変化は分らない。

「何でもいいからとっとと放しなさいよこのヘンタイ！」

「この、また儂を変態などと……。ちつとはこっちの話を聞け言うてるじゃろっが！」

こういった手合いの言い合いは、双方がヒートアップしてしまうときっかけがなければ収まらない。売り言葉に買い言葉と言ったものである。目的や論点がずれ、最終的には互いを非難する言葉が飛び交うだけだ。

だが、幸いにも今回はそこまで発展すること無く収まることになる。何故なら、真希はバスタオル一枚巻いただけの格好で、両手を掴まれて万歳状態。そんな状況で激しく動き回ろうものなら――

「あ……」

「お？」

するりと、何かが肌を滑る感覚がして、真希は我に返った。ゆっくりと、下を向く。身体に巻いていたバスタオルが足元に落ちていた。つまりは――

「むっ……」

お面の男が、一糸纏わぬ姿の真希を見て、主に胸を見て低くうなづいた。両手を掴まれていてとっさに隠すことも出来なかった真希の

顔が、見る見る真っ赤に染まっていく。

「むっ、じゃないわよこのドヘンタイがつ!!」
「うごっ!!」

やや屈んだ姿勢になっていたお面の男の顎に、真希の膝蹴りが炸裂した。その衝撃で、掴まれていた両手が解放される。

すぐさまバスタオルを拾い上げて巻き直し、彼女はキッと相手を睨み付けた。

まともに顎を蹴り抜かれたお面の男は、顎を押さえながら床をごろごろ転がって悶絶していた。真希はそれを冷ややかに見つめ、止めとばかりにがら空きのゴールデンボールをサッカーキックした。

「ぬおあっ!!」

効果は抜群だった。顎の痛みを忘れたかのように、全身を震わせながら急所を押さえて縮こまっている。いい気味だった。

「あらあら、真希ちゃんどうしたの?」

今頃になってようやく美春が現れる。そして真希を見て、床にのた打ち回るお面の男を見て、やや頬を染めた。

「やだ、まだお昼よ? そういうことはもっと日が落ちてから……」

美春が激しく何かを勘違いしていることは十分理解出来た。だが、そんな事よりも真希にとって不思議なのは、彼女が床に転がる不審者を見ても驚いていないという事だった。

「お母さん。この野郎を見て何とも思わないの？」

「まあ。野郎だなんて失礼よ。大事なお客様なんだから」

「……お客？」

真希が怪訝な顔をする。昨今の客は、変な格好で上がりこんだ拳句、他人の裸体を見るのが一般的なのだろうか。

「コホン。ちょうどいいわ。小太郎こたろうさんのことで話があるから、早く着替えてらっしゃい」

小さく咳払いを挟み、美春は真希に言い付ける。真希としても着替えないわけには行かないので、未だにブルブル震えているお面の変質者をちらりと見て、溜息を吐きながら二階の自分の部屋に向かった。

ろくでもないことが起きそうだと、確信めいたものを感じながら。

第一章 その2

「——ということで、こちらの小太郎さんが、真希ちゃんの婚約者候補ってことになるのかしら」

「ちよつと待つてまったく話が見えないんだけど!？」

真希が着替えて居間に戻ると、お面の変質者——小太郎は何事も無かったかのように元の椅子に座り、その対面には美春が、これもまた普段通りにニコニコしながら座って待つていた。促されるままに美春の隣に座り、そして放たれた第一声がある。

「あら？ もう話が済んでるから、あんなことしてたんじゃないの？」

さっきの光景のどこにそんな要素があったのかは知らないが、美晴はまたもほんのり頬を染めている。

「お母さんが何を勘違いしてるのか知らないけど、さっきのは事故よ。そしてこいつはヘンタイよ!」

正面に座る小太郎に指を突き付け、美春に力論する真希。その様子をどう思ったのか、小太郎は一つ溜息を吐き出した。

「あー、もうええわ。訂正するのめんどいし。う。まあ、今日は顔見に来ただけじゃけえ、さっさとお暇させてもらおうかのう」

すくつと椅子から立ち上がり、美春に一礼する小太郎。真希は特に何の反論もなかった事に拍子抜けしながらも、相手が帰ると言うのでそれ以上は何も言わなかった。

居間を出て行く小太郎に続いて、美春も見送りのために出て行く。真希はそのまま残り、玄関先での会話に耳を澄ませた。

「母上殿、騒がしくして悪かったのう」

「いいえ、お気になさらず。あの子には後で説明しておきますから、また後日改めていらしてくださいな。そうそう、お父様によろしくお伝えくださいね」

「おう。伝えときます。ほんじゃ、これで」

玄関のドアが開く音と、少しだけ大きくなる雨の音。次いで、何かが空気を打つ音が聞こえて、ドアの閉まる音が続いた。

何事もなかったかのように居間に戻ってきた美春を見つめ、真希は疑問を口にする。

「で、お母さん。なんかずいぶんと親しげだったけど、こういう事？」

美春は真希の隣には座らず、対面の、先ほどまで小太郎の座っていた椅子に腰掛けた。そして、いつものんびりした口調で、

「そうねえ。簡単に言ってしまうえば、うち、あ、烏丸の家ね。鴉天狗の血が混じった家系なのよ」

そんな事をのたまった。

「……………はい？」

一瞬、ふーん、と流しかけて、その余りの不自然な言葉に頭が緊急停止を促した。そんな真希の驚きを気に留めず、美春はどんどん話を進める。

「それでね、最近開発とかで天狗さんたち妖怪の住む場所がなくなってきたから、これはもう人間に混じって暮らすしかないってことになったらしくて、方々の妖怪の血が入った家を足がかりにして、共存の道を模索しているんですって」

「いやあの、え？　話がまるで見えないんだけど。烏丸の家に妖怪の血？」

真希の頭はかつてないほどに混乱していた。余りにも淡々と、普段通りに美春が語るのも、心の準備というか、身構える体勢が作れなかったのだ。

「そうよ。えっと、たしか明治時代の初期だったかしら？　私たちのご先祖様と鴉天狗の間に子どもが生まれて、その生まれた子どもの血を私もあなたも受け継いでいるというわけ」

「ちょ、ちょっとお母さん。さっきから妖怪妖怪言ってるけど、妖怪なんて実際にいるはずないじゃん」

わずかに混乱から立ち直った真希は、話の肝にして最も気になっている事を口にした。

この科学社会において、妖怪という非現実的なものが実在するはずがない。その考えに基づく発言だったが、これに対する美春の回答は、真希をさらなる驚愕に叩き込んだ。

「あら、いるわよ。だって、会ったことあるもの」

「はあっ！？」

またも飛び出す爆弾発言。事ここに至って、真希はある可能性を導き出した。

昨今、怪しい宗教団体が世間を騒がせる事件がいくつかあったが、美春のこのおかしい言動も、それらに何か関係しているのではないかという可能性だ。

セールスマン相手に無敗であっても、宗教関係は怖いし分からない。仮にそうであれば、下手に否定してもしょうがない。ここは話を合わせて、さらに聞き出すのが上策だった。

「ね、ねえ、それっていつ、どこで？」

表面的には何とか平静を装って、先を促す。しかしながら、真希のこの努力は何の意味も持たなかった。

「別の方なら、あなたも会ったことあるわよ？ 正体を明かしてもらってはいないでしょうけど」

「なぬうつ！？」

美春が止めの一言を放つ。驚いたどころではない。勢い余って真希はテーブルに両手を叩きつけてしまい、その痛さに涙目になる。

「私の妹の彩夏^{あやか}、去年の冬に結婚したでしょう？」

覚えている。真希の叔母であるその人は、美春とは十以上歳の離れた姉妹だが、何度か会ったことがある。

結婚は出来ちゃった婚らしいが、式にも招待された。綺麗な衣装に身を包んだ叔母は眩しいくらい輝いて見え、憧れを抱いたほどだ。その時の光景を思い出し、痛みから逃避する意味でも若干上を見ながらついウツトリとする真希を、美春の言葉が現実に取り戻した。

「そのお相手が、さっきいらした小太郎さんの従兄弟よ」

時が、止まった。ギギギと錆びた駆動音が聞こえてきそうな動作で、真希は美春の目を見る。冗談を言っているような目ではなかった。

「う、嘘おおっ!!」

「嘘じゃないわよ。ちょっと待ってなさい。確か証拠になる物があったはずだから」

先ほどから驚愕に打ちのめされっぱなしの真希を残して、美春は席を立つてどこかへ向かった。五分ほどして、一枚のはがきを手に戻って来る。

「ほらこれ。出産報告のはがき」

差し出されたはがきをひったくるようにして受け取り、印刷された写真を見る。まだ若い夫婦が晴れやかな笑顔で映っている。叔母の腕には白い毛布に包まれた赤ん坊。そして――

「なに……これ。ありえない……」

隣に立つ叔母の夫を見て、真希は開いた口が塞がらなくなった。彼の顔や服装におかしなところはない。式で見た時も思ったが、ちよつといいなと思えるかつこいい人だった。

だが、その写真には式で見た時には無かった物が付加されていた。彼の背後から見えている鳥の翼だ。カラスのような漆黒の翼が、隣に立つ叔母をも包み込む様にして広がっていた。

「う、合成じゃない?」

わずかな望みをかけての言葉。しかし、

「わざわざそんなことをする人はいないわよ」

正論で切って捨てられる。それでも、真希は信じる事が出来ない。

「いやだつて……」

「もう。いい加減認めなさい」

「うぐ……」

様々な事実と心の叫びがぐるぐると混ざり合って、真希の頭の中がどんどん混沌としていく。

「あ、そうそう。今日話した事は誰にも言っちゃ駄目よ。他の人に知られたら害はあっても得はないから。はがき？ これは普通郵便じゃなくて直接頂いたから大丈夫なの。それと、お父さんはもちろん知ってるわよ。だって、小太郎さんのお父様とは飲み友達なくらいだから」

そんな美春の言葉が決め手になったのかは分からない。だが、真希の脳は自身の守るため、一つの指令を出した。

「うーん……」

「わっ！ 真希ちゃん!？」

処理能力がオーバーヒートした真希の脳は、とりあえず意識を手放すことで、その場をやり過ごすことを決定していた。

第一章 その3

その日もまた、教室の窓際最後尾から見える空は、どんよりとした雲に覆われていた。直射日光による熱は無いものの、高い湿度によるじめじめとした蒸し暑さは、梅雨時のこの季節、誰もが顔をしかめたくなる。

幸い、真希の通う天命神高校てんみょうじんは私立であり、空調設備が整っているため、教室内は涼しく爽やかな状態に保たれていた。廊下に出ると途端に不快さを感じるのが難点だが、終始その状態にあるよりはずっといい。

「中間明けだが、来月にはすぐに期末があるからな。みんな気を抜かないように」

教壇に立つ教師の言葉に、教室がざわめき出す。

そんな喧騒をよそに、真希は行儀悪く片肘を付いて窓の外を眺め続けていた。

そうこうしているうちに授業終了の予冷が鳴り響き、教師は室外へ、生徒はそれぞれの属するグループに固まって、わずかな休み時間間の談笑を行う。

「真希ー」

名前を呼ばれて、真希は声のする方へ顔を向けた。とととと近寄ってくるのは、ふわふわした長い金髪に、これもまた金色の瞳を持つ小柄な少女だ。母性、あるいは父性本能をくすぐるような愛らしい顔立ちをしており、衝動的に抱き締めたくなる気持ちを起こさせる。

「何か用？」

「うん？ 別に何もないよー。……理由がないと駄目かな？」

ちよこんと首をかしげる姿は、愛玩動物の破壊力を有する。真希は動き出そうとする身体をぐつと押さえ、

「いや、駄目じゃないけど」

「そう？ よかった」

無邪気に笑う少女を見て、真希は内心溜息をついた。

彼女の名前は、てんみょうじんとわこ天命神十和子。真希の通う学校と同じ名称なのは、彼女が理事長の娘だからである。

れっきとした日本人ののだが、どうも先祖のどこかに日本人ではない血が入っているそうで、隔世遺伝によりこんな奇跡が起きたらしい。

「それはそうと真希。何かあった？ 今日はずいぶん変だよー？」

「あー……。まあ、ね」

真希の頭の中で昨日の出来事が再生される。

お面の変質者と美春の告白。

卒倒して意識を取り戻した後、さらに詳しい話を聞かせられそうになったが、また卒倒してはたまらないので全力で逃げた。

そんなことをしても、現実がひっくり返りはしないのだが。

「なにになに？ もしかして好きな人でも出来たのー？」

瞳をキラキラさせながら、十和子はペンと手帳を取り出した。彼女は情報収集を趣味としており、ありとあらゆる情報を、ありとあらゆる方法で集めている。あまり声高に言えないが、若干非法なものも含まれるらしい。裏でその筋の人間と情報の売買を行っているという噂もあるが、さすがにこれは眉唾だろう。

「少なくとも、そういうんじゃないよ」

真希が苦笑しながら、しかし本心を告げる。そんな彼女に、十和子は特に追求もせず、しかしぶくーっと頬を膨らませ、ペンと手帳をしまう。

「つままないなー。真希は他の人と違って最初から全部のカード見せるんだもん。駆け引きのしようがないよ」

「十和子相手に駆け引きしたって、十中八九あたしが負けるじゃない。やる意味がないでしょ？」

「確かに負けるつもりはないけどさ。あーあ。最近、私と駆け引きしてくれる人がいなくてつままないーい」

残念とばかりに両手を広げ、十和子は天を仰ぐ。そして、突然声のトーンを落とし

「えつとね。話してくれるなら聞くよ？ でも、話したくないんだつたら聞かない」

真希へ向き直った十和子が、その金の瞳の中に真希の黒の瞳を映し込んだ。そこに、興味本位で探る好奇の色はない。ただ純粹に、相手を心配する気持ちだけが映されていた。

「……いや、ごめん。自分でもまだ、ね」

十和子の気持ちを嬉しく思いつつ、真希はそう口にした。本気で心配してくれる友達を、こんな変なことに巻き込むのは気が引けた。

「そう……。分かった。でも、話したくなったらいつでも言っ
てね」

声の調子を元に戻し、十和子は真希から視線を外した。その姿は、少しだけ残念そうな雰囲気纏っていた。

だから、というわけでもないのだろうが、真希はくりと振り向いて自分の席へ帰ろうとする十和子の背中に、

「あのさ、変なこと聞くけど、妖怪って本当にいると思う？」

そんな疑問を投げかけた。

十和子の動きがピタリと止まり、ゆっくりと、真希の方へ振り返って来る。

「本当に変なことだねー。どこかで本物でも見たの？」

「……ううん。やっぱり今の質問無し」

「そう？　じゃ、また後でねー」

再びくりと踵を返し、十和子は自分の席に戻って行く。真希はその背中を、無言で見送った。

第一章 その4

鴉天狗の小太郎が真希の家を訪れてから五日目の朝。真希は美春からある事実を告げられた。

「今日、この前いらした小太郎さんと、小太郎さんのお父様がお見えになるから、午前の授業が終わったらずくに帰って来てね。早退はもう学校に伝えてあるから安心して」

ついに来たか、と真希は思った。遅かれ早かれ、いずれもう一度相對することになるとは思っていた。それを望む望まないに関わりなく。

その日、学校での授業にはまったく身が入らず、あれよあれよと時間だけが過ぎ、いつの間にか真希は学校を出て家に帰って来ていた。

玄関を開け、見慣れない靴がないことを確認すると、思わずほうと息を吐き出してしまう。

「お、帰ってきたか、真希」

玄関先に一人の男が姿を見せる。烏丸昇治^{からすまじょうじ}。真希の父親だ。そこそ有名な企業に勤めるサラリーマンで、容姿は至って平均的である。最近始めたお腹を気にしている他は、これといって特徴もない。せいぜいが無駄に輝く眼鏡くらいだろうか。

「先方は二時くらいになるそうだから、今のうちに着替えて身支度を整えておきなさい」

真希の気持ちを全く理解していないかのごとく、むしろどことな

くウキウキしながら玄関を去る昇治。真希は軽く殴りたい衝動を感じる。

「もっ……」

ぶちぶちと愚痴をこぼしつつ、真希は自分の部屋で着替えを済ませ、景気付けにと台所へ向かい、冷蔵庫から取り出した炭酸水を一気飲みする。

「ぷはー」

「真希ちゃん。親父臭いって言われるわよ？」

その行動を見ていた美春がたしなめるが、真希はぷいっと明後日の方を向く。

「いいじゃん。これくらいやらないと、やってられない気分なの」

その言葉もまた親父臭さの漂うものだったが、美春はしょうがないなといった溜息を吐くだけだった。

そうこうしているうちに時は進み、問題の二時を少し回った頃、呼び鈴が鳴った。

「御免仕る」

「お邪魔するけえ」

前回と同じ格好——いわゆる山伏装束というらしい——の小太郎と、おそらく特注のスーツを着込んだ、熊の如き体躯のヒゲもじやの男がやってきた。奇怪にしか見えない、異様な二人組みだった。

「まあまあよくいらっしやいました。どうぞこちらへ」

美春が応対して、二人は居間で待つ真希と昇治の前にやってきた。そのまま父娘の対面にどつかと腰をかける。美春は客人に冷えた麦茶を出すと、昇治と挟むようにして真希の隣に座った。

「初対面の方もいらつしやるので、簡単に自己紹介をさせていただきます。私は鴉天狗の剛鍊こうれんと申します」

ヒゲもじやの男——剛鍊は、全員が席に着くなりまずそう切り出した。

「そしてこれが、倅の小太郎です」
「改めてよろしゅう」

小太郎もまた剛鍊に習って頭を下げる。相手が名乗ったのだから、こちら名乗るべきだと考えたのだらう。昇治が口を開く。

「ご丁寧にありがとうございます。私は烏丸昇治と言います。そして、二つ隣が妻の美春、隣が娘の真希です」

美春が静かに礼をするのを見て、真希もしぶしぶそれに習った。

「それでは、自己紹介も済みましたところで、まず先日の倅の無礼をお詫び致します」

再び剛鍊が頭を下げた。かなり礼儀正しい人物のようである。本人の弁を借りれば、鴉天狗ということだが。

「いえいえ、とんでもない。大したおもてなしも出来ませんで、こちらこそ失礼いたしました」

それに対し、美春も深々と頭を下げる。

「いやいやそんなことは……」

「いえいえとてもとても……」

互いに頭を下げ続ける剛錬と美春。どこかのコントのような光景で真希としては少し笑えるが、これではまったく話が進まない。

「美春さん、剛錬さん、話が進まないのその辺にしておきましょう」

いい加減なところで昇治が二人を止める。

「おお、そうでした。今日の用事はそちらが主ではありませんでしたな」

気恥ずかしさを紛らわせるためだろうか。剛錬は軽く咳払いをし、そして息を吸い込んだ。

真希はごくりと唾を飲む。

「では、単刀直入に申しましょう。あなた方の娘さん、真希さんを倅の嫁に頂くというお話ですが、ご了承いただけますかな？」

「ええ、是非に」

「ちよつと待てええっ……！」

即答で見事にハモる昇治と美春の言葉に続き、真希の叫びが居間に木霊した。

それはおそらく、彼女の十六年の人生で一番大きな声であろうと思われるほど、魂のこもった絶叫だった。

「あら？　何かおかしかったかしら？」

心外だとも言わんばかりの表情を作る美春に対し、真希はわずかとはいえ、殺意すら覚えた。

「おかしいものにも、本人の意思無視して話し進めてんじゃないわよ！」

怒りに任せて強くテーブルを叩くが、その場にいる誰も微動だにしない。ただ、剛鍊だけが真希の言葉に眉をひそめた。

「む？　昇治殿、何か互いの情報に齟齬があるようだが……？」

問われた昇治は苦笑いを浮かべ、頬をぼりぼりとかく。

「いやーははは、すっかりしてましてね。娘に例の話をしたのは、小太郎君が来た日が初めてだったんですよ。その時私はちょうど出張でして、今日まで詳しく説明する時間が取れなかったものですよ」

「なんですと？」

剛鍊の顔が、豆鉄砲を食らった鳩のようになる。見事な三つの丸だった。

「親父、じゃから言っただじやろうが。本人にはまだ話がいつとらんとな」

それまで傍観を決め込んでいた小太郎が、最初から投げやりな感じで口を挟む。

「しかしお前、この前面通しは済ませたのだろう？」

「あー、まあ、の……」

口ごもる小太郎。その際、ちらりと真希の方を見たのは、初めてあった時のことを思い出しているのだろうか。そう考え、真希自身もあの日のことを思い出し、赤面する羽目になった。

「あんた、まさかあのことを思い出してるんじゃないでしょうね？」

顔に熱を持ちながら小太郎に詰め寄る。正確にはテーブル越しに顔を近づけたのだが、

「な、あ、阿呆。あんな小さな胸なんぞもっ覚えておらんわ！」

顔を近づけられたことに驚いたのか、若干後ろに引きながら、小太郎がそう答える。

見事なまでに語るに落ちていた。

「ち、ち、小さいですってえ！？」

一人の女として少なからず、いや大いに気にしていることを言われ、真希は瞬間的に沸騰した。さっと右手を伸ばし、小太郎の胸倉を掴んで引き寄せる。反動で相手の頭がわずかにのけぞり、がら空きになった首を左手で掴み取ると、

「ぐおっ」

「このむつつりスケベ！」

そのままぎゅうぎゅうと左手に力を込める。

当然、それに抵抗して小太郎の手が引き剥がしにかかってきた。

「だ・れ・が・助・平・じゃ！」

「あ・ん・た・よ・あ・ん・た！」

しばらくの間その攻防は続いたが、あまりの事態に一時呆然としていたそれぞれの親が協力することで、何とか真希と小太郎を引き離すことに成功した。

「はあ……はあ……」

「ぜい……ぜい……」

互いに荒い息を吐く。無茶な体勢で力を入れていたため、真希は身体の節々に痛みを感じていた。だが、ペチャパイ発言の怒りは収まらない。せめてギロリと小太郎を睨んでおくが、お面に隠れて表情に変化があるのかどうかは分からない。

「本当にすみませんね剛錬さん。小太郎君、大丈夫かしら？」

美春が心配そうに小太郎を見る。

「奥方殿、ご心配なさらずに。この程度でどうこうなるほど、倅は貧弱ではありません」

「ほうじゃ、儂らは頑丈に出来とるけえ。この程度では、ゴホッ、大したことにはならん」

その割にはなかなかきつそうに見えなくも無いが、とりあえずは父子の返答を得て、美春が若干ほっとした顔を作った。しかしすぐに難しい顔をして、

「真希ちゃん。小太郎さんに謝りなさい」

「……嫌」

真希はぶいっと美春と反対の方へ顔を向ける。

「真希、とにかく暴力はよくないよ。それは謝っておかないと」

向いた先の昇治も、真希に謝罪を促す。回りは敵だらけだった。それでも彼女は、頑として謝ろうとはしない。

「だって、あたしはそいつに裸見られた上に、そのことを馬鹿にされたのよ？ 怒って当然じゃない」
「何ですと？」

真希の言葉に驚いたのは剛連だ。即座に隣に座る小太郎に顔を向け、本人が明後日の方を向いて目を会わせようとしなのを確認すると、次の瞬間にはその頭を拳で打ち抜いていた。

すごい、としか言いようがない音がした。椅子に座っていた小太郎の身体は、おそらくは床に倒れているのだろう。真希の位置からではテーブルが邪魔して見えない。

剛錬がやや前かがみになり、そして身を起こした。ずっと伸ばされた右手には小太郎の頭が驚掴みにされ、その身体は冗談みたいにぶらぶらと揺れている。

剛錬はそのまま呆然としている烏丸親子に向き直ると、いきなり自分と小太郎の頭をテーブルに激しく打ちつけた。幸いにもテーブルは壊れなかったが、真希はまたも驚かされることになった。

「真、真に申し訳ありません！ 倅が、そのような狼藉を働いていようとは！」

がばつと身を起こし、再びテーブルに顔面ダイブ。もちろん小太郎も同じように叩きつけられている。異様過ぎる光景だった。加えて、さつきから小太郎が微動だにしていなかったのだが、ちゃんと生きているのだろうか？と真希は不安になる。

「格なる上は、この阿呆の命を持って償——」

「ストロップ！」

三度目の顔面ダイブを、真希は叫ぶことによって阻止した。

物騒な言葉が出たのも要因の一つだが、さすがに小太郎の状態が心配になったのである。いけ好かない奴で最低だとしても、こうもズタボロにされる姿を見て喜べるほど、彼女は冷血な人間ではなかった。

「えっと、あの、剛錬さんでいいんですよね？　ともかくちょっと落ち着いてください。その、確かに裸見られましたけど、馬鹿にされましたけど、だからってそこまでしなくてもいいんじゃないかなーって……」

さつきと言っていることが若干矛盾している気がしたが、真希の感じた怒りなど、とつくの昔に冷めていた。冷めざるをえなかった、と言った方が適切かもしれない。

「そ、それでは、倅の狼藉は不問に、許して頂けると？」

驚きと期待が混じったような表情と声だった。先ほどのビリビリと発せられていた怒りの感情は、ほとんど霧散してしまっている。

「いや、ああ、えつとですね。あたしの方もやりすぎましたし、その、喧嘩両成敗？　みたいな形でどうかかと」

出来うる限りの笑顔をもって出した真希の提案を受け、その内容を吟味するように剛錬が低くうなる。その目がちらりと真希の両親に向けられたが、昇治は頷き、美春はニコニコとした笑顔でそれに応えた。

ややあつて、大きな溜息を一つ吐き出すと、剛錬は右手に掴む小太郎をぱつと離れた。糸の切れた人形のように崩れ落ちる小太郎。しかし、すぐに緩慢な動作で立ち上がってきた。頑丈だと言うのは本当らしい。

「小太郎。話は聞いていたな？」

「……ああ、なんとかの」

テーブルに手をつきながらも何とか体制を整えると、小太郎は真つ直ぐに真希を見た。

「……あー、故意ではなかった、ゆうことは分かって欲しい。じゃが、悪戯にお主を傷付けたのは確かじゃ。その、すまんかった」

「ううん。もういいよ。あんたのお父さんがあたしの代わりに全部やってくれたしね。だから、あたしがあんたにしたことだけは謝る。ごめんなさい」

ぼろぼろの状態で、それでもしつかりと謝ってきた小太郎に対し、真希もまた素直に謝ることが出来た。そんな自分に、わずかな驚きを感じる。

「はい。それじゃあとりあえずこの一件はおしまいにしましょう。」

大分別の話になりましたけど、今なら真希ちゃんもちゃんと聞いてくれると思いますし、仕切り直しにしませんか？」

両手を合わせ、美春が提案する。その場にいる誰にも、異論はなかった。

「それじゃあ、ちょっとお茶を入れて一息つきましようか」

そそくさと美春が台所へ立つ。その手伝いとばかりに、昇治も席を立った。

残されるのはおかしな父子と娘が一人。真希は対面の二人を交互に眺め、自分にとっての戦いは今がまさにスタートラインなのだと確信した。

第一章 その5

春から夏にかけて、日没の時間はどんどん遅くなる。腕時計が示す午後四時程度では、外はまだまだ明るい。

あちらこちらに、元気にはしゃぎ回る小さな子どもたちの姿がある。そんな子どもたちが一瞬静まり、すぐにまた騒ぎ出した。

「あー、あの人変な格好してるー！」

「すげー。なんかお面もかぶってるぞ。今日どつかでお祭りやってたっけ？」

「祭りはわかんねーけど、あれってシバケンジャーの悪役の面じゃね？」

そんな声を聞き流しながら、真希はなるべく早足で歩いていた。理由は、自分の後ろを山伏の格好に黒いお面のままで付いてくる小太郎から、少しでも離れているためである。

「のう。さつきから騒がしいんじやが、何かあったのか？」

「あんたの格好が奇抜すぎんのよ……」

真希は溜息を吐かずにはられない。

家族間会議が一段落したところで、真希と小太郎は夕食の買出しを命じられた。一人でいいと小太郎の同行を断ったのだが、結局押し切られてしまった。

何が何でも婚約者として認めさせるという事だろうか。

「のう。その『すーぱー』とやらはまだ遠いのか？」

若干怪しい発音で、小太郎が尋ねてくる。早くも飽き始めた様子だった。

「まだまだよ。本当なら自転車とかで行く距離なんだから」

買出しの際の条件の一つ。徒歩で行くことだった。これにはさすがに猛反論したが、どうやら小太郎は自転車に乗れないしかなかった。ある意味当然なのかもしれない。

「おお。あの不安定な乗り物か。歩くよりは速いらしいが、まあ飛ぶのには敵わんじやろう」

「そりゃ、飛んだら早いでしょうね。道を歩く必要もないし、ずっと近道出来るものね」

小太郎の言葉を聞いて、真希はちらりと空を見上げた。翼を広げた一羽の鳥が、頭上を通り過ぎていく。

——翼、か。

空を飛んでみたい。そう考えたことのある人は多いと思う。かく言う彼女も、空飛ぶ鳥に憧れた経験はある。

鴉天狗だという小太郎は、何度も、それこそ飽きるほど飛んだことがあるのだろうか。

——それにしても……

真希は先の家族間会議の内容を思い出す。そもそも、何故突然妖怪が彼女の目の前に現れたのか。

剛錬の話では、昨今の人間の活動により、野生動物だけではなく、妖怪もまた住処を奪われ続けているのだという。自分たちを守るた

め、徹底抗戦で人類と敵対するには、妖怪は数が少なくなり過ぎた、とも。

数が急激に減少した原因は、もちろん人間側の行いによるところが大きい。元々妖怪同士では子どもを作り難い傾向があったらしい。

ところが、古い話にもあるような人間と妖怪の婚姻では、不思議と子どもに恵まれることが多い。子孫不足に悩む彼らはそこに目を付けた。

現存する妖怪たちが寿命を終えれば絶えるかもしれない血を繋ぐため、生き残っている妖怪同士での協議の結果、人間に混ざることと共存を目指そうという意見が生まれた。

子孫を残し合える関係である以上、それに賭けてみようという話になったらしい。

その足掛かりとして選ばれたのが、真希のように妖怪と人間の間生まれた半妖を祖先に持つ家系の者なのだそう。一度妖怪を受け入れた家系であれば、今一度受け入れるに易いのではないか、という理由はどうかと思ったものだが。

——妖怪……か。

ちらりと背後を盗み見る。現代の街並みにあって、目を引かざるをえない奇妙な格好。そしてあのお面。

これも説明を受けたが、端的に言ってしまうと、妖怪としての姿を隠して人間に化けるために必要な装置といったものだった。

——その割にはあいつの父親、思いつき叩きつけてたわね。

小太郎のように若い妖怪は、人間の暦で十八になるまで、自分を制御して化けることが出来ないらしい。かといって、十八になるまで人間と隔絶した生活をしていては、共存という目的を達成するに当たって問題が大きい。

そのため、出来るだけ早いうちから人間社会に交じるために講じる措置だという。

——けど、姿はいいとして、あのお面じゃ本末転倒じゃないかしら。

それこそ、小太郎に好奇の目を向けている小さな子供たちの中に、こんなお面をした子どもが混じっていたらどうなるだろうか。

子どもは残酷で正直だ。異物の排除に迷いがない可能性は高い。それでももし人間不信にでもなれば、やはり妖怪の計画は頓挫することになるのではないだろうか。

「……ねえ」

少し気になって、真希は歩きながら軽く背後を向いた。

「ん？ なんじゃ？」

「そのお面だけどさ。何か他に代用品は無かったの？」

ピタリと、小太郎の足が止まった。やや反応が遅れて、真希も足を止める。

「何よ。急に立ち止まって」

完全に身体ごと向き直り、真希は両手を腰に当てて小太郎を見る。

「あー……」

当の小太郎は、言葉を濁しながら人差し指でお面をぼりぼりかいた。昇治の癖に似ていたので、真希は思わず噴出しそうになった。だが、

「やっぱり、気になるか？」

小太郎の言葉を聞いて、はっとなる。彼の声に、わずかなためらいと怯えのような感情が混じっていたからだ。

触れるべきではない話題だったと少し後悔するが、今ここで話を切っても微妙な空気しか残らない。それは嫌だった。

「そりゃ、ね。あんたを馬鹿にするつもりは無いけど、やっぱりお面を被ったままってというのは、周りから変な勘繰りをされても文句は言えないもの」

「いや、周りは周りとしてじゃ。ただ、の。お主が気になるかどうかを、聞いておきたいんじゃない」

真希が考えていたものとは、ずいぶん違った返答が帰ってきた。

——あたしが気になるかどうか？

どういう意味なのだろうか。卑下するわけではないが、小太郎にとって周囲の人間も真希も、それほど大差のある存在ではないはずだ。婚約云々の話はあれど、それにしだって昨日今日と言ってもいい話でしかない。

「えっと、それってどういうこと？」

少々訝しみながらも、真希はとりあえず問い返した。

「どうもこうもない。お主の考えを聞きたいと言っておるんじゃ」

淡々と話す小太郎。お面に隠れて表情は見えない。さっきのように、声に感情が混じっている様子もない。いたって普通に話しているようにしか見えなかった。

触れるべき話題ではないと思ったのは早計だったのかもしれない。

「そうね。やっぱり気になるかな。今まで、あんたみたいな奴に会った事ってないし。それに、表情が見え難いのよ。何となく分かる時もあるけど、ね」

率直な意見を述べたつもりだった。だが、真希の言葉を聞いた小太郎は、見るからに悩み始めていた。

両腕を組み、うつむき加減になる。ぶつぶつと何か言っているようだったが、真希の位置では聞こえない。

「えっと、あたし何かへんなこと言った？」

ちょっと心配になり、声をかける。すると、小太郎はびっくりしたとしか表現しようのない動きをし、じっと見上げる真希を見つめた。

何となく分かる。今の小太郎のお面の下では、先の剛錬と同じような三つの丸が作られているはずだ。

「……あ、ああ。すまんすまん。いや、お主の考えはよう分かった。さて、このまま立ち話しをしとっても遅くなるだけじゃねえ。ともかく先に進もうかのう」

なにやら早口にまくし立てると、小太郎はスタスタと歩き始め、真希を追い抜いて先に行ってしまった。

そんな小太郎の様子に少々面喰った真希だが、クスリと小さく笑うと、

「ちょっと待ちなさいよ。あんた行き先知らないでしょうが」

再びピタリと止まった背中に追いつき、先導する様に少し前を歩き始める。ちょっとだけ、楽しい気分だった。

「のう」

「何？」

真希の後ろから声がかかる。でも、とりあえずは振り返らずに答える。

「少し話をして構わんか？」

「いいわよ。どうせ先はまだまだ長いし、退屈しのぎにはなりそうなもの」

「おう」

背後で、小太郎が深呼吸をするのが聞こえる。ずいぶんと気合を入れていようだが、どんな話をするつもりなのだろうか。

「僕はな、本当は、人間と婚姻するつもりなどなかったんじゃ」

いきなりすごい告白が出た。その言葉の重さを感じ、真希は下手に相槌を打たずに、無言で先を促す。

「僕は、妖怪じゃ。鴉天狗じゃ。その事を誇りに思っておった」

妖怪であることに誇りを持つ。それはどういう感覚なのだろうか。真希に置き換えれば、人間であることに誇りを持つということになるが、そんなことはついぞ思ったことがない。

「だというのに、親父たち年長の妖怪は、人間と共存する道を探ると言つて、儂ら若い妖怪と人間とを結びつかせようとしておる」

若干、怒りが混じっているように感じる言葉だった。だから、つい、真希は尋ねてしまった。

「人間は、嫌い？」

「……ああ、大嫌いじゃ」

自分のことを名指しされたわけではないが、その言葉はずしりと真希の心にのしかかり、ドロリとした何かが深くに沈殿する。

「森も、山も、川や湖も、海でさえもぐちゃぐちゃにしよる。儂は生まれてまだ十六年じゃけえ、古い話は他からの伝聞でしかないが。それでも、方々を見て回れば嫌でも目に付く」

環境破壊という言葉は、真希も知っている。幼い頃によく遊びに行つた祖父の家。ちよくちよく不法投棄が問題視されてはいたが、それでもなお雄大な自然が溢れていた。

でも、今は開発によって切り開かれ、見る影もない。

「じゃが、それでも一度。ただの一度だけじゃが、人間を信じてもいいかもしれんと思える出来事に出くわした。それがあつたからこそ、儂は今まで断り続けていたものを、今回に限り受ける気になつた。無論、無条件にはないがのう」

——今回に限り……？

真希はその言葉に疑問を抱いたが、ここで聞くことは何故だか躊躇われたので口にはせず、すぐに印象が薄れて忘れてしまった。

いつの間にか二人はまた立ち止まり、小太郎は静かに遠い空を見上げていた。

「ほんで、儂がこの話を受ける代わりに出した条件が、この面じゃ」
見せ付けるように、小太郎が視線を真希に向けてきた。彼女は、それを真っ向から受け止める。

「これと同じ力を持つものは、本来形状を選ばん。腕輪でもええ。首飾りでも耳飾りでも問題ない。実際に人間に混じり、生活をしなければならん妖怪たちが、自由に決めて構わんものじゃ」

それはつまり、小太郎が望んでお面という形状を選んだということになる。

「妖怪の姿を捨て、人の姿を借りて生きる。それはええじゃろう。その方が物事は円滑に進むしろう」

こつこつと、小太郎はお面の表面を指で叩く。

「だが、儂はこう考えた。そもそも、妖怪という存在を連れ合いとして選べるだけの素質があるのなら、たとえその姿がどのようであるうとも受け入れられるはずじゃ、とな」

小太郎がそこで言葉を切る。

思わず、真希はゴクリと唾を飲み込んでいた。少し渴いて張り付いていた喉が痛みを訴える。

「のう。さっきの席では特に見せる機会もなかったけえ。じゃから、先に教えとく。この面はな――」

真希はなんとなく、いや、確信を持って、続く小太郎の言葉を予想した。彼は間違いなく、こういった意味の言葉を口にするのだらう。

「――儂の本当の姿の顔に似せて作っておる」
――自分の本当の姿がモデルだ、と。

予想していたからだろうか。真希は特に驚くこともなかった。だが、それは小太郎にしてみれば意外なことだったらしく、さっきまでの真面目な雰囲気はどこかに忘れてしまったように、

「ん？ なんじゃ、あまり驚いておらんようじゃのう」

少しつまらなさそうな、それでいてどこか嬉しそうな声で言った。

「まあ、言おうとしてる事が何となく読めたからね」

本当は確信に近かったが、そんな事は言わない。緊張を解くため、ちよつと余裕ぶって真希は肩をすくめて見せた。

「……少し引つ張りすぎたかのう。むしろ、先に結論から言っておれば、お主の驚く顔が見れたかもしれんか？」

「さーで、どうだろうね。っと、また立ち止まっちゃってるじゃない

い。この時期は日が落ち始めると早いんだから、急がないと」

腕時計を確認すると、時刻はすでに五時に近い。このままの調子では、買い物時間も考えると帰り着く頃には七時を回ってしまう。

「ほら、さつさと行くよ」

手で小太郎に促し、真希はまた歩を進め始めた。

「あ」

その直後に、真希は声を上げる。

「うん？　どうかしたか？」

「さっきの話、それなりに興味深かったよ。あんた、結構面白い奴よね」

ただの褒め言葉のつもりだった。しかし、その言葉を聞いた小太郎がまた立ち止まってしまう。

「ちょっと。今度は何？」

急こうと言ったばかりだというのに、真希はそれに反する小太郎に少しの苛立ちを覚える。

だが、ただ立っているだけに思えた小太郎の体が小刻みに震えている事に気がつく、慌てて近くによって彼の顔を見上げる。お面に隠れて表情は見えないのだが、反射的な行動だった。

「え？　え？　ちょっと本当にどうしたの？」

そこでふと、真希は家で剛錬が行った折檻の事を思い出す。常人が喰らっていれば入院必至の攻撃だったはずだ。さすがの妖怪であっても、実は結構堪えていたのではないだろうか。

「あんたまさかさつき怪我と——」

「かつかつかつ！」

心配する真希の言葉は、突然発せられた小太郎の大声に掻き消された。その大声は、どう考えても笑い声にしか聞こえなかった。

「……………え？」

あまりの出来事にキョトンとせざるを得ない真希。それを見て、さらに小太郎が笑う。腹を抱え、しまいには膝を突き、地面をバシバシ叩き始めた。

「ほ、ほ、本当に、お主こそ面白い奴じゃ。儂は今までこんな人間に出会ったことがない」

なおも笑い続ける姿を見るに、どうやら怪我云々の心配は必要が無さそうだった。それはよかったのだが、真希としては何か心配した分損した気になる。

けれど、その笑う姿が余りにも普通だったので、彼女もなんだかおかしくなって、一緒に笑ってしまった。こんなに笑うのは、久しぶりだった。

ひとしきり笑いあって、二人はまた歩き始めた。立ち位置は変わらなかったが、さっきよりずっと、距離は近くなった。

「すごい時間食っちゃったから、急がないと」

「そうじゃな」

腕時計の示す時間は五時十二分。真希はちよつと笑い過ぎたと思つた。

「あー、いつそ本当に飛んで行けばいいわね」

若干薄暗さをのぞかせはじめた空を見て、真希は何の気無しにポツリと言う。

「おう、一緒に飛んでくか？」

「そうね。そう出来たらいいわね……って、え？」

真希は思わず振り返っていた。やはりお面に隠れて見えないが、その雰囲気から小太郎がニヤニヤ笑っているような感じは受け取れた。

「飛んでくかって、あんたはともかくあたしは飛べないわよ？」

何かの間違いでこうして妖怪と話してはいるが、烏丸真希は一応ごく普通の人間である。妖怪が先祖にしようが、それが事実として変わることは無い。

「いや、多分飛べるじゃろ。まあ、ちよい試してみよか」

しかし、小太郎はそんなことには構わず、懷をまさぐって何やらお札のような物を二枚取り出した。その一枚を真希に差し出してくる。

「ほれ。とりあえずこれを持っとけ。結界を張るための札じゃ」

無造作に渡され、真希はとっさに受け取ってしまう。古びた紙に、なにやら不思議な模様や記号が描かれている物だった。それ以外は何の変哲もない、ただのお札にしか見えない。

「つと、次は……」

小太郎の身体から力が抜けたような感じを見て取る。その、次の瞬間、真希の耳は空気を打つ音を捉えていた。

「え？」

真希の視線は、目の前の光景に釘付けになる。何故なら小太郎の背中に、漆黒の翼が生えていたからだ。

古来より、人は綺麗な黒色を鴉の濡れ羽色と称するが、真希はその艶やかな美しさに目を奪われる。

「……つて、ちょっとちょっとここ町中」

数秒見とれてしまってから、真希は慌てて周囲を警戒した。いつの間にか周りの視線に慣れてしまっただけで忘れかけていたが、人目が無くなっていたわけではないのだ。

「大丈夫じゃ。この札で、周りのもんは儂らを認識できん」

焦る真希に対して、小太郎はひらひらとお札を示す。確か、結界とか何とか言ってたが、つまりはこれのおかげで自分たちは見えなくなっているということだろうか。

真希は思わずまじまじとお札を眺め、こんな物も実在したのかと感心してしまう。

「さて、これからが本番じゃ。お主、ちょい後ろ向いとけ」

ちょいちょいと指で回れ右をしろと合図が来る。

「……変な事するつもりじゃないでしょうね？」

なんとなく素直に言葉に従うのは癪だったので、真希は軽口を叩く。しかし、返ってきたのは、

「阿呆。真面目な話じゃ」

言葉は乱暴なままだが、ひどく静かな、ともすれば優しい声だった。

——むむ。

肩透かしをくらった真希は、何とも手持ちぶたさになってしまい、結局言われるままに小太郎に背を向けた。

「ちつとちくつとするかも知れんが、一瞬じゃ。安心せい」

「え？　ちくつて——痛っ！」

言われたように、背中がちくりとした痛みが走る。

「何するのよ！」

慌てて振り返ると、小太郎は何事も無かったかのように平然とそこにいた。真希は思わず詰め寄ろうとするが、

「そろそろじゃ」

「え？ なに言っ……て？」

直後、真希は背中に違和感を覚えた。若干身体が重くなったような気持ちになり、次いで肩甲骨けんこうこつ付近に何かの感触を感じる。

「あれ？ なんか変な感じ……が……？」

恐る恐る肩越しに背後をのぞき見る。すると視界に、何故か小太郎と同じような黒い翼が飛び込んで来た。

「え？ え？ ええええっ！？」

驚愕する真希の背中に、一対の翼が生えていた。肩甲骨に力を入れると、バサバサと動く。感じた事のない感触に背筋がぞわとなるが、不快かと思えばそうではない。

「ほう、これは見事なもんじゃ。思った以上じゃな」

一人頷く小太郎。だが、真希は混乱したままだ。

「ちよ、何で感心してんのよ！ 何これどういう事！？」

真希は小太郎の胸倉をつかんで説明を求める。かなり必死だった。だから、詰め寄られているのに嫌がるどころかやや嬉しそうな小太郎のおかしさには気が付かない。

「自分に妖怪の血が混ざつとることは聞いたじゃろ？ 妖怪の血が入った人間に、混ざつとるのと同属の妖怪が力を分ければ、活性化させる事が出来るんじゃ」

胸倉をつかまれたまま、小太郎が説明する。

「妖怪の血を活性化？ それって、あたしも妖怪になるって事？」

小太郎が首を横に振る。

「いや、妖怪にはなれん。じゃが、妖怪の持つとる力を一時的に使えるようにはなる。今は儂の羽根を一枚刺してやったんじゃが、まあ、それだけでこつも見事な翼が生えるとは思わんかったがのう」
「えつとつまり、あんたがあたしに力をくれたから、あたしの背中に翼が生えたと？」

今度は縦に振った。

「ほうじゃ。飲み込みが早うて助かる」

小太郎から手を離し、真希はふらつと一步後ろに下がる。もう何でもありだった。事實は小説より奇なりとはよく言ったものだと思う。

「ほんじゃ、早速飛んでみようかの」

「え？ ちょ、ま、あたし飛び方なんて知らないわよ！？」

「最初は儂が手助けするけえ。とにかく慣れじゃ。ほれ」

わたわたと取り乱す真希の手を小太郎がつかむ。この間は気が付かなかったが、ちよつとごつごつした、男の人の手だった。何故か、真希は少しだけ身体が熱くなった気がした。

「よし、行こか」

「まっ、心の準備が——きゃあっ！」

浮遊感。次いで風を身に受け、真希は思わず目を閉じてしまった。暗闇の中で感じるものは、なんとなくジェットコースターに乗っているようなものに似ていた。

しばらくの後、風を切る感覚はそのままに、水に浮いているような浮遊感だけが残る。

「ほれ、しっかり目え開いて、自分でも風をつかまえんかい！」
「う……」

恐る恐る目を開く。目の前に、遠くの街並みが見えた。ただし、見えるものはほとんどが建物の屋根だ。

「うわわわっ！」

驚いて真希は身をよじる。だが、不思議と水に浮いているような浮遊感は崩れなかった。高い位置にいるのに、ひどく安心出来た。

「大丈夫か！？」
「え？」

きよろきよろと周りを見る。すぐ隣を、小太郎が飛んでいた。その手は、しっかりと真希の手を掴んだままだ。

「ええか！ 背中にあるもんを、自分の腕と同じような感覚で意識するんじゃ！ 大きく開いて、風を感じるんじゃ！」

風の流れる音に負けないようにだろう。小太郎は声を張り上げてそう言った。

「安心せえ！ 絶対に落としたりせん！ 儂の命に代えても、お主は守る！」

真希の心臓が、跳ね上がった。本人の意味するところは違うのだろうが、こんな状態でそんな事を言われて、反応せずにはいられなかった。

——これは釣り橋効果釣り橋効果釣り橋効果……

「ん？ どうした！？ 降りた方がええか！？」

真希の様子の変化に気付いたのか、小太郎が少し心配そうに言う。

「う、ううん！ 大丈夫！」

動揺を悟られないように、真希は威勢よく返事をしておく。

「お……。ほうか！ じゃあ、儂が言った様にやってみい！」

多少首をかしげながらも、とりあえずは気にしない事にしたようだ。小太郎は再び真希に行動を促して来る。

「……よし」

助言された通りに、背中の翼を意識する。自分の両手を広げるように、ゆっくりと翼を動かしていく。

「お？ ええぞ！ その調子じゃ！」

一度感覚を覚えてしまえば、思ったより簡単だった。真希は自慢げに翼を広げたり閉じたりという行為を繰り返す。

「かっかっかっ！ いきなりそれだけ動かせる奴は初めてじゃ！ お主実は妖怪なんじゃなかるうな！ 儂が翼出した時も驚いとらんかったしのう！」

快活に笑う小太郎。それは本当に楽しそうだった。

「ふふん。これくらいどうってことないわ！」

だから真希もそれに調子を合わせる。彼女もまた、今この時を楽しんでいた。

「かっかっかっ！ 次は広げたまんまで風を感じてみい！ 身体で感じるもんと翼で感じるもんを分けて感じるんじゃ！」

最後の部分は少し意味不明だったが、真希は翼を広げ、風を意識した時にその言葉を理解する。

翼の角度によって、翼のみが感じる風と、身体全体で感じる風の流れがあることに気付いた。同時に、一定の角度で風を受けることで強い浮遊感を感じ、別の角度に変えることで右へ左へ身体を流せることも理解する。

「よしよし。大分慣れたようじゃの！ ほじゃ、ちょいっと手を離すけえ、自分で飛んでみい！」

「え？」

突然、つかまれていた手から感触が消えた。真希の心に、少しの不安がよぎる。だが、

「飛べる！」

自分を鼓舞するように言葉を発し、真希はバランスを崩す事なく、そのまま空を飛び続けた。

「おうおう！ 見事じゃあ！」

小太郎の嬉しそうな声が聞こえる。そんな彼を見て、真希は思う。容姿はともかく、妖怪の内面は人間とそう変わりはないのではないかと。

「ねえ！」

「なんじゃ！？」

「あんたの名前、もう一回教えてよ！」

多分、また三つの丸を作ったなと真希は思った。相変わらずお面で見えないが、絶対にそうだという確信があった。

「……おう！ 小太郎じゃ！ 鴉天狗の小太郎じゃ！」

「小太郎！ あたしは真希！ 烏丸真希！」

名乗りあう二人。この時が、二人にとって本当の出会いだった。

「おう！ 真希！ せっかくじゃ！ ちっと競争と行こか！ あの一本杉までどちらが先につけるか勝負じゃ！」

小太郎が指した方向に、明らかに周囲の建造物に勝る一本の木が小さく見える。距離は二キロメートルくらいだろうか。周囲は開けた広場になっているようだ。

それを確認して、真希は自分の変化に気が付く。翼が生えただけでなく、視力もずいぶんと上がっているらしい。

「いいわよ！ 負けた方が勝った方の言うことを何でも聞くっていうのはどう！？」

「ええじゃろう！ 罰があつたほうが盛り上がるけえ！」

「えっちいのは禁止だからね！ それじゃ始め！」

真希はさつと宣言し、自分のタイミングで先にスタートを切る。

「あ！ こら待たんかい！」

後ろから小太郎の声が聞こえるが、真希は無視した。これくらいのハンデは、相手との年季の差からいって必要だろう。

だが、すぐに背後に大きな風の流れを感じる。やはり意地があるのか。ついさつき飛ぶことを覚えた彼女に負ける気はないらしい。

「だけど！」

真希にしても、負けるつもりはさらさらなかった。さらに速く飛ぶべく、翼の角度を調節しながら飛び続けた。

誰の目にも映る薄闇に包まれ始めた空を、誰の目にも映らない二対の黒翼が翔けて行く。

第二章 その1

第二章

見慣れた部屋で、目が覚める。時計を確認すると、朝の七時だった。ぐーっと身体を伸ばし、赤白チェックの寝間着姿の真希はベッドから降りた。

彼女は寝ぼけ眼で周りを見回す。女の子にしては物が少ないと言われた、簡素、ともすれば殺風景ともとれる部屋の中。机とベッドとタンスにクローゼット。あとは大きな姿見が一枚だけ。

この部屋の中で最も目を引くであろう物は、机が接する壁に掲げられた、彼女の祖父が書いた『天翔』の色紙。かなり達筆で、読むのに苦勞する。だが、真希のお気に入りの一品だ。つい先日、文字通りの体験もしている。

あの後家に帰ると、小太郎は剛錬に怒られた。どうも真希の背中に勝手に翼を生やしたことが原因らしい。

理由を聞くと、人里で不用意に妖怪の力を使うことは好ましくないとのことだった。

なるほどと真希は納得したが、それでも誘ってくれた小太郎への感謝も含めて、剛錬には一緒に謝った。

——二度と飛べなくなるのはあたしも嫌だしね。

ちなみに競争の結果は、なんと真希の勝利に終わっている。

速く飛ぶことには小太郎に一日の長があり、当然のごとく彼女は途中で追い抜かれてしまったのだが、先に行った小太郎はどこからか飛んできた一羽の鳥にぶつかりそうになり、それを避けようとし

て思いつきり横へそれってしまったのだ。

その隙に真希がゴールの一本杉に到達し、競争に勝ったというわけである。

結果について不服そうな小太郎に対し、真希は運も実力のうちと言ってやった。手にした命令権は、現在のところ保留にしてある。

「さつてと」

真希は壁掛けに吊るされた制服を手に取り、ベッドの上に放り投げる。すると寝間着を脱いでいき、下着だけの姿になった。そのまま制服に手を伸ばそうとして、ピタリと止まる。しばし考えて、その格好のままで姿見の前に立った。

肌の色は普通だと思っている。腰のくびれ加減や比較的安産型のお尻には、それなりの自負がある。全体の肉付きも無駄はない。ただ問題は――

「……んー」

ぺたぺたと下着の上から自分の胸を触る真希は、思わず眉をひそめる。美乳型といえば聞こえはいいが、やはり大きさの面で物足りないと考えてしまう。母である美春が大きいので、彼女にもその血が流れているはずなのだが、こう、一向に大きくならない。

――祖父ちゃんに言わせれば、大きいと邪魔ってことだけど。

こんな時にいつも脳裏をよぎるのは、自分よりも小柄で細身なのに、明らかに二ランクは上の十和子である。妬ましい。

「つと」

気が付くと、時計は七時一五分を示していた。せっかく早く起きたのに、このまま時間を無駄にしては意味がない。急いで制服に袖を通し、指定のスカートを身に付けると、真希は二階の部屋を出て一階の居間に向かった。

「おはようお母さん」

台所で料理をしている美春に声をかける。

「あら、おはよう真希ちゃん。今日はちょっと早いね」

美春がくるりと振り返ると、エプロンの裾がふわっと浮かび、なんだか面白い。

「目が覚めちゃったの。せっかくだからのんびり行こうかなって」「そっちの方がいいわね。急いでいると危ないことも多いし。早起きは三つの得って言うから、今日は何か良いことがあるかもしれないわね」

話しつつ、美春は真希の前に朝食を並べていく。ご飯に味噌汁に銀鮭とおひたし。あと忘れてはいけない出汁巻き玉子。完全無欠な和食だった。

「それって、三文の得じゃなかった？」

「そうよ。でも、三文なんて今は使っていないから、三つの方が楽しいと思わない？」

美春の言葉に、真希は内心納得した。それに、三文より三つの方がお得な気がする。

「まあ、そうかもね。それじゃいただきますーす」

真希が美春の朝食に舌鼓を打ち、洗面所で身だしなみを整え終わった頃には、時刻は三十五分を回っていた。

「それじゃ行つて来まーす」

「車に気を付けるのよー」

「大丈夫大丈夫」

玄関のドアを開け、朝日に身を浸す。この時間ではまだ、爽やかとも言える陽気だった。

これは一つ得なところかもしれない。ちょっぴりウキウキしながら、真希は学校へ続く道を歩いて行く。

真希の家から学校へ行くためには、一度大通りに出てから直進する手もあるが、住宅街を通るちよつと狭い道を使うことで、大幅に時間を短縮することが可能だった。

そんな道に行く真希の背後から、突然エンジン音が聞こえて来る。

「おつとと」

真希は他人の家の塀に身を寄せ、後ろから来る車をやり過ごす。

横切られる際、風でスカートが舞い上がりそうになるのを押さえねばならなかった。狭い道だというのに、あまり減速をしない性質の悪いドライバーである。

「ふう」

ぱつぱと服に付いた埃を払い、きよろきよろと前後を見る。先の一台以外、車の影はない。

——ここって狭いけど、車も裏道として使うから結構危ないんだよね。

軽く溜息を吐きながら、一步足を踏み出す。すると、靴のつま先が何かを蹴っ飛ばし、高い金属音とともに大きめの円形の物体がコロコロと転がって倒れた。

「わお」

真希は思わず顔をにやけさせる。転がった物体は五百円玉だった。塀のそばに落ちていたものをたまたま蹴ったのだろう。車を避けなければ見逃していた。

周囲を見回し、真希はさも自分が落としたかのようにして五百円玉を手中に収めた。早起きで二つ目の得である。

ここまで来ると、三つ目もいつい期待してしまう。そんなほどよくご機嫌な心持で歩いて行くと、角を曲がった所で後ろから声をかけられた。

「あ、真希ー」

ひょいと振り返ると、そこには朝日に輝く金髪を揺らした小柄な少女、十和子の姿があった。

十和子はトットと小走りで真希の傍に來ると、その金色の瞳で真希を捉え、満面の笑みで挨拶をした。

「おはよう真希。今日もいい天気だねー」

「おはよ。人のこと言えないけど、今日は早いね」

「なんか目が覚めちゃってねー。せっかくだから朝の町を満喫しようかなーって」

にはーっと幼い子どもの様に笑う姿は、小柄な十和子によく合っている。抱き締めたい衝動を抑えるため、真希は自分を抱き締めて動きを封じた。

「えっと、真希ってたまに突然自分を抱き締めるけど、それって何かのおまじない？」

人さし指を顎に当て、首を傾かしげる十和子。いちいち仕草が可愛い。そして自分の危険性についての認識が無さ過ぎる。

真希は突き上げる衝動にぐっと耐え、ややあってから体の力を抜き、束縛を解いた。

「ちよつとした自己防衛反応よ。気にしないで」

何とか平静を保って返事をする、十和子は、そう？ と特にそれ以上気にした様子もなく、真希と一緒に歩こうと示した。

「そうそう、今日クラスに編入生が来るらしいよ」

一緒に歩き始めてすぐに、十和子がそんな話を切り出して来た。彼女の手にはいつの間にかペンとメモ帳が握られている。

「編入生？」

真希が怪訝な顔を作る。六月も半ば過ぎ。期末も近くなってきたこの時期に、編入生とは珍しかった。

「うん。何かね、家の事情で、義務教育期間は学校じゃないところで勉強してたらしいよ。だから色んなところで入学断られて、パパ

の所に回ってきたんだって」

メモ帳をパラパラめくりながら十和子が説明する。相変わらず情報が多い。しかも個人情報部分にまで手が及んでいる辺りが恐ろしい。

「義務教育期間を学校に行っていないって、それ学力的に大丈夫なの？」

「それがねー。当然編入試験があっただけど、国・数・理・社のテストが百点だったらしいよ」

へえ、と感心しかけて、真希は十和子の言った科目に一つ足りないものがあることに気が付く。

「あれ？ 英語は？」

「あゝ……」

突然十和子が口ごもった。そして顔に苦笑いを浮かべ、

「英語だけは〇点なんだよね実は」

見事なほど弱点が見え見えの編入生のようである。

「えっと、いくら他の点数がよくても、さすがに英語〇点はまずくない？」

真希が率直な疑問を口にする。せめて二十点でも取っていれば何とでもなりそうなものだが。

「私もそう思ったんだけど、パパが言うにはうちの高校の編入試験

つて、『五教科合計』で三百五十点以上が条件だから、各教科の点数はどうでもいいんだってー」

結構いい加減だねー、と真希に同意を求める十和子。真希はそれに賛同せざるを得なかった。

とはいえ、まさか一つの教科を他四つで完全に補おうとする者がいるなど、想定していなかったのだろう。真希にしてもそんなことは絶対に考えない。

「まあ成績の方はいいわ。十和子のことから、相手方のデータは一通り揃えているんでしょう？」

真希の言葉に、しかし十和子は残念そうに首を振る。

「ううん。実はこれ以上はさっぱり。準備はしたんだけど、今回は盗聴器とかカメラとか、全部回収されちゃったの。だから、今話したことは別ルートで仕入れた情報なんだー」

さらりと問題発言をする十和子。ぎよつとする真希だが、それは十和子の発言に含まれる怪しい物品によるものではない。十和子が口にした言葉の意味そのものに驚いたのだ。

「珍しい。何か失敗したの？」

十和子が再びふるふると首を振る。メモ帳とペンをしまいこみ、悔しそうに顔をゆがめた。

「正確に言うと、声はちょっとだけ拾えたの。パパが理事長室にその編入生とお父様を案内してきたんだけど、編入生のお父様がすごい勘が働く人みたいで、まだ部屋に入っていないのにカメラと盗聴器

の位置全部言い当てて、パパが回収しちゃった」

「……それはまた、ずいぶんと凄そうな人ね」

真希には十和子の悔しさの度合いは分からないが、件の編入生の父親が並みの人物ではないことは理解した。編入試験の結果も合わせる、編入生自身も只者ではない可能性は高い。

「やっぱり多少問題でも、廊下にもセットしておくべきだったなあ。別の何かが映っても他の何かに使えたかもしれないし」

「こちら」

真希は危うい発想に浸る友人をたしなめるため、おでこを軽く指で弾いておく。

「はうっ」

両手でおでこを押さえ、十和子は追撃をガードする。その姿もやはり、可愛らしい。

「まあ、結局は謎ってことだけど、今日これから会うことになるんだし、楽しみにさせてもらおうじゃない」

三つ目がまだだしね、と続けた真希の言葉に十和子は首を傾げていたが、真希はそれには構わず空を見上げる。一羽のカラスが、頭上を横切って行った。

第二章 その2

結論から言ってしまうえば、真希としては、三つ目の得を手に入れた気にはなれなかった。

あれから十和子と二人で何事も無く天命神高校の敷地に足を踏み入れ、これまた何事も無く自分のクラスに達し、騒がしい教室内を通って真希はすんと窓際の最後尾に座る。

荷物を置いた十和子がすぐにやって来たので、二人でとりとめもない話をしていると、ホームルームには少し早いタイミングで担任の男性教師が現れた。

「ちよつと早い全員席につけ。今日はこのクラスに編入生が来るから、話しておかなければならんことがある」

教師の登場で若干静かになっていた教室だが、編入生と聞いてにわかに騒がしさを取り戻す。

「ほらほら、さっさと席につけ」

教師が促がし、のろのろと生徒たちは自分の席へと戻り始める。全員の着席を確認して、教師は本題を話し始めた。

「あー、最初に言ったが、今日はこのクラスに編入生が来る。ただ、ちよつと特殊な環境で育ったということで、君たちとは若干異なる面が多い生徒だ」

特殊な環境で育った謎の編入生。そんな、どこか非日常を感じさせる属性を持つ存在に、教室内の生徒は三度ざわざわとし始める。

そんな中で、真希は一人落ち着いていた。すでに十和子から大筋の話聞いていたというのが最大の理由だが、つい先日本当の非日常を体験したばかりというのも、浮ついた気持ちにならない理由の一つだった。

——興味がないわけじゃないんだけどね。

ちらりと十和子の席のほうを見れば、彼女もちょうどこちらを向いたらしく、バッチリ目が会った。真希が肩をすくめて見せると、十和子の口元に小さな笑みが浮かんだ。

「あー、いちいち騒ぐな。それで、だ。まあ多少とつつき難く感じるかもしれないが、先生が先立って保護者の方と一緒に会った時は、少なくとも内面はとも感じのいい生徒だった」

教師がおかしなことを言った。ざわつきの収まりきらない他の生徒は気が付いていないようだが、真希は気が付いた。十和子も違和感を覚えたらしく、首を傾げている。

「あー、まあ、私が言ってしまうよりは本人の口からの方がいいだろう。……黒羽君、入って来てくれ」

クラス全員の視線が教室前側の引き戸に向けられる。スーッと引き戸が開き、噂の編入生がゆっくりと教室の中に入ってくる。一步、二歩目で、編入生の姿は教室中から完全に捉えられるようになった。

教室から、音が消える。

十和子もまた目を見張り、完全に言葉を失っていた。だが、この場において最も大きな驚愕に支配されていたのは、最

も落ち着いていたはずの真希だった。

「……………はい？」

真希は自分の見ている光景が信じられなかった。教室中が無言の静寂に包まれる中、編入生は何ら構うことなく歩を進め、教師から一步離れた位置に立ち、教室全体を見回した。

俗に言う、山伏の服装。人のような鳥のような、鼻ともくちばしとも取れる長い突起を持つ黒いお面。どこからどう見ても、それは真希の知る鴉天狗の小太郎だった。

「…………えっと、黒羽君。自己紹介をお願い出来るかな？」

黙ったままの小太郎に、教師がそう促がした。小太郎はもう一度教室全体を見回し、すう、と小さく息を吸った。

「僕はから…………黒羽小太郎ゆうもんじゃ。故あって今まで学校ゆうもんに通ったことはない。ここが初めての学校ゆうことになる。この格好もやむにやまれぬ事情があつての。いくらか目障りじゃとは思うが、勘弁して欲しい」

深く頭を下げる小太郎。きっちり三秒経ってから、彼は体勢を起こした。

「ゆうわけで、よろしくお願いしたい」

小太郎の自己紹介が終わる。言っていることは、その格好から考えればまともに過ぎるものだった。しかし、クラスの反応は当然のようにドン引きだ。

そんな、周囲が奇妙な編入生におののく中で、真希は片手で顔を

隠し、目まぐるしい思案の最中であつた。

——先生の「少なくとも内面」ってこういう意味だったのね。

つまりは、言い換えれば外見が普通じゃないという意味だったのだ。確かに小太郎のあの外見は、世間一般から見れば奇妙でしかないだろう。

せめてお面でも無ければと思うが、彼はあのお面に対して並々ならぬこだわりと執着、誇りと言った方が適切だろうか。それがあるそれに、と真希は思う。小太郎派あのお面を自分を受け入れられるかどうかの試しに使っている節がある。いや、あの時の言葉からしてそれは間違いない。

そんなことを考えていると、教壇に立つ小太郎が、三度クラスを見渡した。そして、ある方へ向けて、視線を固定した。窓際最後尾、即ち真希の方へと。

「おう。真希。ちょっとぶりじゃの」

その瞬間、教師を含めたクラス中の視線が、真希の方へ向けられた。その目全てが訴えている。お前はこいつの知り合いなのか？と。

——あんの馬鹿！ 状況考えなさいよ！

そう思ったところでもう遅い。今やこの場の中心は小太郎ではなく真希である。誰もがその一挙手一投足に注目していた。

針のむしろ状態の真希は、それでも何とかごまかせる方法はないかとさらに必死に頭を働かせる。

「せんせー」

どこか場違いにも思えるほどのんきな声が発せられた。
全員の視線がまたそろって動き、声の主に集中する。立ち上がった大きく手を上げているのは、十和子だった。

「ん？ どうした天命神。何かあったか？」

「いえ、そちらの黒羽君にいくつか質問したいんですけど、駄目ですか？」

それは、いつもの笑顔だった。見る者の心を洗うような、幸せを感じさせる笑み。教師が若干鼻の下を伸ばしながら、

「そ、そうだな。黒羽君、こういう場合は皆からの質問に答えるものなんだが、構わないかい？ もちろん、言いたくないことは言わなくていいよ」

小太郎は教師の顔を見て、次に笑顔のままの十和子を見た。

「ええじゃろう。答えられる範囲でなら答えようか」

何故かえらそうに腕を組む小太郎。いや、身構えたのだろうか。
その仕草に真希が不審を抱いているうちに、十和子の第一問目が放たれた。

「編入試験を受けたんですよね？ 何点取れたか教えてもらっていますか？」

「おう。英語以外は百点だと聞いた」

百点の言葉を聞いて、小太郎と十和子に集中していた生徒達がひ

そひそと話し始める。やれ天才だとか、英語は苦手なのかとか、そんな会話ばかりだ。

「すごいですね。でも、英語以外ということは、英語は苦手だったります？」

「正直苦手じゃな。そもそも、僕は基本的にあちこちにある横文字の片仮名が全く理解できんのじゃ」

十和子の第二問。小太郎はお面で隠れているから仕方がないとして、十和子の表情が全く変わらないのが真希の頭に引かかる。

「そうですか。えっと、それじゃ次は、好きな物と嫌いな物を教えてもらえますか？」

「好きな物はさ……餅^{もち}じゃな。嫌いな物は鯖^{いわし}じゃ」

十和子の質問は、ごく普通のものばかりだった。それに答える小太郎の回答もまた、ごく普通である。五問目になると、欠伸を漏らす生徒が出るほどに、場の空気は弛緩していた。唯一、真希だけが緊張を解くことが出来ずにいる。

そして、十和子の八問目。

「じゃあ、これが最後の質問なんですけど——」

やはり全く表情を変えない十和子。このまま何事もなく終わって欲しいと願う真希だったが、

「——真希と、どういった関係ですか？」

十和子が変わ化した。姿勢も、表情も、まるで変わってはいなかつ

たが、間違いなく変わっていた。

弛緩していた空気が、一気に張り詰める。真希、小太郎、十和子の三名を除く面々は、それぞれ順番にあつちを見こつちを見とせわしなく首を動かしている。

質問を受けた小太郎は、ゆつくりと組んでいた腕を解き、顎に手を当てて一度首を鳴らした。

「真希か。そうじゃのう。まだ確定的ではないんじやが、真希は儂の婚——」

「あーっ!!」

小太郎が言い切る前に、真希は大声を上げてそれを押さえ込んだ。ついでに両手で机を叩いたので、掌が痛みでひりひりしていたが、努めて無視する。

「先生！」

「な、何だ烏丸？」

突然叫ばれ、さらにすごい形相で見つめられたため、教師はわずかに後ずさりをする。真希はそんなことには構わず、とにかくこの場を切り抜きたい一身でまくし立てた。

「今日の一限自習でしたよね？ せつかくなのでこれから黒羽君を学校案内してきます。いいですか？ いいですよね」

さつと最後尾から生徒の机の列の間を通り抜け、なんとなくぼけっとしているような小太郎の手をむんずと掴む。

「真希？」

状況がいまいち飲み込めていない小太郎がうかがうように真希を見たが、この場で説明するわけにはいかない。とにかく、一刻も早くこの場を退散することだ。

「後で説明するからとにかく今はついて来て」

真希が小声でボソツと伝えると、小太郎ほんの一瞬迷う様なそぶりを見せて、しかし何も言わずに小さく頷いた。

「それじゃ先生ちよつと行つて来ます」

小太郎の手を握ったまま、真希は彼を引きずるようにして教室を後にする。

教室を出る際に少し振り返った先で、十和子が探るような目を向けてきていた。だが、視線は閉じられた扉によって遮られ、見えなくなった。

第二章 その3

半ば逃げる様にして教室を飛び出した真希は、とりあえず人目に付き難く、かつ話し声が響かない場所を考え、屋上へやって来た。物陰や隙間も含めて調べた限り、先客はいないようだ。

「ここならしばらくは大丈夫そうね」

真希は息を吐き出し、ようやく緊張を解いた。塔屋のつくる日陰にいたため比較的涼しいが、先ほどの一幕で体が火照り、うっすらと汗をかいてしまっている。そよそよと吹く風が、その熱を少しずつ奪って行くのが気持ちよかった。

「で、真希。いったい何用だと言っくんじゃ？」

のんきな口調で小太郎が尋ねる。真希はつい殴り飛ばしたくなる衝動に駆られたが、まずは諸々の確認が先だと抑え込む。

「それは、あたしの台詞よ。いったいぜんたい、何だってあんたがここに編入生として来てるわけ？」

「なんじゃ、そんなことか。これも人間との共存の一環じゃ言うての。親父が学校に通えと言ったんじゃ。せつかくじゃし、真希がおる所がええじゃろうゆうことで、編入試験とやらを受けたんじゃ」

余計なことを、と思わずにはいられない。真希は毛むくじゃらの巨漢を思い出し、想像で鞭を打っておいた。全く効いていな様子だったが。

「ここに来た理由は分かったわ。それじゃ、何で制服じゃなくてそ

の格好のままなわけ？ この学校、制服指定のはずなんだけど」

「そりゃ、あんな窮屈なもん着るんが嫌じゃったけえ。理事長とかいう奴に会った時に、このままでいいかと聞いたら、構わんと許可をもらっておる」

「うっわ何それ。ずるくない？」

それはつまり、小太郎が私服での登校を許されているということだ。

真希は学校指定の制服が嫌いなわけではないが、生徒の中には制服指定という規則そのものに不満を持つ者がいる。そんな生徒が小太郎の特例を知れば、自分も自分もと続き、収集が付かなると理事長は考えなかったのだろうか。

「ずるい、か。間違っではおらんが、儂は一応宗教上の理由でこういう服装をせねばならんということになっておる。この『宗教上』という理由をつければ、大抵の無理は押し通ると言われたけえ。問題はなかるう」

小太郎の言葉を聞いて、真希は呆れかえるより他にない。理事長はとんでもない方法でこり押しするつもりの方だった。

ただもし、小太郎の格好がごく一般的な服装であれば、そんな無茶が通るはずもないが、幸いと言うべきか、その格好はどう見ても普通ではなかった。

「うちの理事長って結構ユニークな人なのかしら……」

よくよく考えてみれば、あの十和子の父親である。平凡であるはずがなかった。

「まあいいわ。大体の理由は分かったから。じゃ、最後の質問。あ

んたさつき十和子に何て言おうとした？」

少し声のトーンを落として尋ねる。真希の今後の学校生活を守るためにも、はつきりと釘を刺す必要があった。

「うん？ あの女の最後の問いのことか？ 単に、真希は僕の婚約者候補じゃ、と言おうとしただけじゃが？」

その言葉に迷いが無い。明らかに、何も問題は無いと考えている証拠だった。思った通りの返答に、真希は眉をひそめてこめかみを押さえる。

「単刀直入に言うておくわ。あたしとあんたのおかしな関係については、絶対に誰にもしゃべるんじゃないわよ」

「何故じゃ？ 僕が鴉天狗だという事実は無論伏せるが、真希が僕の婚約者候補じゃということは、別に知られても問題は無いじゃろう？」

「問題大ありよ。よく考えなさい。あたしはまだ高校生の、十六歳の女の子なのよ。そんなどっかの王侯貴族とか昔の武家でもないのに、この歳で婚約云々なんて話が知られたら、あたしは明日から学校に来れなくなるわよ！」

真希が必死に訴えるも、小太郎の様子ではいまいち理解出来ないようだった。

「言い方を変えるわ。あんた、当然だけど自分が妖怪だつてばれたら、学校に来れなくなるわよね？」

「おう。それはそうじゃろうな。だからこそ人の姿に化けておるわけじゃし」

「あたしにとって、あんたとの関係がばれるのはそういうことだっ

て言えば、理解できる？」

風が止まった。真希が睨みつける先で、小太郎は何かを言おうとして、止めた。しばらくそのまま何かを考えていたようだが、ややあつて今度はちゃんと言葉にした。

「なるほどの。これは確かに僕の失敗じゃな。分かった。真希の言う通り僕との婚約云々に関することは、この場では伏せておこう。じゃが、全くの他人というのはさすがにもう無理じゃ。これはどうすればええかのう？」

「そうね。そこはもういいわ。というか、全くの他人なんてあたしはそんなこと考えてなかったわ。あんたのこと、嫌いなわけじゃないもの。だから……そうね、父親同士が知り合いで、ちよつと前に偶然会つたつてことにしておきましょうか。事実として大筋で間違つてないし」

「そうじゃの。確かに大きく間違つ……すまん、真希今何と言つた？」

小太郎が突然そわそわし始め、真希にそんなことを聞いてきた。真希は小太郎の変化にキョトンとしながら、

「え？ 事実として大筋で間違つてな——」

「いや、もつと前じゃ」

「全くの他人なんて——」

「その後じゃ！」

小太郎が、がっつと真希の肩を掴む。突然の行動に、真希はかなり驚いた。掴まれた肩が少し痛い、驚きが勝つたせいか気にならない。お面の下に隠れた顔が、どこか必死なように思えて、真希はゆ

つくりと、求められた言葉を口にする。

「あんたのこと、嫌いなわけじゃないもの……？」

言い終えた途端、どこか必死になっていた小太郎の身体からすつと力が抜け、少しうつむき加減に下を向いた。いつの間にか、掴まれていた肩の痛みも無くなっていた。

「えっと、小太郎？」

小太郎の急激な変化に不安を覚えながら、真希はそつと手で触れようとして、がばつと跳ね起きた小太郎の顔にまた驚いて手を引っ込めた。

「感謝するぞ、真希」

びっくりしている真希にそれだけ言って、小太郎は肩を掴む手を離し、すつと身も離れた。真希は何がなんだか分からない。だが、礼を言われたのだから、何か言わなくてはならないだろうと、

「……よく分からないけど、どういたしまして」

そう応えた。

静寂が屋上の一角を支配する。止んでいた風が、また吹き始めていた。そんな、二人を包む少しの静寂は、一つの電子音によってあっさりと打ち碎かれる。

「携帯？」

真希はポケットから携帯電話を取り出し、画面を開く。十和子が

らの電話だった。同時に時計も確認し、今がまだ一限の時間であることを確認する。何だろうと思いつつも、電話に出る。

「もしもし？」

『やっほー真希ー』

電話の向こうから元気な声が聞こえてくる。おおっぴらにかけてきている様子から見て、少なくとも教室ではなさそうだった。

「どうかしたの？」

『どうかしたのはそっちじゃない？ いきなり編入生君と駆け落ちだなんてー』

「駆け落ちじゃないわよ！」

真希は思わず叫んでいた。不思議そうに小太郎が見てくるが、とりあえず無視である。

『まあ冗談は置いて、今どこにいるのー？』

「え？」

『私も暇だから、真希の手伝いしようかなーって。ほら、私だと普段入れないところも入れるじゃない？ パパに頼まれたって言えば特に誰も疑わないし』

「普通に案内するだけだから、そういう所は別に大丈夫だって」

真希は少し慌てる。とりあえず小太郎は言い含めたが、今の段階で下手に十和子に関わらせると、根掘り葉掘り尋問されて全てがばれてしまいかねない。ホームルームのように周りの目という制限があればこそ、十和子も突っ込んで聞かなかったようだが……

『えー。なにに、独り占め？ やっぱりそんな感じの関係なの？』

「いや、違うから。それは断じて違うから」

真希は思わず脱力してしまう。確かに、連れ出し方がちよつとま
ずかったかなとは思ったが、あの時はどうしようもなかったのだから仕方がない。

『ふーん。ま、それはいいや』

十和子もそれ以上の詮索はしてこなかった。だからこそ、真希は
少し緩んだ気持ちを締め直す機会を失っていた。

『そうそう。真希、これだけは聞いておきたいんだけどー』

いつの間にか、いつもの調子で十和子と電話している気分になっ
ていた。そこを、突かれた。

『彼、普通の人間じゃないでしょ？』

十和子の言葉は、鋭い槍となって真希を貫いた。

軽く流せばよかったのに。真希は息を吞んでしまう。十和子相
手に、この反応は致命的であった。

小太郎が真希の変化に気が付き、不審に思っ近づいてくるが、
真希はそれを手で制した。

『……まあ、初対面じゃないんだから、知っていて当然なんだろう
ね。私も気付くべきだったかな。編入生君のお父様に仕掛けた物を
看破された時に』

電話から聞こえてくる十和子の口調が、いつもと違う。可愛らし
いと表現するには、あまりに異質。背筋がぞくぞくするような、高

貴ささえうかがわせる。

「な、何言ってるのよ十和子。そりゃ、見た目はどう考えても変だけど、中身はいたって普通じゃない？」

なるべく動揺していることが分からない様に話したつもりだが、所々で声が震えてしまう。

『真希がカードを見せないのは珍しいね。あくまで、白を切ってみる？』

無駄だと思うよ。言外にその言葉を含ませた、十和子の挑発。しかし、真希にはまだ最後にして絶対のカードがある。

「白を切るって、何か普通の人間じゃないって証拠でも見付けたって言うの？」

無論、そんな証拠は無い。いつかのように翼を生やしたわけでもなく、その服装とお面から異様な雰囲気ではあるが、身体の造形は人間のそれと変わりがないのだ。

十和子は何故小太郎を疑ったのかは分からないが、教室での質問程度では何の証拠にもならない。確信は得ていないはずだと、真希は考えていた。

それが、甘かった。

『そうだね。ギリギリ間に合ったけど、決定的ではないかな。キーワードとして鴉天狗、妖怪、真希がその編入生君の婚約者候補であつたから、私の情報の中で仮説は立ってるんだけどね』

「なっ……」

真希は反射的に辺りを見回した。もう一度死角になっているところや、隠れられそうなところを全部調べるが、誰もいない。

『ああ、私はそっちにはいないよー』

その言葉が聞こえると同時に、キィと屋上と校舎内をつなぐドアが開いた。びくりと反応する二人の視線の先で、ゆっくりと屋上に出来たのは、携帯を片手に微笑む十和子だ。

「まさか、ずっといたの？」

「『ご名答ー』』

十和子の声がステレオで聞こえてくる。彼女は携帯をたたんで制服のポケットにしまい、代わりに小型のラジオか音楽再生機のようなものを取り出した。

「コンクリートの壁越しにも音が聞ける物があつてね。今日は天気がいいから、陽射しを避けて日陰にいると思ったの」

完全に読まれていた。人目を避けて屋上に行くことも、日陰で話し込むであろうことも全部だ。

唇を噛む真希に、小太郎が心配そうに声をかける。

「真希」

「黙ってて」

心配されたことには感謝しつつ、しかし小太郎には黙っていてもらう。

状況は最悪だった。小太郎には事情を隠すよう説得はしたが、細

かい部分はまだ十分とは言えない。こんな中途半端な状態では、確実に十和子の追及を逃れることは出来ないだろう。

——時間を稼がないと駄目ね。

そのためにも、いかに十和子を撒いてこの場から逃げるかだ。後のことは後でいい。真希は必死に頭を働かせて状況の打開策を検討するが、妙案が浮かばない。

真希と小太郎の足であれば、おそらく十和子から逃げ切ることは可能だ。しかし、出入り口は十和子の後ろにある一つだけ。横をすり抜けるにしても、下手に十和子がこちらを妨害して、結果転倒させるのが怖い。

かといって、真希が何と言おうが引き下がりはいらないだろう。前進以外の選択肢が無く、だがその前進のリスクが大きすぎる。

「さあ真希。観念して全部話してね」

その小さな身体で、しかし大きな胸をドンと張り、十和子は真希に宣告してきた。

「十和子、あんた言いたくないなら聞かないって、この前言うてくれなかった？」

「あれはあれ、これはこれ。今は興味ビンビンだから、退いてあげないよー」

それを言うなら興味津々だといらない突っ込みを放ちつつ、真希は相手の隙をうかがうことしか出来ない。

じりじりと焦れていると、不意に十和子の視線が真希から外れた。

「編入生君、黒羽君だったけ？ 何か思いついたような感じだね。表

情は見えないけど、雰囲気で何となく分かるよ」

ぱつと真希は小太郎の方を見る。小太郎の右手が、衣装の懷に隠されていた。何かを取り出すつもりだろうか。

「真希」

ぼそつと小さな声が小太郎から聞こえてくる。

「儂が隙を作るけえ。調子を合わせて横を抜けるぞ」

それは真希も考えたが、十和子の安全を考えて断念した策だ。目で危険を訴えると、小太郎は小さく首を振って、頷いた。

「儂を信じる」

それは、あの日あの時、初めて空を飛ぶ自分に対して向けられた言葉に似ていた。安心していいのだと感じられる、不思議な力のこもった声だった。

だから、真希もまたこくりと頷く。どうせこのままでは埒があかない。信じろと言っただから、信じてやろうと思った。

「うーん。覚悟を決めたみたいだけど、私の望む方の覚悟じゃないみたいだね」

十和子がわずかに身構えるが、それでもまだ自分の優位を疑ってはいないだろう。

「行くぞ、真希」

「いつでも」

懷に隠されていた小太郎の手が引き抜かれる。そこには何も握られてはいなかったが、真希の気のせいではなければ、何か不思議な霞のようなものを纏っているように見えた。

小太郎がその手を、十和子に向ける。すると、

「きゃっ」

突然十和子のスカートがめくれ上がり、ふりふりの付いた下着を白日の下に晒した。十和子は慌ててスカートを押さえ込んで隠そうとするが、まるで彼女のスカートが生きてるかのように、その行動に反してふわふわと浮かび上がり続けている。

「え？ え？ なにこれ！？」

慌てふためく十和子。その不思議な光景に真希は一時目を奪われたが、自分の隣を風が走り抜けるのを感じて我に返った。先に走り出していた小太郎の背中を反射的に追いかけて、真希は十和子の横を難なくすり抜ける。

「あっ！ 二人ともちよつと待って！」

十和子の声が聞こえるが、とにかく今は逃げるのが先決だった。先行していた小太郎は、真希が階段を駆け下り始めた頃にはすでに踊り場に到達し、四階に直結する階段を下りようとしていた。

離されていることに焦りを感じ、真希は六段ほどを一気に跳躍して踊り場に着地。身をひねってすぐに小太郎に追いつこうとする。

それが、いけなかった。

「あ……」

無理な動きで足をもつれさせ、真希は踊り場から一段目を下りる寸前で、大きく前に投げ出される形になった。

「真希！」

小太郎の声が聞こえる。驚くほどゆっくりと流れる時間の中で、真希は自分を振り向いて硬直している小太郎を見た。直後に訪れるであろう痛みに恐怖し、思わず目を閉じて、思いの他柔らかい衝撃を身に受けた。

——え？

その衝撃の後は、落ちる感覚もどこかにぶつける感覚もなく、ただ何かに包まれているような感覚だけがあった。恐る恐る目を開いてみれば、視界に映るのはどこかで見た白っぽい服。

「真希」

頭の上から声がする。ついと顔を上げれば、今までで最も近い距離に、小太郎のお面があった。真希は、小太郎に抱き締められるような形になっていたのだ。そう認識した途端、かっと身体が熱くなる。

「えええつと、小太郎？」

その腕の中で混乱する真希。しかし、小太郎はそんな彼女を無視して、

「……すまん。結局、ばれてしもうた」

悔しそうにそう言って、抱き締めていた真希を解放する。未だ混乱しながらも少し離れて、彼女は小太郎の変化に気が付いた。背中から、翼が生えている。それを見て、何が起こったのかを理解した。落ちる寸前で、小太郎が真希の身体を抱き止めたのである。本来なら届かないはずの距離を、飛ぶことによって埋めたのだ。

その、代償が――

「なるほどねー。これはさすがに驚いた」

のんきな声。見上げた先には、勝ち誇ったような十和子の顔。

「さて、やっぱり全部説明してもらいたいけど、まだ逃げる？」

またも盛大な溜息を吐き出して、真希は降参の意志を示すために両手を挙げた。

それを見ていた小太郎が自分の真似をして両手を挙げる姿がなんだかひどく面白くて、真希はこんな状況だというのに、クスリと笑ってしまった

第二章 その4

屋上での一悶着の後、真希と小太郎は出来うる限り事情を説明するということで、ひとまず十和子に認めてもらった。

真希としては、どうせ自分の知っていることのほとんどはすでに知られてしまっているもので、今更何を聞かれようとさして変わらないだろうという感じだった。

とりあえず、話し合いは放課後ということで、三人は二限の授業が始まる直前に教室へと戻ってきた。その時のクラスメイトの反応は、おそらく生涯忘れることは出来まい。

端的に言えば、彼らは討論をしていた。黒板にはオッズの文字と真希と十和子の名前があり、その下に小数点を含む数字が書き込まれている。そこまでで、大体彼らが何をしていたかが分かった。

「くだらないことやってんじゃないわよ！」

真希が一喝すると、賭けに関わっていたものは全員、それこそ見事なまでの連係プレイでその痕跡を瞬くに消し去り、そろって明後日の方を向いて口笛を吹き出した。しらばっくれるつもり満々である。

「落ち着いて真希。この程度ならいいじゃない。変な目で見られただけじゃないよー？」

十和子の言葉で、真希の沸騰していた頭が一気に冷める。その通りだった。あんな変な飛び出し方をして、それこそいらぬ陰口に発展していたかもしれないのだ。賭け事のネタにされるくらい、どうということもなかった。

「とりあえず席に戻るー。二限始まっちゃうし」

真希は素直にそれに従う。ところが、歩き始めた真希の制服を、後ろでぼーっとしていた小太郎がつかんできた。

「何？」

「いや、僕はどこに座ればいいんじゃない？」

はたと気が付く。真希が連れ出したため、小太郎の席がどこになったのか聞いていないのだ。

「あ、黒羽君は烏丸さんの隣だよ。先生が、その方が都合がよさそうだって言ってた」

二人の近くにいたクラスメイトがそんなことを言ってくる。

「あ、そうなの？ まあ、いいか。ありがと」

そのクラスメイトにお礼を言って、真希は小太郎を伴って自分の席に向かう。席に座る真希の右隣で、小太郎も自分の場所となった席に腰掛けた。その後は、何故かそのまま腕を組んでじっとしている。

授業の準備をしていた真希は、その様子にふっと疑問が浮かび、小太郎に尋ねてみる。

「そっいえばあんた、教科書とか持ってるの？」

どう見てもカバンの類は持っていない。筆箱らしきものとノートだけは思い出したように懷から取り出してきたが、やはり教科書は

出てこない。

「いや、まだ持っておらん」

予想通りの返答。真希は自分の教科書を示して、

「一緒に見る？」

「ありがたいが、ここからではちと角度が悪いな。気持ちだけ受け取っておく」

「いやいや、それならほら」

真希は自分の机をずりずりと動かして、小太郎の机と横つなぎにする。

「こうすればいいだけよ」

最後尾なため、後ろを気にしないでいい分こういった融通は利かせ易い。

「列を乱しても構わんのか？」

そんなことを心配する小太郎は、どうやら基本的な学校のシステムや規則は理解しているようだ。ただ単に、こういう場合に融通を利かせるという発想が無いのだろう。そこは追々教えていけばいいと、真希は思う。

「いつもじゃないけど、こういう時はいいのよ」

そう答えて、教科書を机と机の間に置く。さながら、あちらとこちらををつなぐ架け橋のように。

「感謝する」

「どういたしまして」

小太郎の言葉に、真希はくすぐったいような笑顔を返した。

第三章 その1

第三章

小太郎が真希の学校に編入生としてやってきてから、あつという間に丸一週間とちよつとが経過した。当初こそ、その奇抜な様相から多少敬遠されたりもしたものだつたが、三日目辺りにはごく普通にクラスに溶け込んでいた。

生来の明るさしかり、意外にも勉強が出来たことも要因だろうか、真希は思う。

知らぬ間にクラスの男子連中に宿題を見せていたりするのだから、クラスでの確固たる地位を確立させるのも時間の問題だろう。

「小太郎君、ずいぶんとクラスに馴染んで来たよね」

授業の合間の短い休み時間。真希は十和子とともに隣の席に座る小太郎を観察していた。彼の周りには数人のクラスメイト。全員がノートを持っており、小太郎が何か言う度にちよこちよこ書き込みをしている。

「最初はどうなることかと思ったけど。まあ、付き合ってみれば悪い奴じゃないことは分かるし、外見の奇抜さに慣れちゃえばただの一生徒よ」

「小太郎君、豪快な性格をしてるからねー。兄貴分って感じで、そのうち人気が出てくると思うよ。最近、そういった男の子って少ないから」

十和子の言葉に、真希は概ね同意した。ただ、後で付け加えられた、うかうかしていられないんじゃない？　と言う言葉には、さっ

ぱり意味が分からないと返しておいた。

確かに、小太郎はわずかの間に学校の中に溶け込もうとしている。それは先の彼自身の性格などによるものの他に、人里へ来る上での最低限必要な知識を予め覚えていたことも一因だろう。

それこそ物語でよくありそうな、一般常識に欠けるキャラが暴れ回るといふ展開も予想出来たのだが、小太郎はせいぜい一昔前の人といったところか。

それでも一部、一昔どころかこの時代の人だと突っ込みたくなる面があったりもするが、基本的な学校社会の仕組みは理解しているし、一般人の金銭感覚も持っている。真希はおそらく剛錬が仕込んだのだらうと納得していた。

結果、真希や十和子のフォローも最低限で済んでいるので、最初に思っていたほどの苦労は無い。

そんなことを考えているうちに予鈴が鳴り、時間に正確な白衣の科学教師が直後に教室の中に入ってきた。

「あ、じゃあ私、席に戻るね」

「うん」

十和子以外の席を離れていた生徒もそれぞれ自分の席へと戻り、それを確認してから科学の教師は授業を始めた。

授業が始まってしばらくしてから、真希はちらりと横目で小太郎の様子を探ってみる。教師が板書を行う度に、小太郎は結構な速さでノートにそれを書き留めていく。

何度かそのノートを見せてもらったことがあるが、恐ろしく綺麗な字を書いてあった。あれだけの速度で、どうやって綺麗に文字を書いているのかと不思議に思ったものだ。

「――では、教科書の七十八ページを開け」

教師の声に反応して、教室内で一斉に紙を擦る騒音が巻き起こる。小太郎もまた、教師の指示通りに教科書をめくっていた。

小太郎はすでに自分の教科書を手に入れているので、いつかのように二人で教科書を共有するようなことはもうない。それが何故かちよっただけ寂しいと思い、そう思った直後に真希は首を振った。

――なんでそんなこと考えてんのよ。

自分で自分に突っ込みを入れ、小さく深呼吸をする。それでも、何かもやもやした物が胸のうちに残っているようで、釈然としなかった。

どこことなく悶々としたまま、真希は授業を流し気味にこなし、気が付けば全ての授業が終わっていた。土曜授業なので午前中のみということもあり、各々寄り道談義に部活の用意にと騒がしい。

真希は特に約束も無く、また部活に入っていない。帰り支度を整えるため、黙々と手持ち鞆に教科書突っ込んでいると、

「真希、ちよっと構わんか？」

「何？」

隣で同じ様に帰り支度をしていたはずの小太郎が、真希に話しかけて来た。前時代的な格好に不釣り合いなスポーツバッグを肩に下げて突っ立っている彼は、何となく緊張しているような様子である。

「あー、その、じゃな。よければ、今日この後ちと付きおうてくれんか？」

「……へ？」

小太郎の言葉に、真希の思考が一瞬凍りついた。だがそれはすぐに融解し、彼女がどういふことかと聞き返そうとして、

「なにになになに？ デートのお誘い？」

耳聴く聞き付けてきた十和子の言葉に邪魔されてしまった。その手には何を書くつもりか、彼女の標準装備であるメモ帳とペンがある。

「……『でーと』とは何じゃ？ 儂は単に付きおうて欲しいと言っただけじゃが」

「まさにそれだよー小太郎君。男の子がー、女の子にもがもが……」

腕を組んで首を傾げた小太郎に、ビシッとペン先を突き付けて説明しようとした十和子の口を、真希は左手を伸ばして塞いだ。

「真希？」

「ああ、いいのいいの。気にしないで。この子、たまに暴走するから」

「もがー！」

十和子が不服を現すように両手を上に挙げて睨みつけてきたが、仕草の可愛いさで眼力が半減しており、全く恐くなかった。

「まあ、で、付き合っただけいいのはつまり、あんたの用事に付きあっただけのこと？」

思考停止直後は飲み込めなかったが、ちよつと落ち着いて考えれ

ば簡単なことだった。

小太郎の口からデートの誘い等出るはずがないのだから、つまりは用事に付き合ってくれと言う意味での発言だろうと、真希は当たりを付けた。

——不覚にもちよつとびっくりしたけどね。

真希の言葉に対して、小太郎は変わらず不思議そうな感じだった。自分の言った言葉が、それ以外の意味を持つとは考えていないのだろう。

きつと、異性にドギマギした経験など無いに違いない。

「で、結局どつちなんじゃ？ 付きおうてくれるのか、くれないのか」

「いいわよ。別に、これといって用事もないし」

「もが……ぷはっ。私も、私もついて行っていい？」

真希の手を振りほどき、十和子が期待の視線を小太郎に向けた。だが、

「あー、すまん。今日付きおうて欲しいのは、ちよつと特別な用事での」

お面の表面をポリポリとかきながら、小太郎は申し訳無さそうな声を出した。真希は何故彼がそんなことを言うのか分からなかったが、十和子にはそれだけで伝わったようである。

「そっかー。残念だけど、そっちの話じゃ私は無理だねー」

彼女は残念そうにシュンと肩を落とした。

——ああ、そういうことか。

十和子の言葉を受けて、真希はようやく小太郎の特別の意味を察した。落ち着いて考えてみれば、それ以外にはあり得ないことだ。

「うむ。邪険にしてすまんのう」

「ううん。しょうがないよー。私が知ってるのは、そちら側にとつては完全にイレギュラー、間違いだもん」

あの屋上で的一件で十和子に小太郎の翼を見られてしまった結果、彼女は部外者でありながら妖怪という存在を知る人間になった。もちろん、部外者に知られたという事実は真希の両親にも剛錬にも隠してある。

ばれたら非常にややこしいことになりかねないので、十和子にも慎重な対応を求めてあり、あっさり引き下がったのはそういう理由からだ。

「じゃあ今日はこれでー」

バイバイと手を振って、真希の席を離れた十和子は、自分の席に放置してあったカバンを手に教室を出て行った。

手を振り返していた真希は、その姿が見えなくなると同時に、

「それで、どこに付き合えばいいの？」

改めて小太郎に尋ねた。

「おう。とりあえず、ここを出ようかの。外で親父が待つとるはずじゃけえ」

「剛錬さんが？」

その言葉に真希は首を傾げた。だが、たった今一つだけ確信したことがある。それは、これが本当に、デートのデの字もない用事だということだ。

——いやいや、だから分かってたって。

心の片隅で、ほんのわずかに残念な気持ちを抱いた真希は、そんな自分に盛大な突込みを入れておいた。

第三章 その2

「お久しぶりです。真希さん」

校門を出た所で、真希は髭もじやでスーツ姿の巨漢、剛錬が立っているのを見つけた。

通りがかる人々がその重厚な存在感に一瞬目を奪われ、すぐさま視線をそらしてそそくさに立ち去っていく。

——別に怖い人じゃないんだけどなあ。

小太郎に比べればずいぶんと普通の格好をしている剛錬だが、やはりその熊の如き体躯をスーツが覆っている姿は、いい意味でも悪い意味でも目立つのだろう。

「本日は無理を言ってお付き合い頂き、真に申し訳ありませんでした」

深々と、剛錬が真希に頭を下げてくる。大男に頭を下げられる女子高生と言うのは、世間的に見てどう映るのだろうか。

「いえ、別に無理ってわけじゃないですよ。今日は特に用事ありませんでしたし」

「ほうじゃ。本人がええと言っておるんじゃ。何も問題は無い」

「それ、あんたが胸張って言う台詞じゃないから」

ありがとうございます、と謝罪を感謝の言葉に言い直して、剛錬は背筋を伸ばした。実直な人だなと、真希は思う。

——ああ、人っていうか妖怪だっけ。

ともすれば、彼らが妖怪であることを忘れてしまふ。それくらいに、真希にとつての妖怪というものは人間とあまり変わりがないものだった。

「それで、あの、結局今日はどういった用事なんですか？」

「はい。実は、今日は真希さんに、我らの住処を見て頂きたいと思ひまして」

「……それってつまり、剛錬さんのお宅にお邪魔になるということですか？」

住処を見ると聞いて、真希が真つ先に思いついたのがそれだった。考えて見れば、この鴉天狗の親子が真希の家に来ることはあつても、真希が相手の家に行くことは今まで一度もなかった。

そう思うと、俄然興味が湧いてくる。よもやごく普通の人間と同じ家に住んでいるわけではあるまい。

「はい。ああ、いえ、そちらも是非ご覧頂きたいですが、本当の目的は、我ら『妖怪が住処としてゐる場所を見て頂くこと』です。無論、場所だけではなくそこに住む妖怪たちも含めて」

「……え？」

真希はその言葉を上手く飲み込むことが出来ず、微妙な顔を作つてしまふ。どうも最初に考えた内容とはズレが生じているようだ。今一度剛錬の言葉を反芻する。

「……えーっと、つまり、今からあたしは剛錬さんや小太郎が普段生活している、他の妖怪たちも暮らしている場所に行くってことですか？」

「ご理解頂けたようで幸いです」

どうもそういうことらしい。自分で言っておいて、真希はこれから見るであろう光景を想像し、ちよつとの間固まってしまった。

その隣で、小太郎は欠伸でもしたのだろう。ちよつと顔を上に向けて、右手をお面の前にかざし、わずかな間小刻みに震えていた。

「ともかく、少し移動しなければなりません。もうしばらくで足が参りますので、少々お待ちを」

剛錬に言われて少し待っていると、真希の前に一台のタクシーがやって来た。促がされるままに乗り込み、移動すること約一時間。真希の住む町を離れ、タクシーはとある峠道の途中で停車した。

「車ではここまでです」

助手席に座った剛錬は、タクシーの運転手に運賃を支払いながら、真希に降りる様に促がしてきた。小太郎はさつさと降りてしまっていたので、真希も言われるままにタクシーを降りた。そして、

「うつわー……」

降りた先、本来なら山の斜面があるだけの所に、年代を感じさせる苔むした長大な石段があることに気が付いた。

百や二百では済まないその石段を目で登っていくと、遙か上のほうに鳥居のようなものの一部が見えた。何となく、いや、確信的に嫌な予感がしたが、それでも真希はあえて疑問を口にした。

「登るんですか？」

「当然じゃ」

真希の問いに、剛練ではなく何故か小太郎が答えた。そしてそのままトントンと石段を登り始めてしまう。女の子の扱い方を全く理解していないようだ。

小太郎に優しい言葉を求めても仕方が無いことだと真希は分かっていたが、それならそれでまた別の言い方というか、何かがあるだろうと不満に思う。

——こう、やる気を起こさせる様な——

「なんじゃ真希。この程度の石段を登ることも出来んわけじゃなかろう?」

石段の途中で後ろへ振り返り、小太郎が文字通り真希を見下ろしながら、安い挑発を仕掛けてきた。これが小太郎ではない別の誰かのものであれば、余裕を持って受け流せたところだが、

「……言ってくれるじゃない」

真希は進んでその挑発に乗る。長大な石段を前に、弱気になっていた気持ちを奮い起こすために。

「登ってやるわ。石段の二百や三百、登りきってやろうじゃない」

肩を怒らせながら、真希はさっさと小太郎を追い抜き、ズンズン石段を登っていく。

「そんな調子で登ると、後で崩れるぞ」

真希の背後からそんな忠告が飛んでくる。だが、真希は登る速度を緩めない。

「ふん。あたしをそこの女子高生と同列に考えない方がいいわよ。これでも結構鍛えてるんだから」

祖父に習った武術の基礎訓練は、毎日欠かさず行っている。部活にこそ入っていないが、真希は体力においては運動部にも負けていないという自負があつた。

「なら、いいんじゃないのう」

小太郎の声は、明らかに信じていないものだった。それが、ますます真希を奮い立たせる。

「少なくとも、飛ばないあんたには負けないわ。あ、そういえば飛んでる時の勝負もあたしの勝ちだったわね」

真希はさつき見下ろされた仕返しとばかりに、くるりと小太郎へ振り返り、若干胸をのけぞらせながら勝ち誇った笑みを浮かべた。カチン、と聞こえるはずの無い音が聞こえ、

「ほほう……あのまぐれ勝ちをひけらかすか」

小太郎がずんと重い一步を踏み出した。そのまま真希と同じ高さまで登り、横に並ぶ。その行為の理由は、互いに理解していた。

「ここから始めようかの」

「勝敗はどちらが先にこの石段を登り切ってあの鳥居を通過するかどうかのよね？」

「無論じゃ。それと、妨害は無しじゃ。あくまで上だけを目指す」

「上等じゃない」

真希と小太郎は同時に背後を振り返り、黙って後に続いていた剛錬にそれぞれ荷物を差し出した。

「すみませんがお願いします」

「親父、頼む」

急に荷物を差し出された剛錬は、やや戸惑いの表情を浮かべながらも、何か納得したような笑みを浮かべ、黙って荷物を受け取った。

「せっかいですから、私が開始の合図を請け負いましょう」

その言葉に真希も小太郎も無言で頷き、一度互いに睨み付け合った後、ただ頂上のみに狙いを定めた。

「では参ります」

真希の背後で剛錬が大きく息を吸い込む音が聞こえて来る。一拍の時間を置いて、

「始めい!!」

轟雷の如き爆音が背中を押し、周囲の木々から鳥たちが一斉に飛び立つのを合図に、真希は一気に石段を駆け上り始めた。すぐ隣には、同じように駆け上る小太郎の姿がある。

ほんの一瞬その横顔を確認した後、真希は視線を前に戻し、遥か頂上を目指す。

石段の一つ一つはそこまで高くない。真希は序盤から一段飛ばして駆け登っている。

——今度も勝たせてもらおうじゃない。

一段飛ばしをキープしたまま、真希は再びちらりと隣を流し見る。半身ほど遅れて、小太郎が同じように一段飛ばして駆け登っていた。つまり、現状は真希の一步リードである。

平地では身長による足の長さ、歩数や歩幅で真希が圧倒的に不利だが、こと石段登りではそのメリットはかなり薄まる。むしろ小太郎と比較して小柄で軽いはずの真希の方に分があるといっている。

——体力で負けない限り、あたしの勝ち揺るが無い！

登り始めておおよそ三分。そろそろ頂上が近い。真希はここでスパートをかけ、小太郎を引き離そうとするが、

「ここらでいいじゃろう」

すぐ隣でそんな声が聞こえたかと思うと、真希の視界の左側に、突然小太郎の姿が映り始めた。前を向いた状態で視界に映るということは、完全に追い抜かれているということに他ならない。

「え……？」

真希が驚いているうちに、小太郎はぐんぐん真希を引き離していき、さつさと頂上に到達してしまった。その数秒後に真希が頂上に達した時には、小太郎はすでに真希から見て左側の鳥居の柱に寄りかかっていた。

最後の最後で呼吸を乱してしまったため、真希は荒い息を吐きながら小太郎とは反対側の柱に手を付き、深呼吸をして息を整える。吹き出てきた汗をハンカチで拭い、わずかに肩で息をしながら小太郎を見れば、

「儂の勝ちじゃのう」

おそらく思いつきりニヤニヤしながら、全く呼吸を乱すことなく真希を見返してきた。

どう見ても完敗である。

「あんた……なんで全然、疲れてないのよ」

「そりゃあ、妖怪と人間の体力を比べること自体間違いじゃろ」

「っ……そう。じゃあ、やる前から、あたしの負けは、決まっていたのね」

体力で負けなければという前提は、最初から成り立っていなかった。

「さすがに二回も負けるわけにはいかんからのう。前回の勝負は真希が幸運じゃったが、今回は儂の力を見誤ったことが不運じゃな。運も実力のうち、なんじゃろう？」

前回の競争の時に言った言葉を、真希は見事に返されてしまった。悔しさがこみ上げるが、同時にどこか晴れ晴れとした気分にもなる。

「そうね。今回はあたしの負けだわ。でも、これで一勝一敗。五分と五分よ」

完全に呼吸を整え、真希は勝気な表情で小太郎を見据えた。それに対し、

「ふん。相変わらず強気じゃのう。まあ、三回目の勝負はいずれまた機会が巡ってくるじゃろう。それで雌雄を決するとするかのう」

小太郎は両出を組み、真つ向から真希の視線を受け止める。
二人の間を緩やかな風が通り過ぎ、木々がさわさわとざわめいた。
そんな静かに流れていく時を、獣の唸り声が破壊する。
その直後、真希は頬を赤く染めてうつむき、

「ん？ 何じゃ今の唸り声は。ここらに猛獣はおらんはずじゃが」

小太郎はきよろきよると辺りを見回し出す。

「真希。お主も聞い——何じゃ？ 具合でも悪くなったか？」

「え？ ああいやそうじゃなく——」

顔を上げた真希の言葉を遮るように、二度目の唸り声。小太郎の視線が真希の腹部に集中する。

「……そういえば、昼を取っておらんかったのう」

多分、苦笑いをしているなと思いつつ、

「うん。実は今、すごいお腹減ってる」

真希は正直に自分の状態を相手に伝えた。乙女の見栄が無いわけではないが、盛大に腹の虫を聞かれてしまった以上、取り繕う意味は無い。最早開き直りだった

「では、ここでお昼にいたしましょう」

「わっ！」

「おう、親父か」

突然ぬつと湧いて出た巨漢に、真希は思わずビクリと身体を反応させてしまった。

「おや？ 驚かせてしまいましたか」

少し申し訳無さそうな視線を向けてきたのは、剛錬だった。いつの間にか追い付いて来ていたらしい。

「あ、その、すみません。いきなりだったので」

「いえいえ。大丈夫です。さて、では改めて、お昼にいたしましょう」

言つて、剛錬はひょいと、その体軀に似つかわしい、けれど可愛らしくもある大きなバスケットを持ち上げた。お茶もありますと、これもまた大きな水筒を持っている。

「自信作の弁当です。いかがですか？」

パカリと開けられたその中身は、ぎつしり並んだ握り飯と、大根やきゅうりの漬物だった。海苔の香りがふわりと広がり、三度真希のお腹が唸りを挙げる。

「……頂きます」

「あ、儂も食うぞ」

全員石段の最上段に腰掛け、真希は剛錬の作った定番の梅干握りを食べる。高い場所からの絶景を眺めつつの昼食は、非常に気分がよかった。

すっかり昼食を平らげると、

「ではそろそろ、目的の場所へ向かいましょう」

空になったバスケットと水筒を社の中に置いて戻った剛錬が、今回の遠出の目的を改めて口にした。

「そういえば、この神社まで来たのは何故なんですか？」

石段での競争に加え、のほほんと昼食を取っていたために忘れていたが、ここへ来たのは妖怪の住処へ赴くためだ。

しかし、いくら寂れて人気のない神社とはいえ、ここが妖怪の住処ということはないだろうと真希は思っていた。それは今の剛錬の言葉でも証明される。

「それは今からご説明します。あ、真希さんの荷物は社の方へ隠してありますので、帰る時に回収いたしましょう」

そう付け加えて、剛錬は鳥居の柱になにやら札をぺたりと貼り始めた。左右二本の柱に一枚ずつ貼り付け終わると、

「あれ？」

真希の目の前で、鳥居に囲まれた空間がゆらゆらと揺らぎ始めた。錯覚かと目を擦り、改めて観察してみるが、揺らぎは収まっていない。

「えっと……？」

何が起こっているかわからずに真希が混乱していると、

「親父、僕は先に行っているぞ」

言うや否や、小太郎は揺らいた空間を持つ鳥居をスッと潜って、消えた。

「はい？」

思わず鳥居に駆け寄り、まじまじと向こう側を見る。揺らぐ空間のせいでウネウネと揺れる社は見えるが、たった今鳥居を潜ったはずの小太郎の姿が無い。一瞬にして消え失せてしまっていた。

「真希さんもどうぞ。安全は保障します」

脇に立つ剛錬が、手で鳥居を示している。つまりは小太郎のように潜れということなのだろうと、真希は理解した。

——うーん……

試しにと、真希は恐る恐る手を伸ばして、揺らいた空間に触れる。ちょうど水に触れているかのような微妙な感触だ。もちろん、水ではないので濡れはしない。

しばし考えて、真希は方針を決めた。

数回深呼吸をし、ぎゅっと目をつぶって一息に鳥居を潜る。水に飛び込んだような感覚を味わった後、真希の目はまぶた越しの白い光に包まれた。

第三章 その3

目を開いた時、最初に真希の目に飛び込んできたのは道だった。左右を青々とした木々に挟まれた、石畳の道。つい先ほどまであったはずの社は、跡形も無く消え失せていた。

思わず背後を振り返ると、そこには潜ったものとは違う立派な鳥居がぼつんと立っており、緑の世界に唯一つの朱として存在していた。石畳の道は、鳥居の向こうにも続いている。絶景はすでに無く、当然石段も存在しない。

明らかに、あの神社が存在した場所とは違う場所だった。唯一変わらぬものは、青い空くらいなものである。

「ようこそ。我ら妖怪の住まう世界へ。歓迎いたしますよ。烏丸真希さん」

声に反応して、真希は再び後ろへ振り返った。視線の先にはにっこりと笑う剛錬と、腕を組んで何となく得意そうな小太郎がいる。

「えっと、ここ、どこですか？」

急激な変化に思考が追いつけなくなっていた真希は、反射的に質問を口にした。

「じゃけえ、妖怪の住んどる場所じゃと——」

「いやそうじゃなくて、物理的にここはどこなのかってこと。だって、明らかにさっきの神社とは別の場所じゃない」

右手は生い茂る木々。左手もまた同じ。前方にはすぐそこで右に曲がる石畳の道。後方には鳥居と、彼方まで長く続く道。

先ほども確認して、今改めて確認しても、やはりここにはそれしかない。

「あー……。親父、どう説明すればいいんじゃない？」

ポリポリとお面の頬をかいて、小太郎は隣に立つ剛錬に視線を向けた。

話を振られた剛錬は、ふむとしばし黙考して、

「申し訳ありませんが、ここが具体的にどこなのかはお教えすることが出来ません。無論、真希さんを信用していないというわけではないのですが、ここには我々以外にも多くの妖怪が住んでいます」

何卒ご理解ください、とその大きな身体を曲げて真希に頭を下げた。

「いえ、あの、こちらこそ無遠慮な質問をしてすみませんでした」

真希は自分の短慮さを恥じ、改めて自分が微妙な立場にいるのだと認識した。よくよく考えてみれば、ここは隠れ里のような扱いなのだろう。おいそれと所在を明かすわけにはいかないのは当然だ。

真希が頭を下げると、剛錬は再び笑顔になって、

「分かっていたただけの様で何よりです。……さて、私は少々準備がありますので、ここからは小太郎に案内をさせます。一通り見て回ったら我が家にお立ち寄り下さい。では、いったん私はこれにて「は？」

真希がその言葉に驚いている間に、剛錬は豪快な音を立てて翼を

生やし、あっという間に空に浮かび上がってどこかへ飛び去ってしまった。後にはキョトンとした顔で剛錬の飛び去った空を見る真希と、静かに佇む小太郎だけが残される。

「え？ なにこれどうい——ちよっと、どこ行くのよ」

状況を把握し損ねた真希は小太郎に説明を求めようとするが、当の小太郎は真希に背を向け、すでにスタスタと歩き始めていた。

呼び掛けても止まる気配が無いので、真希は慌ててその背中を追う。すぐに追いつき、横に並んだところでもう一度小太郎に疑問をぶつけようとしたが、

「親父が言うとなったじやろうが。ああ、具体的に言うんじゃな、お主には妖怪がどういった生活をしてるんかとか、どういったものがあるんかについてちつとばかし知ってもらおうと思うとる」

小太郎は歩みを止めずに、先の真希の質問に答えた。

「いや、それは分かってるんだけど……」

小太郎の横を歩きながら、真希はきよろきよろと周囲を見回した。歩き始めてすぐに道なりに曲がってきたが、曲がった先は遠くまで道が続いているだけで、景色に代わり映えが無かった。

——想像してたのと大分違うなあ。

最初に剛錬の話聞いた時、真希の頭の中ではもったこうそれっぽい雰囲気場所に、有象無象の妖怪たちがあちらこちらに群れている光景が思い描かれていた。

ところが、いざ来てみるとまるで森の遊歩道のごときのどかさで

ある。多少静か過ぎるのが不気味といえば不気味だが、それだって別に大したことではない。

「なんじゃ。さっきから落ち着きが無いが、どうした？」

「え？ あー、いやほら、ここって妖怪の住処なわけでしょ？ 何かもつとこう、いかにもそれっぽい感じの所かと思ってたから」

妖怪の住処が森や山というのはイメージ的には悪くはないが、どこか整備されているかのようなこの石畳の道は、真希としては非常にイメージに合わない気がした。

「それっぽい、と言われてものう……」

真希の言葉に歩きながら腕を組んだ小太郎は、しばし黙考した後突然ポンと手を打った。

「ああ、もしかや今儂らがおる所に妖怪たちが住んでおると思っておるのか？」

「え？ 違うの？」

「いや、完全に間違いではないぞ。そうじゃな。結界の概念なんぞ説明したところで分かんじやろつから、真希に分かり易いように言っとじゃな」

歩きながら、小太郎は人さし指をピツと立て、真希に説明を始める。

「考え方としてはじゃ、今儂らのおる所は、学校で言う廊下に当たる場所じゃと思えばええ」

「……廊下？」

いきなり非日常の世界から日常の世界へ戻ったような錯覚を真希は覚えた。このどことも知れない場所が、学校の廊下と言われてもピンと来ない。確かに、余り広くない一本道は廊下と思えなくもないが、やはり違いすぎる。

「あくまで真希と儂が確実に知っておるものに例えればじゃ。廊下の様なものじゃ言つたんは、もうちょっとすれば理解できるはずじゃ」

「ふうん……」

話が飲み込めない真希だったが、とりあえず小太郎の言うことを信じてもう少し待ってみることにした。それでも分からなければまた聞けばいいのだし、もう一度聞いてなお分からなければ、

——とりあえずは投げよう。

そう納得し、真希は黙って小太郎と並んで道を進んで行った。

「さて、この辺りじゃな」

あの後五分ほど黙々と道なりに進んで来て、小太郎が突然足を止めた。それにわずかに遅れて真希も足を止め、先行した分だけズリズリと足を戻して横に並ぶ。

「相変わらず森しか見えないんだけど、何がこの辺りなの？」

小太郎が立ち止まった場所は、歩き始めてからほとんど変化の見られない道の途中。ここから百メートル先に行ってから同じことを

言われても、やはり何も変わらないのではないかと思う。

そんな所だというのに、小太郎は真希の問いを無視して進行方向右手に生えている木に近寄ると、そっと手を触れた。途端、小太郎の手を中心として水の波紋のような物が広がり、景色が揺らいだ。

「あ……」

それはここに来るときも見た光景だ。鳥居に囲まれた空間が同じように揺れていたことは、しっかりと真希の頭に残っている。

「さつき儂が、この道は廊下のようなものじゃと言ったじゃろう？
つまり、この先は教室にあたるわけじゃな」

言われて、真希の頭の中でいくつかのピースがかっちり合わさった。変わり映えのないこの景色の中には、おそらくこと同じように見えないけど存在する場所が他にもある。

「もしかして、妖怪の住処ってこんな風に個々に分かれてるの？」
「おう。大きさもまちまちじゃし、必ずしも一族毎に分かれて
いるわけではないがの。妖怪が住める場所も昔に比べてずいぶん狭
くなってしまったそうだな。結界で無理矢理領域を確保しとるんじ
ゃ」

真希には全く理屈が分からないが、どうもずいぶんと便利で凄い
ものなのだということは分かった。

空を飛ぶ時に使った見えなくなる札といい、ここに来るために使
ったであろう不思議な仕掛けといい、妖怪たちの力は現代科学を軽
く凌駕しているんじゃないかとすら思う。

「妖怪の力ってすごいよね……」

「何じゃ？」

「うっん」

真希は小さく首を振り、

「それで、その先には何があるの？」

「ん？ おう。この先には河童の住処がある。儂の生まれた時から
の馴染みもおつてな。そいつにちよいと用事があるんじゃ」

どこことなく楽しそうに、小太郎はこの先にある者についての説明
を始めた。

曰く、大沼を中心とした湿地帯の領域で、他種族用に棧橋が用意
されているらしいとのことだった。基本的に河童族は人間との共存
を望む者が多いのだと言う。

「まあ実際に会うほうが理解も早いじゃろう。他にもいくつか回る
場所もあるけえ、とっとと行くか」

小太郎は再び先の木の前に立ち、左手で触れる。波紋が広がり、
景色が揺らぎ始めた。

「真希」

小太郎が真希に向かって右手を差し出してきた。だが、何の意味
があつて差し出された手なのか分からず、真希は反応に戸惑った。

「ここへ来る時は親父の札があつたが、基本的に今の真希では一人
で境界を渡ることが出来ん。じゃから、儂が手を引いて渡らねばな
らのじゃ。いわば儂が札の代わりということじゃな」

「あ、そうなんだ」

とても単純な事実に納得して、真希は小太郎の手を取ろうと左手を伸ばして、固まった。

「……何じゃ？ どうした真希」

固まった真希見て、小太郎が不思議そうな声を出した。ただ手を取るだけだというのに、何を躊躇しているのかと思っているのだらう。

——あたし、男の子と手を繋ぐのっていつ以来だっけ。

特に潔癖に生きて来たつもりはないが、真希は余り男子と直接触れ合う機会を経験して来なかった。

中学時代には誰かと付き合ったこともあるが、付き合った相手はかなり奥手で、そういう雰囲気を経験することなく自然に別れてしまった。

だからなのか、今ここに来て小太郎の手を取ることが何故か恥ずかしい。別に特別なことではない。握手のようなものと頭で考えていても、どうしても手が先へ動かない。

「えっと、どうしても手をつながないと駄目？」

「……儂の話を聞いておったか？」

「いや、うん、そうなんだけどね」

頭の中がぐるぐる回って、視界までぐるぐる回っているかのような錯覚を覚える。

——落ち着け。落ち着けあたし。こんなの普通のことよ。

必死にそう言い聞かせて心を落ち着かせようとするが、一向に真希の気持ちは収まらない。

半ばパニックになりかけたところで、

「よう分からんが、ほれ」

「あ……」

途中まで伸ばされていた真希の手を、小太郎がひよいつかんだ。その瞬間、真希の中でぐるぐると回っていたものが全て吹き飛び、直後に顔の温度が急上昇したのを感じた。

「行くぞ」

「……………うん」

真希の目の前で小太郎の左手がズプリと揺らぐ景色の中に入って行き、そのまま腕から全身を沈めるようにして進んで行く。やがて小太郎の身体はほとんどが見えなくなり、唯一真希と繋がる右手だけが残っていた。

そこだけ見ると実に猟奇的な光景だが、掴まれた手に真希は小太郎の確かな存在を感じていた。紅潮した顔は、すでに元に戻っている。

真希にとっては幸いなことに、手をつかんですぐに小太郎は前に向き直っていたため、紅潮した顔を見られはしなかった。

だが、もし見られていたのなら、彼はいったいどんな反応をしたのだろうかと思う。

ただ首を傾げただろうか。

慌てて顔をそらしただろうか。

それとも――

――…………馬鹿らしい。

自分の考えを自分で笑って、振り払う。そうしている間にも、真希の手はぐいぐいと引かれ、やがて彼女も揺らぐ景色の向こうへと消えて行った。

第三章 その4

そこはどこか薄暗い、じめじめした所だった。辺りには黒っぽい色の細い木々が群生しており、栈橋からのぞき込んだその根元には、平たい緑の葉と桃色の小さな花が所狭しと敷き詰められている。

「うわー……」

それが真希の第一声だった。おそらく、大抵の人間がそんな印象を持つであろう世界だ。

「人間には、余り馴染めん環境かもしれんいう」

クツクツと喉の奥で音を出すように小太郎が笑っている。多分、真希の反応が想像通りだったので意味もなく楽しいのだろう。

「ここが河童の住処なの？」

「ほうじゃ。この栈橋をもう少し歩いて行くと、河童の集落に出る」

言って、小太郎はまた一人で先に歩き始めてしまった。真希は何も言わず、その後を追う。今度はすぐ横には並ばず、やや後ろから視線は自然と、小太郎の右手に注がれていた。

小太郎曰く「結界を渡る」時にはしっかりとつかまれている手だが、ここに来て気が付いた時にはすでに離されていた。

わずかな温もりだけが、その手が繋がっていたという証拠である。

——別に、そう気にするもんでもないけどさ。

冷静になってみて、真希が小太郎の手に触れたということは、そ

の逆もまた然りなのである。だというのに、自分だけが何か慌てふためいていたという事実が、気に入らない。

非常に理不尽な話だと真希自身理解しているが、それでも、である。

ついと視線を小太郎の背中に移す。着ている物のせいで分かり難いが、かなり細身で、けれど力強い身体をしていた。それに気が付いたのは、階段で助けられた時だ。

——そういえば、あの時は手を握るところじゃない接触だったわね。

誰かに抱きすくめられたのは、親や幼い頃の親戚を除けば初めてだった。あの時ですら、先ほどのような感覚になった記憶はない。若干顔が近かったことに驚きはしたが、それだっと思って思考が凍結するほどではなかった。

何かおかしい。けれど、それが何か分からない。今日の授業中にも感じていたもやもやが、また真希の中で渦を巻き始めた、その時だった。

「見えたぞ」

「ふえ？ ぶっ！」

小太郎の声に変な返事をした直後、真希は立ち止まっていた彼の背中に激突してしまった。

「余所見しとると、そのうち足を踏み外すぞ」

「……気を付ける」

したたかにぶつけた鼻をさすりながら、真希は小太郎の背後からひよいと顔を出して先を確認した。栈橋はすぐそこで直角に曲がつ

ており、棧橋の無い前方には静かにさざめく水面が見えた。どうやらこれが大沼らしい。

「右の方に何か密集したのが見えるじやろう？ あれが河童の集落じゃ」

小太郎の指差す方を見て、真希は少し遠くに建物群があるのを見つけた。三角錐の屋根を持つ、ちょうど西洋の城の物見塔みたいな形をした建物だ。屋根の色が暗めの茶色で、外壁がくすんだ白色ということもあり、まるでキノコか何かが群生しているようにも見える。

「河童つて、陸上に住んでるの？」

「そういう者もあるというだけじゃ。河童は比較的人間に友好的な種族じゃからな。昔からよう人間にちょっかい出しておったそうじや」

「ふーん」

友好的かどうかは別として、河童も天狗と同じくらいポピュラーな妖怪として人間には知られている。人間の間でよく知られている妖怪ほど、友好的ということになるのだろうか。

そう考えて、真希は小太郎に尋ねてみた。

「そうじやのう。あながち間違いではないじやろうが、その種族の中でも共存派と強硬派があるくらいじゃし、一概にはの」

「そつか。ごめん。変なこと聞いたね」

「いや、そんなことはない。まあ、この議論はまたいずれする機会もあるじやろう。ともかく、さっさと集落まで行くぞ」

「うん」

棧橋は大沼の縁を回るようにして作られている様で、直線距離では大したことのない距離に思えたが、その後二十分ほど歩いた後、ようやく目的地の集落に到着した。

「到着じゃ」

「……なんか、誰もいないんだけど？」

真希の目の前には、確かに集落と呼べるだけの建造物の密集地帯がある。いや、この密集具合だと住宅街といった方が合いそうなものだ。

取っ手のついた扉と、ガラス窓まで確認できるそれは、人間が暮らしていると言われても違和感が無いほどに普通の家だった。真希の目で見てそれらは、妖怪の住処という属性からすぐ浮いているような気がする。

だが、それだけの建物群があるのに、全く人気、もとい河童気が無い。まるでゴーストタウンの様に不気味なほど静まり返っていた。

「いや、そこらの家にはちゃんと河童がおるぞ。単に人間、真希がおるから何事かと警戒しておるんじゃないやろ。一応、ここ長には連絡をしておいたはずなんじゃがな」

小太郎がそう言うので、真希はスーツと近くの建物を右から左へ流し見た。その中のいくつかで、窓の向こうに動く影を見つける。どうも動向をうかがわれている様だった。

「珍獣、というより猛獣みたいな扱い？」

人間に比較的友好的という割には、確かに思いつきり警戒されていた。

「そりゃ警戒もされるじやろう。僕は真希を知っておるが、この者はそんなもの全く知らんのじゃ。真希も同じ人間だろうと知らんもんが自分の住む場所にやって来たら、警戒するじやろう?」
「そりゃ、ね」

正論だった。烏丸真希という存在を理解してもらっていないうちから、いきなり友好的な対応をとれと言う方が愚かだろう。

「まあ、今回はそこらの河童に用はないしの。そこは追々どうにかするとして、ともかく僕の馴染みに会いに行くかのう」

「そのひ……じゃなくて、河童さんはどこに住んでるの?」

「ちよつと奥に行った所じゃ。結構な変わりもんでの。ま、会えば分かる」

もったいぶった言い方をして、小太郎はさっさと歩き始めた。当然、真希もそれを追う。

集落の中にも栈橋が通されており、明らかに足をとられそうな湿地を歩く必要は無かったのは真希にとって幸運だった。

ただ、栈橋の上には隠れられる所が無いので、周囲の家々から様々な視線を浴び続けなければならなかったが。

「中に入るとそれなり、どこるかすごい視線を感じるわね」
「我慢せい」

小太郎は注目を集めているわけではないので平気なのだろうが、真希はかなりきつかった。視線の大半が悪意あるものではないことがせめてもの救いだ、それでもきついものはきつい。

気が付いた時には、真希は前を歩く小太郎の衣装の一部を指でつまんでいた。

引つ張られる感覚に気がついたのだろう。小太郎が歩いたまま首だけ振り向いて、

「歩き難いんじゃないが……」

「い、いいじゃない。ちよつとでも周りの目を無視するために半分ボーっとしてるから、つかんでないとはぐれそうなのよ！」

「……なら、しょうがないのう」

小太郎は再び前を向いてしまった。

真希に対する気遣いの言葉はなかった。その上、何故か若干歩く速度が上がった気がする。合わせて彼女も歩く速度を上げるのだが、徐々に引き離されて度々小太郎の衣装を強く引つ張ってしまう。

まさか振り払うつもりかと真希は勘繰るが、それにしてはややおかしい面がある。どうしても歩幅で劣る真希が離されそうになると、決まってわずかに歩みを遅らせ、追いつくのを待つのだ。

多分、衣装の引つ張られ具合で判断しているのだろう。

——つて、あれ？　そういえばあたしと小太郎の歩幅って大分違うはずよね。

石畳の道を歩いていた時も、栈橋を歩いて来た時も、真希は自分の歩幅で歩いていた。それで遅れずに歩いていたということは、小太郎が真希の歩幅に合わせていたということではないだろうか。

——それって……

真希は目の前の背中を見る。何故だか分からないが、そうしている間は、周囲の視線の大半を忘れることが出来た。

「……？」

実質五分も移動はしていなかったはずだが、真希の体感では一時間くらい経っている気がした。

そんなわずかにして結構な時間をかけてやってきたのは、集落からやや外れ、大沼にほぼ隣接する形で立てられた一軒の家である。近くには金網と思われる囲いがあり、中では鶏冠まで真つ黒なニワトリが数羽動き回っていた。

「おう」

短く答えて、小太郎は一步前に進み出ると、

「三平^{さんぺい}。いるんじやろう。儂^{なん}じゃ。鴉天狗の小太郎じゃ」

どうも三平というのが家主の名前らしい。

——何かこう、一世代前を連想させる名前ね。

小太郎にしてもそうだが、昨今の奇抜な名前を付けたがる親からすれば「古臭い」とでも言われそうな名前だと真希は思った。

「三平。早う出て来んかい」

一度目の呼びかけに反応が見られなかったからか、小太郎が再度呼びかけを行う。すると、

「ああ、ああ、聞こえてるよう」

ずいぶんと低い、どことなく渋いおじさん系の声が聞こえてきた。

キィとわずかな軋みの音を立てて扉が開き、中から全身緑色でワカメみたいな髪と真つ白な皿を頭に載せ、ちよつと目つきが悪い黄色いくちばしをつけた生き物が現れる。背丈は真希よりわずかに低い。ちらりと見える背中には、亀の甲羅のようなものが見える。

ありえないほど典型的な河童がそこにいた。あまりに典型的過ぎて、真希は自分の見ているものが信じられなかった。

「おう、三平。久しぶりじゃの。息災か？」

「見りや分かんたろうよう。まあ、お前さんは相変わらず——というわけでも無さそうだねえ」

和やかに談笑を始めたかと思いきや、三平は小太郎の背後に半ば隠れるような形になっていた真希の存在に気が付いたのか、じろりと視線を向けて来た。

目つきがよくないのでそれなりに怖い。

「そちらさあん、人間だねえ。もしかしてえ、妖怪の婚約者さんかあい？」

「え？ ああ、えつと、親が言うにはそういうことが目的みたいで、す、けど……」

真希にとって、この辺りはなんと説明していいか困る問題だった。何故か両親は非常に乗り気だが、真希は未だに整理がつかない。そんな簡単な問題ではないのだ。

「んん？ はあつきりしないんだねえ。おおつとあ。そんなことの前にい、自己紹介もしてなかったよう。俺あ河童の三平つつも

んでよう。まあ、普通に三平ってえ呼んでくれい」

「あ、その、あたしは烏丸真希と言います。呼び方は、お任せします」

「そおうかい？　じゃあ、普通に真希さんってえ呼ばせてもらおう」

言ってひょこひょこ近付いてきた三平が、真希に向かって手を伸ばして来た。水かきの付いた、河童の手だ。

「よろしくなあ」

「こ、こちらこ——ひゃっ！」

何気なく差し出された手をつかみ、真希はその又メツとしてブニツとした感触に思わず声を上げてしまった。そしてすぐにそれが失礼なことだと気が付き、

「こ、ごめんなさい」

謝りはしたが、微妙に口元が引きつるのは止められない。はつきり言っただけがぞわとなる類の感触だ。

「ああ、別に気にしないよう。そもそもねえ、こーんな所まで来れる人間なんてえ、めったにいないねえんだよねえ。この上え、俺あに触れてなあんの反応もなかったらさあ、おっかしいってえもんだよう」

「は、はあ」

三平の喋り方が独特なため、部分部分で聞き取り難いものもあったが、どうやら特に怒っているわけでもないのだと分かって、真希は胸を撫で下ろした。

「まあ、立ち話もなんだしい、あがってくれい」

くるりと踵を返して、三平は家の中へ入っていった。小太郎がそれに続いて躊躇なく入って行くので、取り残されそうになった真希は慌てて小太郎の背中を追う。

三平の家は、それこそ倉庫と言って差し支えが無いのではないかと思うような構造だった。中は仕切られておらず、壁沿いに大小様々な棚が置かれ、これまた大小様々な瓶が所狭しと並べられている。

「三平は妖怪の中でも名の知れた薬師でな。薬以外にも色んな物の調査を行っておる」

棚の中の瓶に目を奪われていた真希に、小太郎の説明が聞こえてきた。なるほど、これらはほとんど薬品の類が納められているのだろう。

「そんな大層なもんじゃねえよう。さてえ、小太郎。おめえの目的のもんはそおっちの棚に入ってるからよう。確認してくれい」
「おう」

小太郎は三平の示した棚に近付くと、中からいくつかの瓶を取り出してなにやら調べ始めた。それが気になって、真希はつつと小太郎に近付こうとしたが、

「真紀さんはあ、ちょおつとこっちに来てくれい」

三平に呼ばれてしまったので、多少後ろ髪を引かれながらも、三平の下へ向かう。

三平は椅子に座ってテーブルに半身を預けており、キセルを吸っていた。その格好は、どこかの親分といった風である。

近くにあったもう一脚の椅子を勧められたので、真希はそちらの椅子に座り、三平と向き合った。

「さあて、小太郎の用事がすむまでえ、俺あに聞きたいことがあれば知ってる限りで答えさせてもらおう」

「ああ、なるほど」

どうやら、ここへ来たのは小太郎の用事のためだけでなく、最初に聞いた通り色んな妖怪から話を聞くためでもあったらしい。

何を聞いていいか多少迷ったが、真希はさしあたって三平について聞いて見ることにした。

「えっと、小太郎が昔馴染みって言ってましたけど、三平さんはおいくつなんですか？」

「俺あの歳かい？俺あ四百九十六になるよう」

いきなり桁違いの年齢が出て、真希は目を見張った。加えて、小太郎と年齢に開きがあり過ぎるのも気になった。

妖怪の感覚は人間とは異なるのかもしれないが、それにしてもこの年齢差で小太郎が三平を呼び捨てにしているのはどういうことなのだろう。

「えと、三平さんは、もちろん小太郎の年齢を知っているんですよ？」

「んん？ああ、あいつが俺あを呼び捨てにしているのが気になるかい？」

三平はスーッとキセルを吸うと、パカッとくちばしを開いて煙を吐き出した。

「年齢の多い者を敬う慣習はあ、妖怪にもあるよう。たあだ、あいつが四つつの時から付き合いだあしよう。俺あが気にしないつづうのもあるかなあ」

三平がふえっふえっふえとこれまた独特な笑い声を出して、わずかに遠くを見るような目になった。昔のことを思い出しているのだろうか、真希が思っていると、

「そおうそう。俺あ確かに五百に近いけどよう、この集落じゃあそれほど歳は食ってない方なんだよう。河童の寿命はあ、鴉天狗と同じ三千年くらいだからしてえ、俺あまだまだ若造なんだよう」

また一つ桁が上がった。妖怪は長命だというのが人間側の一般的な考え方ではあるが、それでも約五百歳で若造というのはにわかに飲み込み難い。

——それと——

ちらりと、真希は瓶を手になんと調べている小太郎を見る。三平の弁では鴉天狗の寿命は三千年だという。つまり、小太郎の寿命もまた三千年ということなのだろうか。

小太郎の年齢は、真希と同じ十六だと言っていた。仮に真希が百まで生きたとしても、小太郎はその後二千九百年もの間生き続けるのだ。

余りにも、生命の尺が違い過ぎる。

「人と妖怪の寿命をお、同列に考えちゃあいけないよう」

三平の言葉に、真希はビクリと身体を反応させる。

「優劣を言うわけじゃあないんだよう。種が違えばねえ、当然なあんもかんもが違うんだからさあ」

深くキセルを吸って、三平は大きく煙を吐き出した。その言葉は、真希の心に重くのしかかる。

「ああ、そおうそう寿命といえねえ」

そんな真希の心を知ってか知らずか、三平が少し声を明るくして、

「真紀さんはあ、妖怪にとつての寿命にい、おっきな意味があることを知っているかい？」

「……えっと、知らない、です」

先の三平の言葉は、未だ真希の中でずしりとした存在感を示していたが、ひとまずそれは無視することにした。悩むのは後でも出来る。そう考えた。

「妖怪にとつての寿命はねえ、一つの力の象徴なんだよう」

「力の象徴、ですか？」

三平は大きく頷き、カンとキセルを叩きつけて中のタバコをテールの上の器に落とした。

「簡単に言えねえ、例えば五百年の寿命を持つ妖怪はあ、五百の力までしか出せないんだよう」

三平の言葉は確かに簡単だが、真希にとつてはかなり抽象的に過ぎて理解し難いものだった。そんな微妙な顔をしていると、

「んん？ ちょおつと分かり難かったかあい？ ふーん……じゃあ、真希さんは人間の乗り物にい、排気量つつう指標があることを知っているかあい？」

この問には、真希は頷くことが出来た。詳しい理屈は知らないが、バイクなんかで五十とか百とか、数値が大きいものほど馬力が出るという話を聞いたことがある。

「……あ」

「お、飲み込みが早いねえ」

排気量の話を出されて、真希は先の三平の言葉の意味を理解した。つまり、寿命がそのまま妖怪が使える力の最大値ということなのだろう。

「歳を重ねてもお、妖怪は強くなるけどねえ。それにしたって寿命が長い方が多く歳を重ねられるわけでえ、だから妖怪にとって寿命は非常に重要なんだよ」

「なるほど……って、あれ？」

疑問が一つ融解してすつきりした、かと思いきや、真希の中で新たな疑問が浮かんだ。

「何で三平さんは人間の乗り物についてお詳しいんですか？」

「ああ、俺あ割とよく人間の町に行くんだよ。薬師なんてやっているとお、あっちこつちで色おんな物が必要になってくるからねえ」

三平が言うには、今の妖怪の住処で手に入り難いものは、基本的に人間の町に行って手に入れて来ることが多いらしい。そのついでに、色んな情報を収集しているのだとか。

三平の口から語られる人間社会の様子は、真希の常識とは違った観点からの話もあり、非常に興味深いものだった。そうしていくつかの話を終えた頃、

「うむ。三平。問題無しじゃ。全部もらっていくぞ」

「そおうかい。じゃ、代金は近いうちに持ってきてくれい」

小太郎は調べていた瓶を次々と懷にしまい込むと、棚の前を離れて真希の所へやってきた。

「色々とは聞けたんか？」

「うん。三平さん、あたしたちの社会とか常識にも詳しいから、分かり易く色んな話が聞けたよ」

実際、三平の知識は相当なものだと真希は感じていた。

「そうか。三平、いきなりで悪かったの」

「別にいいよう。どうせ用事もあったんだしい、お前とは切れない縁もあるしなあ」

一瞬、真希は空気が止まったような感覚を得た。その刹那の静寂の中で、小太郎と三平の間に無言のやり取りが交わされたような錯覚を覚えたが、その違和感はすぐに霧散して意識に上ることはなかった。

「そろそろ行くの？」

「おう。他にもちよいと見て回るからの」

「うん」

椅子から立ち上がると、真希は三平に向かって一礼する。

「今日はありがとうございました」

「あいよあ。まあた機会があれば寄ってくれい。ああ、そおうそう……」

急に何かを思い出したように言葉を付け加えた三平は、ゆったりとした動作で椅子から立ち上がると、背を向けていた棚の引き出しを開け、中から何かを取り出し、それを持って真希の前に立った。

「これを持ってくといいよう」

差し出された緑の手の上には、一個の二枚貝が乗せられていた。

「これは？」

「開けてみるといいよう」

多少不思議に思いながらも、真希は三平の手から貝を取ると、蓋を開けるようにして開いてみた。中には真珠色の軟膏のようなものが詰まっており、キラキラと輝いて綺麗だった。

「河童の傷薬だよ。ああ、外に真つ黒い鳥がいたのは見たかあい？」

真希はコクリと頷く。種類は分からなかったが、確かに黒いニワトリがいた。

「あれはねえ、クオンノトリって奴でえ、あれの卵から作るんだよう」

「コウノトリって、えっと、あたしの知ってる鳥とずいぶん違いますけど？」

真希の知るコウノトリは、ニワトリとは似ても似つかない。

「ああ、コウノトリじゃなくてえ、クオンノトリ、だよう。久しく遠い鳥でえ、クオンノトリだねえ」

三平の発音が独特なせいか、訂正されてもなお真希はクオンノトリがコウノトリに聞こえてしまう。もしかしたら、これまでの話の中でもどこかで聞き間違いをしているのかもしれない。

「昔っから人間はあ、よおつく聞き間違えてたからねえ」

やれやれとでも言いたそうな三平を見て、真希はそれは必ずしも人間側のせいだけではないと思ったが、口には出さなかった。

「なんか凄そうな傷薬ですけど、本当にもらっていいんですか？」
「いいんだよ。効能はあ、道中の話の種に小太郎から聞くといいよう」

「儂に丸投げか」

ふえっふえっふえとまたあの笑い方をして、三平はまたどっかりと腰を下ろした。ついと顔を上げて、ちよいちよいと真希に向かって手招きをする。

何だろうと思いつながら真希が三平に近寄ると、何かぼそぼそと言ってきたので、よく聞き取るために耳を近づける。すると、

「小太郎をお、よおろしく頼むよう」

耳元でそう囁かれ、真希は反射的に身を離し、にやりと笑っている三平を見た。

「真希？」

三平の囁きが聞こえていない小太郎は、真希の行動に首を傾げている。だが説明するわけにもいかないのです、

「……何でもない」

真希はそう言ってごまかすしかなかった。まったく、何をどう頼むというのだろうか。

「よう分からんが、そっちも用事は済んだようじゃな。ほんじゃ三平。とりあえずはこれでの」

「はいよう」

簡単な別れの言葉を残して、小太郎は三平の家を出て行った。真希はもう一度三平にお辞儀をしてから、その後を追う。

二人を見送る三平の顔には、慈しむ様な笑みが浮かんでいた

第三章 その5

河童の住処からあの石畳の道へ戻った後は、また道なりに進み、いくつか別の妖怪の住処を見学して、真希はいよいよ最大の目玉である天狗の住処へやってきた。

結界を渡った直後にまず目に飛び込んで来たのは、ありえないほど巨大な一本の木である。

最初、真希はそれが木であるとは気が付かなかった。目の前に茶色い大きな壁のような物があつたので、これは何かと小太郎に尋ねたところ、ちよんちよんと上の方を指されたのでそちらに目を向けたのだ。

「……へ？」

真希の見上げる先には、複雑に絡み合うようになった枝の群れとそこに茂る青々とした葉っぱだった。しかも、それなりの距離であるのに葉の形がはつきり分かるということは、その大きさが尋常ではない。

その枝葉は元をたどれば壁だと思っていたものに繋がっているわけで、つまるところ壁と思っていたものは信じられないほど大きな木の幹でしたという結論に達したわけである。

「いやちよつと待ってさすがにおかしいでしょ。なにこれランドマイクタワー？」

実際そこまで大きいのかは比べてみなければ分からないだろうが、少なくとも真希はこれが木と言われてすぐに納得出来るサイズではない。

「別におかしくは無じやろう。四千年も生きれば、れいじゅ霊樹はこれくらいになる」

「四千年!？」

真希は一瞬その年数に驚いたが、

「あ、でも屋久杉もそれくらいだったっけ」

日本で最古と言われる巨木を想像し、

「やっぱりおかしいじゃない! あっただってそれくらい生きてるけどここまで育ってないわ!」

また突っ込みを入れた。

「忙しい奴じやのう。じゃから、それは普通の木の話じやろう? これは霊樹とゆうて、そこの木とは別もんじや。あー、言ってしまえばこの木も妖怪の類じやな」

真希の様子に若干呆れたのだろうか。小太郎は溜息を吐くようにして説明を入れた。

「木の妖怪?」

「ほうじゃ。霊樹は森を繁栄させる特殊な樹木での。霊樹を抱く森は、命溢れる豊かなものになるんじや。今は、もうほとんど残っておらんがの」

少し哀しそうに顔を逸らした小太郎を見て、真希はいつかの買い物の時を思い出した。

人間が壊した自然には、当然霊樹も含まれているのだろう。一度

壊したものは、二度と元には戻らない。

「まあ、靈樹の話は置いておこうかの。とりあえず儂の家まで行かねばならん」

「あ、そうだね。元々あんたの家にお呼ばれしてたわけだし。で、あんたの家はどこにあるの？」

真希の問いに対し、小太郎はまたもちよんちよんと空に向かって指をさす。それを見て、はたと気が付く。

「まさか、この靈樹の上に鴉天狗の集落があるとか？」

「おう」

即答だった。

「どうやって上まで行くわけ？ あたし飛べないわよ。またあんたが羽をくれるなら飛べるけど、あれってあんまりやっちゃいけないんでしょ？」

「そうじゃな」

買い物時に勝手に翼を生やして、剛錬にこっぴどく叱られたことを覚えていないはずは無い。真希が自力で飛べないとなると、小太郎に抱かれて飛ぶことになるのだろうか。

そこまで考えて、真希は自分が小太郎に抱き締められたまま空を飛ぶ姿を想像し、一気に顔の表面温度を跳ね上げた。

—— ないないないない！

ぶんぶんと頭を振って、想像をかき消す。

「さつきから落ち着きが無いが、いったいどうしたんじゃ？ 疲れたんなら——」

「う、ううん。大丈夫。何でも無い」

頭と一緒に手も振って、真希は必死に誤魔化しを計った。小太郎は若干納得がいかないようだったが、深く聞いてはこなかった。

「で、じゃ。どうやって上に行くかじゃが」

「な、何か方法でもあるの？」

「まあな」

どこか得意そうな感じで、小太郎は懷に手を忍ばせ、何かを引っ張り出した。真希が見るに、どうも呼び笛のらしき物のようだ。お面を付けたままでどうやって吹くつもりなのだろうか。

「ほれ」

「え？」

凝視していた笛を差し出され、真希は反射的にそれを受け取ってしまう。素材は竹のようで、独特のすべすべした感触があった。

「空に向かって吹くんじゃ。ただ吹くだけで音が出るけえ。特に難しいことはない」

どこか小馬鹿にしたような物言いに少し引つかかるが、真希は多少首を傾げながらも言われるままに笛をくわえ、顔を上に向けて息を吹き込む。

澄んだ音が奏でられ、虚空へと吸い込まれて行った。

「……で、吹いたけど」

笛を口から外して、真希は小太郎を見た。そもそも何のために吹いたのか分からないのだが、あの会話の流れからして、吹くことによって飛ぶことに変わる何かが起こるのではと考えていた真希は、何の変化も見られないことに疑問符を浮かべざるをえなかった。

「おう。もう来るぞ。……ほれ」

小太郎が顎で空を示したので、真希はもう一度笛の音を響かせた空を見上げた。相変わらず青い空と巨木の枝葉が視界を覆っていたが、

「ん？」

黒い影のような物が、徐々に落ちてくるのが見える。それは見る見るうちに大きく、つまり真希の方へ近付いて来ていた。

その落ちてきた物が何かをはっきり確認する前に、真希と小太郎の立っている場所から少し離れた所に何かが落下した。その直前、何かが強く空気を叩く音と大きな土煙が上がり、落ちてきたものを覆い隠す。

「来たか」

「来たかつて、何が？　よく見る前にそこに落ちちゃったけど」

真希はもうもうとした土煙を眺めるが、中の様子がうかがえない。それでも一分と経たぬうちに徐々に土煙が晴れ始め、ようやくそこに居るものが見える様になってきた。

「お待たせしました。飛天屋でございます」

薄い土煙の向こうから声が聞こえてきた。と同時に、複数の足音とともに四名の黒装束の者たちが現れる。何故か輿を担いでおり、声をかけてきたのは前列の左側を担いでいる者のようだ。

四名とも見た目は人の形をしているが、頭の部分は見るからに鳥のようで、背中には黒い翼が生えていた。

真希は思わずまじまじと見つめてしまう。

「そういえば、僕と親父以外の鴉天狗を見るのは初めてじゃったな」
「あ、うん。剛錬さんはいつもあれだし、あんたはお面だから、実際に見るのは初めてだよ」

河童に始まり、幾つかの種族の住処を見学してきたが、どれも素の状態のままで見るのが最初だったために違和感は無かった。だが、鴉天狗は最初に小太郎と剛錬親子に出会っていたため、ちよつと事情が異なる。

「確かに、あんたの仮面が元の姿に似ているってことは分かったわ。でも、実物とはやっぱりだいぶ違うのね」

「そりゃそうじゃろう。所詮作りもんじゃし」

小太郎の言うことは当然だが、真希は小太郎の素顔の一端に触れた気がして、意味も無く興奮していた。ちらちらと小太郎の顔と鴉天狗たちの顔を見比べていると、

「あの、ご用件は……？」

どうにも居心地悪そうに、鴉天狗が口を開いた。

「おう。そうじゃった。この人間を上まで運んで欲しい」

「ああ、やはり人間でしたか。いえ、我々は相手が誰であろうが運

ぶだけですが、大丈夫ですか？」

大丈夫とは何のことだろうかと思希は思ったが、

「心配いらん。そこらのもんよりよっぽど肝が据わっておる」

と小太郎が言ったので、多分高さに怖がって暴れたりしないのだからかという懸念が何かだろうと思に至った。

「了解しました。では、その……」

「あ、あたしは烏丸真希と言います」

「はい。では真希殿、どうぞ我が飛天屋自慢の輿へ」

飛天屋の鴉天狗は真希に一礼すると、仲間に合図を送って担いでいた輿を下ろした。真希は誘われるままに輿に乗ろうとして、小太郎を振り返った。

「僕は自分で飛んでいくけえ。大丈夫じゃ。元々、飛べん者を送り迎えするためのもんじゃしな」

ふと、何でこんな移動手段が必要なのかと思った真希だが、直後の小太郎の言葉で納得がいった。確かに、何かの用事でここを訪れたのに、飛べないので帰りましたなどということになるわけが無い。

「この道わずか二百年の若輩者ですが、快適な移動をお約束いたします」

飛天屋の鴉天狗は柔らかい顔を作ると、再度真希に搭乗を促がしてきた。これ以上待たせるのもなんなので、真希は素直に輿に上がる。

中央に囲い付きの座席が用意されているだけの非常に簡素な造りだが、その分頑丈そうな印象を受ける。真希がゆつくりと腰を下ろすと、直後にぐいっと輿が持ち上げられた。

「では、しばし空の旅をご堪能あれ」

その言葉が聞こえるや否や、真希の乗る輿はゆつくりと上昇を始めた。巨木の上、天狗の集落を目指して。

空の旅はゆつくりした移動だったこともあり、おおよそ十五分ほどのものだった。

四隅を固める鴉天狗たちの息がぴつたりと合っていたのか、輿に乗っている間は少しの乱れも無く、もし目を瞑っていれば、本当に動いているのかと疑いたくなるほどに穏やかで静かな乗り心地だった。

「では、またいつでもお呼び下さい」

「ありがとうございます」

真希が礼を言うと、飛天屋の鴉天狗たちは輿を担いでどこかへ行ってしまった。

「よし。ではさっさと行こうかの」

「あ、うん」

小太郎に促がされて、真希は少しおっかなびつくりと歩き始める。そんな真希の様子に、小太郎は立ち止まって、

「この枝は太いけえ。むやみに走り回ったりしなければ早々踏み外すことはないぞ」

「いやまあそうなんだけど、ちょっと丸っこいせいか歩き辛くて」

霊樹の上へとやってきた真希と小太郎の足場は、当然地面などではなく霊樹の枝である。幹の巨大さ同様に、その枝も普通の木々の幹よりもはるかに太く大きいのだが、そもそもこういった場所に慣れていない真希はどうしても不安定な気がして落ち着かないのである。

「手が必要か？」

スツと差し伸ばされた小太郎の手を、真希はつかもつとして、止めた。河童の住処でもうすでに一度手を借りている。これ以上は甘えが過ぎると思った。

「ううん。大丈夫」

「そうか」

短く言って、小太郎は手を引いた。あまりにあっさりだったのだ、真希はちよつと釈然としない。理不尽だが。

「あ、でも落ちそうになったら助けてよね」

「なったらな」

これまたあっさりした反応だけが返され、真希は微妙にふくれつつらを作る。予想の範囲内だし、じゃあどうして欲しかったのかと問われれば言葉に詰まるのだが、やはりそう、釈然としない。

河童の住処では、もしかしたら真希の勘違いかもしれないが、好

奇の視線から守るような行動を取ってくれたというのに、それ以後はそれっぽい行動がほとんど無い。

どうにもエスコート役として徹底さが見られない印象だ。

——って言っても、エスコート役にしたのは剛錬さんだしなあ……

自分から志願したわけではないのだから、そこに誠実さを求めるのは我侭だろうか。

「着いたぞ」

「へ？ ぶっ！」

真希はまた考え事をしていて、小太郎の背中に激突してしまった。激突された当人は、明らかに呆れた様子で、

「お主はさつき足場がどうか言うておったわりに、またぞろぼけつとしながら歩いておったのか？」

「痛い……」

したたかにぶつけた鼻をさすりながら、真希は小太郎の背中からひよいと前を見た。目に入ったのは、丸太を積んで組み上げたコテージのような建物だった。全体的に角ばった感じで、扉があるべきところには長い暖簾のような物が存在している。

「あれがあんたの家？」

「そうじゃ。元々、こんな物は無かったそうじゃが、親父が何を思ったか勝手に作ったものらしくての。儂が生まれた時には、もうこんな物じゃった」

「ふーん。って、そういえば」

ある事実を思い出し、真希はきよろと周囲を見回す。方々に伸びる大小さまざまな枝葉が複雑に絡み合う様子は、下から見た時に大体想像が付く光景だったが、上にやって来た以上ここにはもう一つの光景があるはずだった。だが、それが無い。

「あんたの家はそこにあるとして、他の天狗の家はどこにあるの？」
「ああ、他の天狗はあんな感じの家は持っておらん。皆好き勝手にそこの枝の上を自分の住処じゃと思っておる。幹に接する場所なんかが特に人気があるかのう」

まさかの野宿状態だった。いや、考えてみれば住居らしいものがあつたのは、今まで見た中では河童だけだ。猫又と鎌鼬の合同集落はまさしく猫と鼬の野良集会場みたいな感じだったし、基本的に妖怪は人間のような家を持っていないと見るべきなのかもしれない。

「河童は人間に強い興味を持っておるからの。色々真似して楽しんでるんじゃない。……さて、そろそろ行くぞ。親父はもう中にいるはずじゃ」

「だね」

話を切り、真希は小太郎に続いて目の前の建物へ向かう。大きさは一階建ての、リゾート地にもありそうな規模のものだった。見た目はそれなりに新しい。

「親父、帰ったぞ」

「お邪魔します」

小太郎がで入り口にかかる布を押し上げて中に入ったので、真希もそれにならって中に入る。すぐの所で小太郎が立ち止まっていたので、何事かと前をのぞき見ると、左前方の四角く一段高くなった

場所に、剛鍊ともう一人の影。

「おや？ お客さんの、ようだね。じゃあ、僕はこれで、失礼するよ」

板張りの床に胡坐をかく剛鍊の囲炉裏を挟んだ対面、真希と小太郎に背を向けるような形で、全身毛むくじゃらの生き物が存在していた。

「すまないな」

「気に、するな」

毛むくじゃらの生き物は、ゆったりとした動作で立ち上がると、くるりと振り返って来た。その体軀は剛鍊と同じくらいで、顔の部分も多くが毛に覆われており、僅かに鼻と口が見えるだけだった。声からして彼はこれもまたゆっくりと段差を降りると、出入り口へ、つまり真希たちの方へ向かって来る。

その場に留まっては邪魔になると思い真希は横へ避けたが、何故か小太郎はその場に留まったままだった。

「小太郎」

真希の呼びかけは無視される。まさか見えていないはずは無いので、小太郎は分かった上で相手の進路上に居座っているのだ。

毛むくじゃらは、小太郎の一步手前で歩みを止めると、一度ちらりと真希の方へ顔を向けてから、前に向き直って口を開いた。

「そちらのお嬢さんが、君の、連れなのかい？」

「そうじゃ」

「そうか、烏丸真希、さんと言っただね」

いきなり自分の名前を呼ばれて、真希は心臓が跳ね上がった。何故初対面の相手が自分の名前を知っているのだろうか。

——剛錬さんが話したのかな。

確率的にはそれが一番高そうなものだが、

「違う、よ。今、小太郎から、聞いた」

真希の方へ身体を向けた毛むくじやは、あまり抑揚を感じさせない声でそう言った。得体の知れない空気が、真希の身体を打つ。

「……え？」

二重の驚きだった。相手の言葉が真希の心の言葉に対するものにしたこと、自分の名前を言っていない小太郎から名前を聞いたと言ったことの二つ。

——まさか心でも読めるって言うん——

「ご名答、だね。僕は覚さとりの映心えいしん、ていうんだ。よろしくね。真希さん」

スツと差し出された手を、しかし真希はつかめない。

本当に心が読めるのだとすれば、怖い。きっと、自分でも自覚の無いところまで、自覚が無いと思っているものまでのぞかれてしまう。それは、嫌だ。

視野が狭まり、ただ目の前しか見えなくなる。差し出された手。目の前の毛むくじや。それが恐怖の対象になりかけた時、

「映心。そうやって初対面の相手で遊ぶのは止めると言っただけやろ
うが」

ずっと小太郎が間に割り込んできた。その背中に隠れるような
形になって、真希は自分の中で急速に恐怖が萎んで行くのを感じた。
不思議なくらいあっけなく、狭まった視野が元に戻っていく。

「言ってない、よ。君は心で、思っただけだ」

「こちらの意思を伝えるにはそれで十分じゃろう」

「いいじゃないか。初対面じゃないと、出来ないんだよ」

「じゃからと言って、真希を怖がらせるな。わざわざ威圧までかけ
よってからに……」

そこで言葉を切って、小太郎は真希の方へ振り返って来た。彼の
手が彼女の頬に伸び、そっと触れる。

「大丈夫か？」

その声は、今までに聞いたことが無いほど優しい感じがした。と
同時に、まだ少し残っていた恐怖や嫌な感じもまとめてどこかへ消
え去ってしまう。

「……うん。だいじょうぶ……ぶ？」

元の状態に戻り、多少頭がすっきりしたところで、真希は小太郎
のやっていることを正しく認識した。一瞬で顔が沸騰し、

「うきやああっ！」

奇声を発して思いっきり小太郎を突き飛ばした。

「うおっ！」

「おっと」

突き飛ばされた小太郎は背中から映心に突っ込み、しかし映心が身体に似合わぬ身軽さで回避したため、そのまま倒れて思いっきり床に後頭部を打ちつけた。

「ぐおおお……」

後頭部を抑えて小太郎が転げまわっている。おそらく相当に痛いのだろうが、今の真希にはそんなことは関係ない。

「今のは事故今のは事故今のは事故……」

ぶつぶつと声に出し、必死で自分に言い聞かせる。

痛みに呻く小太郎と、ぶつぶつ言葉を発する真希の様子は、その後しばらく続けられることになった。

第三章 その6

「ごめん、なさい」

一通り落ち着いたところで、真希、小太郎、剛錬、映心の四名は、囲炉裏を囲んで車座になって集まっていた。

ともかく先の悪戯の詫びからということで、映心が素直に真希に頭を下げる。

「いえ、もう大丈夫ですから」

「真希。もったときつちり怒ってもええんじゃないぞ？」

「まあ待て。映心殿もしっかり反省しているんだ。真希さんもこう言っているのだから、この件はこれで流そうじゃないか」

小太郎はまだ納得が行かない様だったが、被害者の真希が映心を許すと言っているのです、それ以上は強く言えず、剛錬の言葉もあつてしぶしぶ引き下がった。

「じゃあ、今度こそ、僕はこれで」

「下まで送りましょう。小太郎。お前は真希さんを頼むぞ」

「おうおう」

巨漢二名が同時に立ち上がり、小太郎は野良犬を追い払うかのようにしつしと手を振っている。その様子に、真希はずいぶんと邪険に扱っているなと思い、しかし嫌っているのとはちよつと違う印象も受けた。

「それじゃ、またいつか」

入り口から出ようとしたところで振り返った映心が、軽く手を挙げて来た。

「あ、はい。また」

それに応えて真希も手を挙げる。そういえば、結局握手は出来ていないと言葉に出さずにいると、

「ああ、そうだったね」

言って、映心はテクテク真希の近くに帰って来ると、挙がったままだった彼女の手をひょいとつかんできた。その手は思いの他柔らかく、かすかにくすぐる体毛もまた、筆のようにふわふわした感触である。

どうもまた、心を読まれたらしかった。真希はどう反応したのかと苦笑いのような表情を浮かべる。

「うん。じゃあね」

真希の反応に満足したのか、今度こそ映心は剛錬と一緒に家を出て行った。それを見送って、

「……映心さんで、不思議なひ……とじゃないけど、何ていうかつかみ所の無い感じね」

真希は左前に位置する小太郎に一応ひそひそと話しかけた。

「映心以外の覚は、もつとつかみ辛いと思うぞ。元々、余り他種族と関係を持っていない種族じゃからな」

「閉鎖的ってこと？」

「いや、締め出しておるのは覚以外の種族の方じゃ」

「え？ なん……ああ、そっか」

理由は、ついさつき真希自身も味わった感覚に起因するのだろう。覚は相手の心を読む。それは何も言わずとも自分を知られるということだ。しかし、こちらは同じ状況で覚を知ることができない。ただ一方的に、自分のことだけが知られる。

「みんな、怖いんだね」

「じゃな。覚もある程度知らないようにすることは出来るそうじゃが、それにしたって知られる側は覚を信用せねばならん。それが出来るなら、例え読まれていようとも関係ないしのう」

相手の心を読むというのは、話だけなら非常に便利そうにも思える。だが、心が読めてしまうということは、聞きたくない本音も聞かされてしまうということでもある。

「辛く、ないのかな？」

「さあな。儂は映心以外の覚を知らんが、少なくともあいつは自分の能力を悲観的には思っておらんようじゃな。あんな悪戯しかけるくらいじゃしのう」

「あたし、思いつきり怖いとか嫌だとか考えてた気がする……」

会っていきなり心を読まれ、小太郎が言うにはやや威圧も受けていたようで、そんな状態なら仕方が無いじゃないかとは思う。しかしながら、そういった事情を聞いてしまうと、自分の態度は相手を傷付けるものだったのではないかと不安にもなるのだ。

「そりゃ自業自得じゃ。何を考えてあんな真似をしたのかは知らんが、その結果は全て自分の責じゃ。真希が気に病む必要はない」

「うーん……」

小太郎の言うことはもったもなのだが、それでも真希は割り切る
ことが出来ない。

「せめてもう少し話が出来ればな……」

ほんの少し、すれ違っただけのような接点では、映心を知るには
あまりに情報が無い。そう思っただけの発言だったが、

「……は？」

小太郎はなんとも気の抜けたような感じで、真希の方を凝視して
きた。その様子からして、きつと怪訝な顔になっているだろうと真
希は予想する。

「どうかしたの？」

「いや、どうかしたのはお主の方じゃろう。覚ともつと話がしたい
などと言う者を、僕はついぞ見たことが無い」

そう言われても、真希としては相手を少しでも知るためには会話を
する必要があるだろうと考えただけで、そこに深い意味は無い。
だから、小太郎が何に驚いているのかいまいち分からなかった。

真希が素直にそう言っていると、小太郎はしばし沈黙した後、

「かっかっかっかっ！」

突然腹を抱えて声を上げ、そのままごろごろと転げ回り、ついには
バンバンと床を叩き始めた。いつかの時のように、見事な爆笑で
ある。

「こ、これはええ！ 映心の奴が、わざわざ手を握りに戻ってくるわけじゃ！」

「えと、あたしそんなに面白いこと言っただ？」

心当たりがまったく無い。真希はそれまでの会話を思い出してみるが、小太郎が笑い転げる要素があるように思えなかった。

「おうおう。言っただけ言っただけ。覚の力を怖いと知ってなお話したいなど、よほど肝が据わっておるか、さもないければたわけじゃ」
「……ああ」

言われて、真希は自分が傍目に矛盾しているような発言をしていたことに気がついた。心を読まれるのが怖いと言っただのに、心を読む相手ともっと話がしたいというのは、確かにおかしいことに思えるだろう。

——だけど、それは——

ちよつと意味が違う、と真希は考えている。確かに知らぬ間に心を除かれるのは気持ちのいいものではないが、だからと言って映心と話したくないということにはならない。

そんな、のぞかれて困るほどの映心に対しての感情が、真希の中にはないのだ。

それはきつと、映心も同じだろう。少なくとも、会っていきなり敵対し合う様な関係ではなかったと思う。悪戯は真剣に怖かったが、あれは彼にとって軽い挨拶のようなものだったのだと思えば、まま納得はいく。

「結局、嫌ったり出来るほど映心さんのことを知ってるわけじゃないもの。なら、ちゃんと知り合ってみたいじゃない。それで嫌いにならないでいられれば、そっちの方がいいでしょう?」

「おう。そうじゃな。真希の言う通りじゃ。好くも嫌うも知って初めて出来る、いや、知ってから好いて嫌ってをすべきなんじゃろうな。実際は知らんでも嫌うことなんぞざらじゃが、うむ、断然こっちの方がええ」

姿勢を直し、小太郎は胡坐をかけた膝をポンと打つ。

「よし。真希、面白い物を見せてやる。ちょい付いて来い」

言うや否や、小太郎はすくつと立ち上がり、囲炉裏を迂回してひよいと段差を降りた。

「あ、ちよつと待ってよ」

慌てて真希も立ち上がり、小太郎に続く。どうやら彼は、彼女の位置から右手にあった引き戸へ向かっているらしい。

それを確認して、真希はそういえばと家の中を見回した。

来た直後は映心の一件でまともに観察できなかったが、ようやく小太郎の家を見渡す余裕が出来た。

雰囲気としては、時代劇に出てきそうな古寺といった感じだろうか。現代的な家具の類は皆無で、小太郎が背にしていた物入れの他は、入り口横に置かれた水がめ以外には何も無い。

——引越し直前か何かみたい。

あまりに物が無いので、本当にここに住んでいるのかと疑いたくなるほどだ。

「物がほとんどないんだねって、こっちにもほとんど何もないわね」

小太郎に続いて引き戸の向こう側にやってきた真希は、ちょうど一人部屋のような場所に出た。

奥の隅の方に台が置いてあり、側に座布団らしきものが一枚ある以外は、本当に何も無い。部屋というよりただの囲まれた空間だ。

「一応儂の部屋じゃが、必要なものはおおよそ持ち歩いておるからの。わざわざどこかに置いておかねばならん物は、その大半が必要のない物じゃしな」

すごい極論である。真希もあまり物に執着しない方で、部屋の中は非常にさっぱりしていると自負しているが、どうも小太郎はそれ以上に、それこそ綺麗さっぱりしているらしい。

「まあ部屋のことはどうでもええじゃろ。わざわざここへ来たのは――」

小太郎は台の置いてある方へ歩いて行くと、その上に置いてあった一つの鉢植えを持って真希の前に戻ってきた。その鉢には元氣なく萎れた一本の苗木が生えている。

それを見た真希は、妙な既視感に襲われた。

――あれ？ この苗木、どっかで見たような……？

思い出そうと記憶を探る。幼い頃。森の中。捨てられたゴミの山。そして――

「どうかしたか？」

小太郎の言葉に、真希は思考を中断される。既視感はあるという間に薄くなっていき、やがて気のせいだという結論が彼女の中で出された。

「……ううん。で、それ何？ 枯れてるみたいだけど」

辛うじて立つてはいるが、少し触れただけで倒れるかぼつきりといってしまうほどの、普通に見れば死んだ苗木である。

「これはな、儂の夢じゃ」

「夢……？」

唐突な宣言だった。枯れた苗木を夢といわれても、真希としては反応に困る。普通、これから生長していく苗木を持って夢というのが普通ではないだろうか。

「ふむ。その顔は枯れた苗木の何が夢なのかと思っておる顔じゃな」
「いやだつて、普通はこれから大きくなっていく苗木を持つてくるところじゃない？」

枯れた苗木では、まるで夢が終わってしまったかのようで、逆に縁起が良くないと真希は思う。

「この苗木はただの苗木ではないぞ。霊樹の苗木じゃ」

霊樹、と聞いて、真希は一度その名前の意味を掴むことに失敗した。それがあまりにも自分の中で結び付けられていたものとかけ離れていたせいである。

いくらか遅れて、改めてその名前を掴んだ時、

「ええええっ!？」

真希は驚愕の声を上げた。

霊樹と言えば、今まさに真希が立っている場所。地面の代わりに全てを受け止めている巨木のことである。その雄大な姿と、目の前の枯れた苗木がどうしても繋がらない。

「そんな驚くもんでもなかるう。霊樹に限らず、そこらの木々も初めはこんなもんじやろうが」

「いやそれはそうなんだけど、あの大きさを見た後だとね……」

真希は小太郎の持つ霊樹をまじまじと見つめる。小さな鉢に収まる苗木が、四千年後には高層ビルのような巨木になるところを想像しようとして、出来ないので諦めた。

「それで、この枯れた苗木が霊樹だとして、何が夢になるわけ？」

よもやこの苗木の生長が夢ということはあるまい。枯れた苗木が成長するはずが無いのだから。

「儂の夢はな、この霊樹の苗木を蘇らせることじゃ」

「……………はい？」

力強く宣言されたのは、真希にとってあまりに突拍子のないこと。どこか、自然の摂理にすら逆らうような内容だった。

「いやいや、いくらあんたたち妖怪が不思議な力を持ってるって言っても、さすがに枯れた植物を蘇らせるってのは無理じゃない？」

真希の認識では、植物が枯れるということは死ぬことである。死んだものは生き返らない。それが自然の摂理だ。

「普通は、な。じゃが、その絶対の死に挑戦した者が、長い妖怪の歴史の中に数多く存在する」

その言葉は、真希の頭の中に不老不死や死者蘇生という言葉を連想させた。人間の歴史においても、死の克服は幾度となく試されてきた事柄である。

小太郎は一度そこで口を閉ざすと、真希に背を向けて部屋の奥へ向かった。鉢を再び台の上に戻し、その場に胡坐をかくと、座布団を自分のやや前に配置して真希に手招きをする。誘われるままに真希は小太郎の前まで移動し、座布団の上で正座をする。それを待ってから、小太郎は再び口を開いた。

「あるんじゃないよ。自然の摂理に反する秘術が」

その声には、ここだけの秘密と言って話を切り出すような、独特の雰囲気があった。

「もつとも、あまりに危険な術じゃ言うて、禁術とされておるがの。一応伝わってはおるが、他にも無数にある禁術をまとめた禁書は、とある場所に封印されておる」

「危険で、やっぱり悪用されないように？」

「それもある。が、まあ大部分は使ったらほぼ確実に寿命が縮んで、最悪結構な確立で死ぬからじゃな」

さらりと爆弾発言が飛び出した。

「死ぬって、それ危険どころじゃないじゃない！」

使用したら死ぬ術なんて、それは禁止されても当然だと真希は思う。だが、思った直後に一つの疑問が浮かんだ。

「あれ？　けど、そういう術を使った本人が死ぬのなら、罰としてはこれ以上ないくらいじゃない？　というか、死ぬのが分かってて使う奴はいないと思うけど……」

「ふむ。確かにそうじゃ。じゃが、使えば死ぬと分かっているもお使いたいと思う者もある。で、大概そういう連中は自分は死にたくないという自分勝手な考えの持ち主じゃ。さて、死にたくはないが禁術は使いたい。こういう状況になった時、何が起るじゃろうな？」

聞かれて、真希はわずかに思考を巡らせ、一つのあまりよろしくない答えに思い至る。

「いわゆる生贄を見付けて、代わりに術を使わせると思うわ」

効果だけを得て、代償から逃げるための方法としては一般的なものだろう。真希としては許容し難い行為だが、程度の違いこそあれ、似たような事例は幾つもある。

「その通りじゃ。何らかの契約に基づく同意の上でならまだ問題はないが、大半は強制的じゃったり、上手く騙くらかしたりしてということになるじゃろうな」

小太郎が胡坐のまま片肘を立てて手を顎に添え、何となく呆れたような声を出した。この辺り、自分と同じような価値観を持っているらしいと感じ、真希は少し安心する。

「それに、もし運良く死ななかつたとしても、確実に寿命が減る、妖怪の寿命については、三平から少し聞いておったじやろう？」
「うん」

妖怪にとって寿命は強さだと、三平は言っていた。ならば、意図的に寿命を削らせることで、妖怪は弱くすることが出来る。真希は妖怪の社会についてまだそれほど詳しくはないが、序列の様なものはあるだろうと思っている。ならば、相手を蹴落として上に行きたいと考える者もまた、いるだろう。

「混乱の元じゃいうことで、寿命が減ったり死んだりする術は禁術になったわけじゃな。じゃけえ、今は禁術の存在は知っていても使うことのできる妖怪はほとんどおらん」

「けど、それでも手を出そうとする妖怪はいるんじゃないの？」

「禁じられたばかりの頃は結構おつたらしいが、手を出そうとしたもんは見せしめに殺されることが多かったからのう。今ではめったにおらん」

「か、過激ね……」

この辺りは人間社会より厳粛なようだ。人を殺してもなかなか極刑にならない事例をよく知る真希は、妖怪社会の徹底振りに軽く恐怖を覚える。

「それほどのもんということじゃ」

小太郎は姿勢を戻すと、一度台の上に置いた霊樹の苗木の方へ顔を向けて、再び真希へ視線を戻した。

「で、かなり話がそれたが、ともかくこの苗木を蘇らせる方法はあ
るゆづことじゃ」

「でも、それって禁術なんですよ？ 使える妖怪はほとんどいないって言ったじゃない」

「全くおらんとは言うておらんぞ」

「そうだけどさ。仮に使える妖怪がいるのだとしても、寿命縮むような術を使うとは思えないけど？」

霊樹が妖怪にとってどれくらい重要な物なのか分からないが、真希の考えでは命を投げ出せるほどに重要な物かどうかは怪しいものだ。

「そこじゃ。普通に禁術を行使すれば確かに寿命が縮んでしまう。じゃがな、それはあくまで自分の力だけで術を行使した場合じゃ」「……どういうこと？」

わざわざ言葉の一部を強調したのはそこが肝になるということなのだろうが、真希はまだ明確なイメージが浮かばない。

表情からそれを読み取ったのだろう。小太郎は続けて、

「お主はここに来る時に、飛天屋の輿の上に乗ってきたな？」

「うん」

「飛天屋がおらんかったら、自力で飛んで来ることになったじゃろう。じゃが、実際は飛天屋がおったおかげで、お主は自分で飛ぶという労力を払わずに済んだわけじゃ」

その例えで、真希はピンと来た。小太郎の説明を別な形に言い換えるなら、火を起こすためには木々を必死に擦り合わせるよりも、マッチやライターを使った方が苦勞しないということになる。

「つまり、自分以外の力を利用することで、寿命が縮んだり死んだりする危険性を回避しようってこと？」

「その通りじゃ」

小太郎は懷に手を差し入れると、一つの小瓶を引つ張り出した。三平の家でもらった、赤い粉末の入った小瓶である。

「これは僕の夢を達成させるために必要な道具の一つじゃ。材料を手に入れるのがなかなか難しくての。まだそんなに量が無い。他の物も徐々に揃えてはいるが、量は似たり寄ったりじゃな」

小瓶を台の上において、小太郎は軽くそれを指で弾いた。透き通った高い音が真希の耳を打つ。

「それを使うと、寿命を減らさずに禁術が使えるの？」

「理論上はな。まあ、さらに術の効果を最小限に絞ってという条件付じゃがの」

「最小限に絞る？」

「普通は使えば一発で復活するんじゃが、それをやるとさすがに何を使っても寿命が縮むことは避けられんからな。中途に使っても中途に寿命が減ってしもつて意味が無い。やるなら死ぬ気か、または影響無くを目指さねばならん」

一度で達成できる代わりに寿命を縮めるか、苦勞して準備を整えながら、徐々に蓄積していくか。それはどちらも、大きな苦痛を伴う作業だ。

「ねえ。その効果を絞って術を使った場合、どのくらいでその靈樹は生き返るの？」

「ん。これも計算上じゃが――」

顎に手を当て、顔を斜め上に向けた小太郎は、なんでもないう

な口調で、

「——大体千年くらいじゃな」

そう口にした。

瞬間、真希の周囲から音が消えた。続く小太郎の声が、一切耳に届かなくなる。

「千……年……？」

真希の顔が凍り付く。

その途方も無い年数に、彼女は強いショックを受けた。三平と話していた時に無意識に閉じた蓋が、その衝撃で開けられてしまう。

——『人と妖怪の寿命をお、同列に考えちゃあいけないよう』

鴉天狗の寿命は三千年。千年はその三分の一だ。これを人間の寿命で考えると、大体三十年ということになるだろうか。

——違う。

比率の上では同じ計算だが、片や残り二千年。片や残りおおよそ六十年。これが同列なはずは無い。

——だから、あたしじゃ——

小太郎の語った夢は、決して真希には理解の出来ない、決して届くことのないものだ。真希が人間である以上、その夢の先を見ることは出来ない。例え、どんな奇跡が起きようとも。

「真希？ どうしたんじゃ？」

「え……？」

いつの間にかうつむいていたのか、真希は顔を上げて小太郎を見た。お面に隠れて見えないはずなのに、困惑している様子がよく分かった。そして、

「なっ！ おい真希どうしたんじやいきなり！」

突然大きな声を上げて、小太郎は真希の顔に向かって手を伸ばし、ビクリと動きを止めた。真希は映心の時の経験で躊躇したのだろうか考えたが、

「……あれ？」

視界が急に滲み、頬を何かが伝う感触があったので、真希は自分で手を伸ばした。指先が湿り気を帯びる。少し離して見てみると、水滴に濡れていた。

「あたし、なんで、泣い……て……」

そこが、限界だった。ぎゅっと胸を締め付けられるような感覚を覚え、

「うう……あ……」

真希は嗚咽を漏らしながら自分を強く抱き締める。身体が前に倒れ、涙の雫が床に跳ねた。

「な、な、何事じゃあ！ 真希い！ おいしつかりせい！ 真希！」
大慌てになった小太郎が真希の身体を揺するが、その嗚咽は止まらない。

——駄目、なんだ。あたしじゃあ駄目なんだ。

妖怪の住処へ来て、それなりの時間を小太郎と一緒に歩いてきた隣を歩いている気になっていた。

けれど違う。隣を歩いていたのは、小太郎が真希の歩幅に合わせていたから。置いていかないように、彼が気を配っていたから。

真希の力じゃない。全部が全部、小太郎のおかげ。彼女は何もしてはいない。

その事実気付いてしまった。千年という年月を、なんでもないことの様に語る彼を見て。三平が言った言葉を思い出して。気が付いてしまった。

——あたしじゃ、小太郎の隣を歩けない。

真希の嗚咽は止まらない。今までに感じたことのないほどの苦しさが、胸を締め付けその身を苛んでいた。

第四章 その1

第四章

その日は朝から快晴の空だった。部屋の窓から見上げるそれは、見る者の心を洗うような、清々しいまでの濃い青を一面に広げている。

だが、そんな天気とは裏腹に、真希の心はどんよりと曇っていた。

原因はもちろん、妖怪の住処を訪れた時の一件である。

あの後、戻って来た剛錬が勘違いをして小太郎に鉄拳制裁を加えるまで、真希は一人で泣き続けていた。

本来は夕飯まで振舞われる予定だったらしいが、真希の様子を心配した剛錬によって、彼女は家に送り届けられる次第になった。

帰宅後、美春や昇治に何かあったのかと問われたが、真希は黙って首を振るだけに努めた。自分の中でもまったく整理が付いていないことを、誰かに話すことは出来ない。

支離滅裂で、意味不明なものを撒き散らすだけになってしまつて分かつていたから。

風呂場で汗を流し、その日はそのまま落ちる様に眠ってしまった。

次の日、日曜で休みだったが、何もする気になれずにごろごろと寝て過ごし、その流れのまま月曜日の今日、学校を休んだ。

ズル休みをしたのも、基礎訓練をサボったのも、初めてだった。それくらい、真希は無気力になっている。

少し時間を置いても、何も変わらなかった。いや、逆に時間を置いたことで、ぐちゃぐちゃになった物が余計にわけの分からないも

のに変質してしまったようにすら思う。

苦しくて、悲しくて、辛くて。けれど、何でそんな感情を抱くのが分からなくて。

それは、人間と妖怪の決定的なまでの差を見せ付けられたからなのか。

それによつて、小太郎の隣を歩けないことに気が付いてしまったからなのか。

例えそうなのだとして、何故これほどまでにそのことにショックを感じるのか。それが真希には分からない。

これほどまでに胸を締め付けられ、自分が自分でないかのような錯覚を覚えるほどの感情の正体は、いったいなんなのだろうか。

——……………ん？

真希がベッドの上で悶々とし続けていると、玄関で呼び鈴がなった。

動くのが億劫な彼女は無視を決め込むが、少しの間を置いて再度呼び鈴が鳴り、その後も一定間隔で鳴らされ続ける。

——し、しつこい……

あまりの諦めの悪さに萎えた真希は、よろよろとベッドから起き上がり、何とか身支度を整えてからドアホンにて対応に出た。

「どちらさまですか？」

「あ、真希ちゃん？ もー。いるならさっさと出てよねー」

ドアホンの画面に映し出されたのはセミロングの黒髪の女性だった。どこことなく美春によく似たその女性を、真希は知っている。

「……彩夏叔母さん？」

画面に映る来客は、美春の妹の彩夏だった。
真希は急いで玄関に向かい、ドアを開ける。

「やつぽー。久しぶりね。真希ちゃん。ちょっと大人っぽくなったんじゃない？」

ドアの向こうに立つ彩夏は、向日葵のような笑顔をしていた。

「えと、お久しぶりです。半年くらいですから、そんなに変わってないですよ」

「あら、そうでもないわよ。貴方くらいの年頃の女の子ってね、凄い速さで変わっていくのよ。自分ではなかなか気が付かないかもしれないけれどね」

「そう、かなあ……」

真希はさつと自分の姿を確認する。この半年で何かが変わったようには思えない。むしろ一部の部分は中学生の時から芳しくない。自分の身体の変化は自分では気付き難いというが、それにしただってである。

「そうそう、今日は私だけじゃなくてね」

「え？」

突然彩夏が横に避けたかと思うと、それまで彼女が壁になって見えなかった位置にラフな格好をした男の一人、眠った赤ん坊を抱いて立っているのが真希の視界に入ってきた。

「やあ、こんにちは」

「源尚さん、姪の真希ちゃんよ。覚えてる？」
「ええ。結婚式の時にお会いしましたね」

源尚は彩夏の言葉に頷いて、柔らかな眼差しで真希を見て来た。短くさっぱりとした黒髪に、整った精悍な顔つきをしたこの男性は、この冬に彩夏と結婚した人だ。いや、実際は人ではない。

「さて、真希さんも私たちの事情を知ったとうかがってますので、改めて自己紹介をさせてください」

源尚は抱えていた赤子を彩夏に渡すと、スツと一步を踏み出し、真希の前に立った。小太郎より少し低いくらいの彼はその場で姿勢を正し、

「鴉天狗の源尚と言います」

一礼しつつ、そう名乗った。

「あ……そう、なんですよね。そういえば」

「ええ。あの時はまだ真希さんがこちらに関わるかどうかは確定的ではなかったものですから、情報は伏せるようにと言われていました」

ニコリと笑う源尚は、まさにどこにでもいそうな感じのいい男性である。小太郎のように目立つ格好をしていないということもあるのだろうが、真希の目にはやはりただの人間にしか見えなかった。

「自己紹介といえば、この子もね」

源尚の後ろに控える形になっていた彩夏は、腕に抱く小さな命を真希に差し出してきた。

「抱いてみて」

「え……と……」

恐る恐る彩夏の手から赤子を受け取り、彼女の指示通りに真希は腕に抱く。確かな重さと温かさを感じ、真希の心臓は早鐘を打った。

「翔^{かける}っていうの。字は飛ぶっていう意味の翔」

少し目を細めて、彩夏は嬉しそうに赤ん坊の頬に触れた。それに反応して、真希の腕の中で小さな声が聞こえてくる。

最初は可愛らしく耳をくすぐるような声だったが、徐々に大きくなり始めたので、真希はちよつと慌てて、

「叔母さんこの子——」

「あらあら。さすがに敏感ね」

彩夏は慣れた手付きで真希から赤ん坊を受け取ると、どこかで聞いたような歌を口にしながらゆつくりと漂うように動き始めた。それは愛情という感情が目に見えるのではないかと思うほどに、慈愛に満ち溢れた光景だった。

ふと、真希は視線を源尚へと移した。彼の眼差しもまた、慈しみに溢れた優しいものだった。

それは何も赤ん坊だけに向けられたものではない。彩夏も含めた、彼の妻と子に対してのものだ。

そこに確かな絆を感じた真希は、一つの決断を下す。

「彩夏さん。いらして早々なんですけど、ちよつと、相談に乗って

くれませんか？」

歌を止め、ピタリと動きも止めて、彩夏はキョトンとした顔で真希を見た。源尚もまた、やや不思議そうな表情で真希を見ている。

「とても、大切なことなんです」

胸に手を当てながら、真希は強い意思を宿した目で彩夏を見た。その瞳から何を感じ取ったのかは分からないが、彩夏は赤子を源尚に預けると、

「源尚さん。悪いんだけど少し翔の面倒を見てもらえる？　ちょっとデリケートな話題になりそうだから」

「そうなのかい？　それじゃあ、男の僕は大人しく退散するとしてよ。どこかの部屋を借りさせてもらおう」

「ええ。ぐずったら荷物にミルクもあるから、お願いね」

その他あれこれと彩夏は指示を与え、愛してるわと言って源尚に軽くキスをした。真希の目の前だったことで気恥ずかしかったのか、彼はやや頬を赤らめながら、赤ん坊を抱えて家の中へ入っていく。それを見送ると、

「とりあえず、ここじゃなんだから私たちも中へ入りましょうか」

「あ、はい」

二人は玄関から居間に移動すると、それぞれ手近な椅子に腰をかけた。

真希は二度三度と深呼吸をして心を落ち着けると、

「……えっと、彩夏さんは、どうやって源尚さんと知り合っただ

すか？」

「ああ、真希ちゃんの相談事ってそっちの話なのね。そっかそっか。ずいぶんと思いつめた目をしてるから何事かと思ったけど、もうそんなことを考えちゃうくらいにはなっただ」

真希はまだ一言しか喋っていないのに、彩夏はそこから何かに思い至ったようで、一人得心がいったとうんうん頷き始めた。

「あの、彩夏さん？」

「え？ ああ、ごめんごめん。やっぱり若いと早いなあって思っただ。私が真希ちゃんの悩みと同じことでつまづいたのって、それなりに後だったからさ。多分、若干悩みの質も違うんだろーし。なんて言うか、ここが社会人と学生の差なのかもしれないわね」

「はあ……」

彩夏と同じ思考があれば、真希にも今の説明で何か分かったのかもしれないが、現状何を言っているのかさっぱりだった。

「それで、私と源尚さんの馴れ初めだったわね。私と源尚さんが知り合ったのは、本当にただの偶然よ」

出会ったばかりの頃、会社に勤めていた彩夏は、とある企画で別の会社から出向してきていた源尚と仕事をする事になった。その時は特に何も無かったのだが、ある夜にばったり社外で出くわし、一緒に食事をしてから急速に知り合うようになっていったそうだ。

「会う度に、不思議なくらいに惹かれて行っただ。最初はちよっといいかって思ってるくらいだったのにね」

テーブルに肘を着いて顎を上に乗せ、彩夏はその記憶を懐かしむ

ような目で宙に視線を向けていた。

「でも、その時はまだ源尚さんが妖怪だってことは知らなかったんですよね？」

今まで聞いた話の中で、源尚の正体が明かされていた様子は無い。出会った時から正体を告げられていた真希と違って、彩夏は彼の正体を知らずに付き合っていたはずだ。

「そうね。しばらくそんな関係が続けて、そのうちに押さえきれなくなった私の方から告白したわ。もう何年振りだったかしらね。誰かに好きですって言ったのは」

自分の気持ちを伝えた彩夏に、しかし源尚は嬉しさと恐怖をないまぜにしたような表情を作ったという。

嬉しさはもちろん彩夏に好きだと言ってもらえたこと。そして恐怖は――

「今思いだしてみれば、凄く変な顔をしていたわね。でも、あの時は何でそんな顔をするのか分からなくて、私も困惑したわ」

何か気に障るような、傷付けるようなことを知らずにしてしまったのかと焦る彩夏に対し、源尚は「これ以上貴女を騙したくは無い」と言っ、自分の正体をさらけ出したのだという。

「驚いたわ。多分、私の生涯で一番の驚きがあの時だと思う。だって、ねえ。作り話の世界にしかない妖怪が、目の前にいたんだもの」

それがまるで笑い話であるかのように、彩夏はケラケラと笑った。

「怖いとは、思わなかったんですか？」

「そりゃ、ちよつとは思ったわよ。姿形は別人、というか明らかに人間じゃなかったしね」

真希は天狗の住処で見た鴉天狗たちを思い出す。この場にはいない源尚が、予備知識の無い状態でいきなりあの姿になったとして、真希は果たしてそれに耐えられるだろうか。

「でも、ね。確かに全く別人に見えたけど、彼の目とか今にも泣き出しそうな雰囲気とか、そうだったものは何も変わってなかったわ。だから私は、彼を見失わなかった」

要はそういった着ぐるみを着てるだけみたいな感じかな、と言う彩夏に対し、真希は素直に凄いと思った。彩夏と同じことが出来る人が、いったいどれだけいるだろうか。

「そこから先はトントン拍子ね。恥ずかしながら結婚は出来ちゃった婚みたいになったけど、元々一緒になるうとは――」

さらりと流されそうになった気がして、

「あ、そうです」

真希は彩夏の言葉に被せて止めた。それに対して、彩夏は優しくな笑みを浮かべ、

「分かってるわ。真希ちゃんの悩みはここでしょう？ 私たち人間と、源尚さんたち妖怪の大きな違い」

真希はコクリと頷き、そしてわずかにうつむいた。胸の痛みが再発し、ギシリと軋む。

「それで、最初に言ったのだけど、多分私が悩んだことと真希ちゃんが今悩んでいることは、元は同じだけどちよつと質が違うと思うわ。あと、根本的な私と真希ちゃんの価値観の違いもある。だから、その点は気をつけてね」

そう断ってから、彩夏は真希の抱える悩みに触れる話題を始めた。

「そうね。そもそも、真希ちゃんは何でそんなに悩んでいるの？
って、それがあやふやなんだとは思うけど、ともかく自分の考えを言葉にしてみてもいいから」

諭されて、真希はとりあえず悩むきっかけになった出来事を彩夏に話した。妖怪の住処に行った時のこと。三平の言葉。小太郎が軽々と口にした千年。

それらが真希を苛み、伴に歩くことは出来ないと感じてしまったことを、痛む胸を押さえながらも話し切る。

真希の話を小さく相槌を打ちながら聞いていた彩夏は、テーブルの上で手を合わせ、目を閉じてしばし黙り込んだ。

時計の針が時を刻む音だけが、やけに大きく聞こえている。

「……そっか。真希ちゃんはあくまで今のまま対等でいたいんだね。そして、対等になれないなら隣に立つ資格が無いと思ってる」

若いつていいなあ、と彩夏が溜息混じりに吐き出した。閉じていた目が開かれ、真っ直ぐに真希を射抜く。

「ねえ真希ちゃん。貴女の目から見て、私は源尚さんの隣には立て

ていないのかしら？」

その問いに、真希は息を呑んだ。彩夏は源尚の隣に立っている。そう思ったからこそ、真希は彼女に相談しようと決めたのだ。

故にそんなことはないと言おうとした真希を、しかし彩夏は軽く手で制した。

「ありがとう。貴女から見て隣に立っているのなら、私は嬉しいわ。少し自惚れだけど、きっとそれは、誰が見てもそう見てもらえるのだと思うから」

本当に嬉しそうに笑った彩夏は、その直後に少しだけ寂しさを表情に滲ませた。

「でも、ね。私だって源尚さんと対等なわけじゃないのよ。それは、私が一番良く分かっている」

そう。真希と小太郎が対等ではない様に、同じ問題を内包するはずの彩夏と源尚もまた、対等ではない。

なら何故？ と真希は思わずにはいられない。彩夏自身が対等ではないと言っているのに、何故彼女は隣に立てるのだろうか。隣に立っているように見えるのだろうか。

「私が源尚さん隣に立っているように見えるのはね、あの人が私に私のためにだけに時間をくれたからよ。妖怪としてではなく人間として。少しでも私が対等な立場に立てるように」

それはつまり、源尚が自らの尺度の全てを、彩夏という人間に合わせたことになる。妖怪としての自分をほとんど捨て、ただ一人の人間として隣にあることを選んだのだ。

「でも、それじゃ……」

真希は顔を伏せる。小太郎の隣にいるということは、彼が常に真希に合わせ続けるということになる。全てにおいて違はずの歩幅を、真希が小太郎に合わせられない分、小太郎が真希に合わせるのだ。

——そんな関係は、対等じゃない。

「そうね。真希ちゃんの考えが本当は正しいんだと思うわ。けれど、少なくとも源尚さんはこれでいいと言ってくれたわ。自分がそうしたいからそうするんだって」

「……え？」

彩夏の言葉に反応して、真希は伏せていた顔を上げた。目の前に、優しく微笑んだ彩夏の顔がある。

「ねえ、真希ちゃん。その彼は、貴女のために無理矢理何かを我慢している感じだった？ 貴女に合わせることを嫌うような雰囲気を出していたのかしら？」

その問いに、真希はこれまでの小太郎の行動を思い出す。そのどれも、多少面倒臭そうに思えることはあっても、決して嫌っている様子は無かったと思う。

「源尚さんに聞いたのだけだね。この婚約制度って、いつでも破棄出来るのよ。それは妖怪側からでも人間側からでも構わない。破談になるケースなんて、珍しくないんだって」

「そう……なんですか？」

初耳だった。真希は剛錬のやや強引な側面を多々見て来たので、無理矢理にでも婚姻を推し進めようとするのではないかと思ったほどだ。

「ええ。だつてほら、無理にくつつけたつて駄目なのは、何も妖怪と人間の組み合わせだけじゃないでしょう？」

改めて言われてみればその通りである。剛錬がやや強引に思えたのは、それだけ必死だからということなのだろう。

「で、真希ちゃんの話だけど、そんなあやふやな状況なのに、貴女は彼の家にまで招待されているわ」

ドクン、と真希の心臓が強く脈動する。その先に続く彩夏の言葉は――

「もしもその彼が無理に合わせているのなら、絶対にそんなことにはならない。それはつまり、貴女に合わせることを良しとしている証でもあるんじゃないかしら」

「でもっ！ 合わせてもらって対等になってもあたしは――」

そんなものは許せない。ただ与えられるだけの立場を、真希に許容出来るはずがない。

「そうね。そのままただ相手に合わせてもらっているだけなら、それは対等ではないわ。なら、真希ちゃんも何か相手の為にしてあげればいいんじゃない？」

真希は目を見開き、呼吸を忘れた。自分が小太郎に何かをしてあ

げられるなどと、考えたこともなかった。妖怪の常識外れな能力を知っているが故に、無意識的に考えを封じ込めていた。

「相手が自分に合わせてくれる。ここは妖怪と人間という関係上、私たちから合わせるのは難しいわ。でも、それならそれで私たちも何かしてあげられることを見つければいいだけのことなのよ」

妖怪は人間よりもずっと凄いい。そんな凄いい妖怪に、人間がいったい何を出来るというのだろうか。真希にはまるで分からない。

「だから私はね、ずっとあの人を愛して行こうって決めたの」

胸の上で両手を重ね、その奥にあるものを優しく抱きしめる様にして、彩夏は目を閉じて小さく笑みを浮かべる。

「盲目的に、という意味じゃないわよ？　きっと、些細なことで喧嘩だってするわ。そういったものを全部含めて、私は生ある限り一緒にいて、愛していこうって決めたの。この役目は、誰にも譲らないわ」

スツと目を開き、まるで宿敵に挑戦状を叩きつけるような視線を持って、

「他の誰でもない。私が、あの人に必要とされてるの。そして何より、私が、あの人の隣に居たいから」

彩夏が力強く言い放つ。その言葉は真希の内奥に突き刺さり、身体がぐらりと揺れたような気がした。

「ねえ真希ちゃん。貴女はどうしたいの？　その彼の隣に居たいと

は思わないの？」

彩夏の言葉に立て続けの衝撃を受けた真希の中では、様々なものが激流の如く暴れ回り、全く收拾が付かない状態にあった。だが、

「居たい、です」

不思議と彩夏の問の答えはすぐに出た。いや、最初から答えはあったのだ。だからこそ、小太郎の隣に立つ資格が無いと気が付いた時に、真希は深い悲しみを感じたのだから。

彼女は、彼の隣に居ることを望んでいる。

「でも、あたしのわがまままで、あいつを縛りたくない」

ただの足手まといになるくらいなら、そんなわがままを通すべきではない。それが真希の考えだった。

「別にわがままでもいいじゃない。もちろん、それを相手が受け入れてくれるかどうかはまた別の話だけどね。でも、そんなの言ってみなきゃ分からないじゃない。それでもしも受け入れてくれるのなら、素直に甘えてしまいなさいな」

あっけらかんと彩夏は言っただけ。あまりの言葉に真希が呆気に取られていると、

「そうして受け入れてもらえたら、代わりに貴女も相手のわがままを受け入れてあげなさい。甘えさせてあげなさい。それが持ちつ持たれつ、対等ってことになるんじゃない？」

しん、と静まり返った空間で、真希の内面もまた同様に風の世界

になっていた。あれほどまでに荒れ狂っていた激流が、一瞬にして収まってしまっている。

「存在として対等になれる人なんて、古今東西どこにも居ないのよ。それでも対等になりたいのなら、互いを補い合えるような関係になりなさいな。どちらかがどちらかを一方的に補うのではなく、ね」

パチリと片目を閉じて茶目つ気を見せる彩夏に、真希はしばし果然として、噴出した。そしてそのまま大きな声で笑い続ける。

単純なことだったのだ。どうしようもないものはどうしようもない。ただそのどうしようもないものにどう対処していくか。ただそれだけのことだったのだ。

どうしようもないものをどうにかしようとしたからつまづいただけで、最初からどうしようもないものと受け入れてしまえば、後は自分次第。

いくらでもやりようはある。

「少しはお役に立てたかしら？」

ひとしきり真希の笑いが収まったところで、彩夏が微笑みを浮かべながら尋ねてくる。

「はい。まだ完全じゃないと思いますが、大分すっきりしました」「それなら良かったわ。真剣に悩んだ真希ちゃんなら、きっと貴女にとって最高の答えが見付かるはずよ」

彩夏の言葉に力強く頷き、真希がお礼の言葉を言おうとしたところで、突然大きな泣き声が聞こえてきた。続いて、

「あ、彩夏さんちょっと来てください！」

半分悲鳴になった源尚の声が聞こえてきた。赤ん坊の対処で何か失敗でもしたのだろうか。

真希と彩夏はしばしキョトンと見つめ合い、同時に小さく噴出してクスクスと笑い合った。

「ちょっと行って来るわね」

「あ、はい」

笑いを噛み殺しながら、彩夏が居間を出て行く。

一人残された真希は、彩夏にもらった言葉を口には出さずに反芻する。自分がしたいこと、すべきこと。それがいつたいなんなのか。今はまだ明確には分からない。

——けれど——

ただ一つ分かったものがある。それは激流が去って静かになった心に残る一つの感情。

真希はその感情を優しく抱き締めるように、胸に両手を当てて目を閉じた。

その時、呼び鈴がなる。

余韻に浸りきれず、何となく中途半端な状態ではあったが、まさか彩夏や源尚にに対応に出てもらおうわけにもいかないのです、真希は仕方なくドアホンに出た。

「どちらさまですか？」

『おう。儂じゃ』

画面に映った人物を見て、もう少しで悲鳴を上げるところだった。声を無理に押し止めたことで、真希は激しくむせる。

『どうかしたか？』

「……げほ。ううん、なんでもない。ちょっと待ってて」

通話を切った真希は、トトトつと小走りで玄関まで行き、ドアを開いた。

「おう」

軽く手を挙げた小太郎が、いつもの格好で立っている。

「うん。って、今まだ学校の時間なのに、何でこんな所にいるの？」
「学校の方はあれじゃ、早抜けしてきた。ここにおける理由は無論、お主に会いに来た」

真希の心臓が激しく脈打った。それこそ、口から飛び出るかというほどに。

「えええとと、そ、それはどういった……」

これでもかと言うほどに目が泳ぎ、真希は両手の指を交差させたり擦ったりと非常に落ち着きを無くしている。

そんな様子をどう思ったのか分からないが、小太郎もまた少し落ち着かなさげに身をよじると、

「先日は、すまんかった」

いきなり真希に頭を下げてきた。

「はい？」

その行動の意味が分からず、真希はキョトンとするしかない。

「いや、ほれ、いきなり泣き出して、その後ひどく塞ぎ込んでおったじゃろ？ 親父がお主を送りに行つとる間に三平とか映心に相談したんじゃが、そろって儂が悪いと切つて捨てられての……」

ポリポリとお面をかく小太郎は、何ともバツが悪そうな様子だった。

その情けない姿を見て、普段とのギャップに真希は軽く噴出してしまふ。

「あ、ごめんごめん。別にさ、あんたは悪くないわよ。問題があったのはあたしだけで、もうそれも大丈夫だから」

「……本当か？」

噴出されたことを不審に思ったのか、それとも真希の言葉を訝しんだのか分からないが、小太郎は探るような感じで真希を見てくる。

「うん」

だが、真希がすっかり頷いてみせると、ややあってから、目に見えて彼の身体から力が抜けるのが分かった。本当に心配してくれていたのだと、真希の胸が少しだけ熱くなる。

「あ、そうだ。せっかく来たんだから、今日はあたしの部屋を見せてあげるわ」

「む？」

唐突な提案に、小太郎が首を傾げた。真希自身、いきなり何言ってるんだと突っ込みを入れるくらいだったので、その反応は至極当然といえた。だが、

「ええ、のか？」

恐る恐るといった感じだが、乗ってくる。

「そう言ってるのよ。まあそこまで楽しいもんじゃないかもしれないけどね」

ほら、と小太郎を家に招き入れ、真希は二階の自室へ向かう。大人しく付いてくる小太郎の存在を背中を感じながら、真希は相手には見えないように笑みをこぼした。

第四章 その2

「小太郎君のあれ、もう完全に日常の一部になってるねー」

十和子の言葉を受け、ちらりと隣へ視線を向けた先、小太郎の周りには今日も何人かの生徒が集まってきていた。授業後に行われる小太郎の簡易授業解説会である。

「真希はさっきの数学の公式分かったー？」

「まあ、何とかね。あれ以上複雑になると、ちよつと自信ないけど」

そもそも真希はそこまで勉強に興味がない。ことに数学など、義務教育過程で学んだ知識で十分社会生活は営めるのだ。

専門分野に進むのでもなければ、無理に覚える必要は無い。

「しかし、あいついったいどうやってそんなに勉強したのかしら」

そもそも、妖怪なのに人間の勉強が出来るのは少し不自然ではないだろうか。ついでに、英語なんかの横文字が苦手なのに、数学の成績がいいのも真希としては納得がいかない。

「基本的に独学らしいよー。お父様のお知り合いの先生に習いに行ってたこともあるみたいだけど。それと、数学関係の知識はある種記号として捉えてるみたいだねー。サインとかコサインとか、真希だって言葉の意味は良く覚えてないで使ってるでしょ？」

真希の疑問に十和子がさらりと答えた。何故かやけに詳しい様子である。

「十和子、あんたなんでそんなこと知ってるの？」

「本人に聞いたからだよー。って、あれ？ 真希はそういうこと何も聞いてないの？」

言われて、真希は特別小太郎について本人に尋ねた覚えが無いことに気が付いた。初めてまともに名乗り合ったのも空の上であったし、一つの機会だったお呼ばれはあんなことになってしまつて、結局その辺りの普通にすべきことを実はあまりやっていない。

真希としてはそれなりに小太郎のことを知っているつもりだが、よくよく考えてみれば、あまりよく知らないとも言える状態だった。

——小太郎のこと、か。

真希の視線の先で、小太郎が鉛筆をノートに走らせ、書いたものを周りに示した。クラスメイトから小さな歓声上がる。男子だけでなく数人ばかり女子が混ざっており、何となく小太郎の視線がそちらに行っているような気がして面白くない。

「真希、もしかして妬いてる？」

「ふえっ!？」

いつの間にか意識外に置いていた十和子の言葉に、真希は変な声を上げてしまった。

「な、何？ 妬くつて、なんで？」

「えと、小太郎君がクラスの女の子に目を向けると、真希がちよつと怒った様な感じになるの。だから、もしかしたらって」

言われて、反射的に真希はペチペチと自分の顔に触れてみた。鏡がないので分からないが、特に強張っている様子はない。

どういうことだろうか。と十和子に視線を向けると、何故か彼女は口元を押さえてニヤニヤと真希を観察していた。その様子に一瞬首を傾げて、真希はすぐに十和子の言葉が引っかかったことに気が付いた。

「謀ったわね？」

「えー？ 何のことー？ 分かんない」

おどける十和子を一睨みした後、真希は大きな溜息をついた。

視線は再び小太郎へと戻される。彼が女子のノートを指して何か説明をしている。ノートの子は何度か頷いた後、あ、と口を開いてすぐに笑顔になった。

——勉強が出来る女の子にもてるのかしらね。

漠然とそんなことを考え、真希は何かむかむかした物が湧き上がってくるのを感じた。

「やっぱり妬いてる」

十和子に指摘され、真希はぱたりと机にうつぶせになる。

「真希ー？」

十和子の不思議そうな声が聞こえるが、真希の頭の中はぐるぐると回転し、ちよつとした混乱状態にあった。あの馬鹿のせいだ、と真希は心中で小太郎を非難しておく。

そもそも、である。真希の中で小太郎という存在は、いきなり親が勝手に決めた婚約者候補で、鴉天狗という妖怪で、でも考え方と

かはまるで人間と同じ感じで、馬鹿のくせに勉強が出来て、英語が苦手で、エッチで、細身の割りに結構たくましくて、何となく頼ってもいいかなと思えて、一緒に空を飛んだことがあるという程度のものでしかない。

そのはずだったのに、ぐちゃぐちゃしていた物を吹っ切って、その後に残る感情を認識してからというもの、やたらと小太郎のことが気になって仕方が無いのだ。

気が付けば、真希の視界の中に小太郎がいる。無意識のうちに、彼の行動を目で追っているのだ。

「……何か変な感じがする」

真希の胸のうちにはもやもやした感情がある。たまらなく不快なようで、でもどこか心地よくて、何とも表現のしようが無い。

いや、この感情が何と呼ばれているのかは知っている。知ってはいるが、

——自分が自分じゃないみたい。

真希はかつてこれほどまでに強くこの気持ちを感じたことがない。荒れ狂うが如きその感情に、ただただ悩み、翻弄されるだけである。

——やっぱりあの馬鹿のせいだ。

真希はうつぶせのまま、ちらりと隣を盗み見る。クラスメイトに囲まれた小太郎は、少なくともそれを嫌がっている様には見えなかった。

人間は嫌いだと言った小太郎のそんな姿が、彼の父親を含む共存派にとって好ましく望ましい姿だということは分かっている。ただ、

あまりにもすんなりと溶け込んでしまっていることに、少しの寂しさを覚えてしまう。

気持ちだけが逸り、胸のうちに一度は振り切ったはずの不安が舞い戻ってくる。

——あたしは本当に、小太郎にとって必要な存在になれるの……？

そんなことを考えてしまったせいだろうか。放課後になって、文房具が欲しいので店を教えてくださいと言う小太郎の頼みを、真希は二つ返事で引き受けた。十和子は用事があるとかで辞退したが、その際に真希は「頑張つて」と一言告げられている。

十和子のおせっかいに微妙な反応を返して、真希は小太郎を伴って学校からさほど遠くない所にある激安ショップへ向かうことにする。

資金があまり無いという小太郎の意向を汲んでの選択であった。

「ところで、文房具っていつでも何を買うの？」

大通りに面した歩道を進みながら、真希は小太郎に今回の目的の品について尋ねた。

道行く人々が、スポーツバッグを肩に下げつつ、しかしいつも通りの小太郎の格好にぎよつとするが、真希はもう気にしない。

「『くらすめいと』に鉛筆よりも『しゃーぺん』の方が使い勝手がいいと聞いてな。実際に借りてみたんじやが、これが確かに良くての。自分の物が欲しいと思っただんじや」

小太郎がバッグから取り出した筆箱の中身は、六本ほどの鉛筆と消しゴム、あとカッターナイフだった。カッターは鉛筆を削り出すのに使っているそうだ。

小太郎が学校で使っている物は基本的に剛錬が揃えた物らしく、彼自身はさほど人間の道具に興味がなかったという。そのためか、初めてカッターナイフを見た時は小刀の変な奴だと思っていたらしい。

「でも、あんた学校に来る前も色々勉強してたんでしょ？ シャーペンに触れる機会なんていくらでもあったんじゃない？」

「今にして思えばそうなんじゃが、親父の知り合いの先生は鉛筆こそが至高じゃとか言うておった人だな。後は筆と墨が最上とも言うておったか」

「ずいぶんと昔気質な人だったのね……」

どうりで小太郎が鉛筆しか持っていないわけである。それに、至高と最上とはどっちが上なのだろうかと別な意味で真希の頭に疑問が浮かぶ。

「しかし、鉛筆はいちいち削り出してやらねばならんが、『しゃーぺん』は尻の方を押してやればすぐに出てくるけえ。折れたときなんかも対応がし易いしのう」

それは真希にとっては周知のことであつたが、小太郎にとっては初めてのことなのだろう。説明するその姿は、とても楽しそうだった。だから、真希は無粋な突っ込みを入れることはしない。そんなことをして、楽しそうな小太郎を見れなくなるのは嫌だった。

「お金があんまりないからって安いところに案内するけど、本当にいいの？ シャーペンって言ってもピンキリよ？」

「大丈夫じゃろう。借りたもんも、百円で買える代物じゃ言つotta」

「あ、そう」

そのままとりとめもない会話をしながら二人は歩を進め、大きな交差点の角にある、百の文字が躍る看板を持つ激安ショップへと到達した。

「ここよ。中の物は大概百円で買える物ばかりだから、好きなものを選ぶといいわ」

「ほう。ほとんどが百円とは、太っ腹な店じゃのう」

「どうかしらね。物によつては原価は二十円とかそんなもんだった気がするけど。ま、いいわ。入りましょう」

自動ドアを潜つて、二人は店に入る。店の中には所狭しと様々な物品が並び、それなりの数の客もいるようだった。

「えーつと……」

真希は頭上を見上げ、文房具の案内板を探す。きよろきよろと何度か首を巡らし、目的の看板を見つけた。

「あつた。小太郎、文房具はあつち……つて、あれ？」

振り返つた先に、小太郎の姿が無い。慌てて探し回ると、ガラス製の食器売り場で商品を眺めているところを見つけた。

「ちょっと、小太郎。いきなりいなくならないでよね。心配したじゃない」

「ん？ おお、真希。いや、ここはすごいのう。こんな物まで百円で売つとるゆうんじゃないかな」

小太郎が手に取つたのは、ガラスの表面の一部が研磨された円柱

のコップだった。描き出されているのは、ひらひらと舞い踊る羽毛である。

「買いに来たのはコップじゃなかったと思うけど？」

「分かっておる。ただ、ちょっと珍しくてな。興味が引かれたんじや」

真希に言われ、どことなくしぶしぶと小太郎が手にしていたコップを棚に戻す。

そんな様子になった真希は、

「それ、欲しいの？」

「あー、いや、そういうわけではないがの。さて、とりあえずは『しゃーぺん』じゃ」

迷いを振り切るように、小太郎はコップから視線を外した。そのまま、どこかへ行こうとするので、

「ちょ、ちよつと、あんた場所分かってないでしょ」

「おう。で、どこじゃ？」

しれつとそんなことを言ってくる。真希としては呆れると言っかおかしいと言っか。

「まったくもう。ほら、こっちだから」

そう言っつて、真希は自然と小太郎の手を掴んで引っ張った。

「つとと」

予想外な行動だったのか、小太郎がややつんのめる。それを無視して、真希は少し歩いてから振り返った。

「またはぐれたりすると面倒だから、とりあえずよ」

真希はわずかに頬を染めながら、つつけんどんに言う。

「……お、おう」

すると、小太郎は突然大人しくなり、引かれるがままに真希の後をついていった。その間は二人とも、なぜか無言のままだった。

「で、どれにする？」

「むっ」

二人はずらりと並ぶシャープペンを一緒に眺める。その手はもう、繋がれてはいない。売り場に着くと同時に、真希はぱっと手を離してしまっていた。

「色違いの物から形そのものが違う物まで、実に種類が多いのう。目移りしてしまう」

「そうねー。あたしも久々に来たけど、こんなに多かったかしら？」

真希は一つのシャープペンを手に取り、眺めてみる。ピンク色で細い形状のタイプだ。子どもが好みそうな感じである。

「好きな色とかないの？」

手に取ったものを戻しつつ、真希は隣で悩む小太郎に聞いてみる。

「そうじゃのう。黒か青か、後は緑じゃろつか。真希はどうなんじや？」

「え？ あたし？ んー、あたしは赤かな。ピンクも嫌いじゃないけど、ちよつとあたしのイメージとは違う気がする」

言いながら、真希はちよつとゴツめの黒いシャープペンシルを手取る。真希にとっては少々握りが太いが、小太郎にとってはちよつとよさそうである。

「これなんてどう？」

「お」

真希からシャープペンシルを受け取り、小太郎が握りを確かめる。何度か試してから、

「悪くはないが、ちと持ちにくいのう」

「そつか」

返されたシャープペンシルを元の場所に返し、真希は再び物色を始める。小太郎は小太郎で、自分に合いそうなものを真剣に探しているようだった。

ふと、真希はここである事実が付く。今のこの状況は、いわゆるデートなるものではないだろうか、と。場所が激安ショップとというのがあれかもしれないが、男女二人でショッピングとなれば、傍から見てこれはもう間違いないデートと言えるのではないか。

瞬間、真希は顔がかーっと熱くなるのを感じた。心臓が早鐘を打

ち、ちょっと呼吸が苦しくなる。

「む？　おい真希、様子が変じゃが、どうかしたか？」

真希の変化に気が付いた小太郎が、心配そうに彼女を見る。

赤面している顔をあまり見られたくない。そう思った真希は、とつさに近くのシャープペンシルを手に取り、小太郎の前に差し出した。

「こ、これなんかどうかな？」

ろくに確認もしていないため、どんな色で形をしているかも分からないが、真希はとにかく自分から注意をそらして欲しかった。

そんな真希にわずかに首を傾げつつ、小太郎は差し出されたシャープペンシルを手取る。

「……むう。これは中々ええのう」

「え？」

そんな評価が聞こえて、真希は熱の引ききらないまま、小太郎の持つシャープペンシルを見た。

「それで、いいの？」

真希がとつさに渡したシャープペンシルは、さっきの物より若干細身で、全体的に黒色だが、アクセントとして赤のラインが数本引かれ、それがよく映えていた。

「うむ。持ちやすいし、色も悪くない」

しきりに手の中で弄繰り回す小太郎の姿は、新しい玩具を手に入れた子どもの様で、真希は自然と笑みを作った。

「それじゃあそれ、買ってきなさいよ。あそこに並んで、立ってる人に渡せば代金言ってくれるから、その通りに払うのよ」

「なんか、子どもに教えるような言い方じゃのう。前に『すーぱー』で真希がやっとなのを見とるけえ。心配いらん」

ちよつとだけむつとしたような感じで、小太郎が答える。しかし、彼はすぐには行こうとしない。

「どうしたの？ 行つてこないの？」

「ああ、せつかくじゃし、もう少し他の物も見てみようかと思つての。さつきも言つたが、ここは色んな物があるけえ。ちよいと見てみたくてな」

そう言う小太郎の様子を見て、真希はふと少し前のことを思い出した。

「ふーん……。あ、じゃあ、あたしもちよつと見たい物があるから、この辺に居てね」

「なんじゃ？ 何かあるなら僕もついていくぞ？」

「え？ 小太郎女の子の下着に興味あるの？ ……やらしー」

「んな！？」

不意打ちに面食らう小太郎の隙を突いて、真希はたたと走り出す。

「すぐ戻るからそこに居てよ」

軽く首だけ振り返らせつつ、釘を刺しておく。これでついて来ることはないだろう。

「まあ、百円だけど、ね」

目的の場所で目当ての品物を取った真希は、小太郎に気が付かれないようにレジに並び、商品をカバンにしまいこんでから、文具売り場へと戻った。

結局、小太郎はシャープペンシル一本と換えの芯のみを購入し、満足げな様子だった。そろそろいい時間だということで、二人は店を出る。

外は学校帰りの児童や学生、会社員などでごった返していた。それに比例するように、交通量も多くなっている。

「あっちゃー。もうちょっと早くに出ればよかったかも」

「この辺りは人間の数が多いのう。少々息苦しい」

不満を言っただけでも始まらないと、二人はすぐその交差点で信号が変わるのを待つ。同じように信号を待つ人は数人ほど。多くの人が真希たちとは直角に交わる方向へ進んでいるらしい。

「人は多いが、僕らと同じ方へ進むもんは少ないようじゃのう」

「そうね。あっちには駅があるから、そっちへ向かっているんじゃないかしら」

人の流れを眺めながら、真希は小太郎に説明してやる。

「駅というと、あの鉄の蛇、電車とか言うたか。あれが人間を腹に収めたり出したりする場所じゃのう」

「また微妙な表現ね。言いたいことは分かるけど」

眺めていた人の流れが速くなった。視線をずらすと、歩行者用の信号が点滅しているところだった。やがて信号が赤へと変わり、流れはぶつりと途切れてしまう。

「そろそろこつちが変わるわ」

「おう」

歩行者用の信号に続き、車両用の信号も黄色、そして赤へと変わる。数秒置いて、真希たちの進行方向側の信号が青へと変わった。それを見届けて、真希が横断歩道を渡るための一步を踏み出す、一瞬前、その横を小さな影が通り過ぎた。ちらりと真希が向けた視線の先で、真つ赤なランドセルを背負ったツインテールの女の子が元氣よく駆けて行く。

悲鳴が聞こえたのは、まさにその時だった。

悲鳴の主は、真希たちの対岸側で信号を待っていた誰か。悲鳴の理由は、右手から信号を無視して交差点へ侵入しようとしているトラックの存在。真希の前を駆ける少女。迫り来るトラック。気が付いた時にはカバンを放り出し、真希は走り出していた。

「真希！」

背後から小太郎の声がかかる。だが、真希は止まらない。眼前、

五歩ほどのところで、突っ込んでくるトラックを見つめて立ち尽くす少女。おそらく恐怖で身体が動かないのだろう。このままでは確実に轢かれてしまう。

三步進み、残り二歩。わずか二m弱が、絶望的なまでに遠い。

真希が、少女の下へ到達。間に合った。その幼い身体を横から抱き締め、勢いのままに前方へ身を投げ出そうとする。

だが、運命の神は残酷だった。間に合ったという考えは、真希の主観によるもの。客観的に見れば、真希が少女の下へ辿り着いたことが奇跡とも言えるほど、暴走トラックは目前に迫っていた。

誰もが、不運な少女と勇敢な少女の悲惨な光景を覚悟した。遅滞した時間の流れが正常に戻ると同時に、断末魔のようなブレーキ音。トラックは横断歩道の上を通過し、ドライバーが無理にハンドルを切ったせいだろう、そのまま道路に横倒しになってなお滑り続け、やっと止まった。

一時の間、恐怖を覚えるほどの沈黙が辺りを支配した。

ややあつてから、ちょうど真希たちとともに信号待ちをしていたとある会社員は、横転して道を完全に塞いだトラックから視線を外し、横断歩道に残っているであろう無残な死の光景を確認するために、正面を向いた。だが、そこには彼の想像した光景はなかった。トラックが通過する直前まで少女たちが立っていた場所には何もなく、そのわずかに先に、幼い少女を抱いた真希が倒れており、二人の下敷きになる形で小太郎が仰向けに倒れているだけだった。

周囲が見守る中、路上に倒れる三人がピクリと動き始め、ゆっく

りとした動作でそれぞれが自分の足で立ち上がると、一斉に歓声が爆発した。

大音量の歓声を一身に浴びながら、真希はただ戸惑っていた。何故ならば、気がついたら小太郎を下敷きにしていた、というのが嘘偽りのない真希の真実であつたためだ。

「うるさいのう。耳が痛くなる」

真希の背後で、小太郎が不満を口にする。きつと顔をしかめているのだらう。

「えと、お姉ちゃん？」

顔の下で舌足らずな声が聞こえた。真希がそちらへ視線を向けると、ツインテールの女の子が不思議そうに真希を見上げている。とそこにいたって、真希は立ち上がった後もその少女を抱き締めたままであることを気が付いた。

「あ、えつと、怪我はない？」

腕の束縛を解きながら、真希は少女の目線に合わせて屈み、その様子を確認する。

「うん。お姉ちゃんが助けてくれたから」

少女がはにかむ。真希の見たところ、確かに少女はかすり傷一つ

負ってはいなかった。地面に投げ出された時も、小太郎が下敷きになつてくれたおかげで、真希もまた傷一つない。

「あー、あたしと言うよりかは」

首を後ろに向けて、小太郎の様子を確認する。彼は服に付いた汚れを手で払っているところだった。

「ん？ おう。大丈夫じゃったか？」

その反応はごく普通だった。片方が子どもとはいえ、二人の下敷きになったというのに、まったく堪えていない様子である。真希は再び目の前の少女に向き直って、

「あのお面のお兄ちゃんが助けてくれたんだよ。お礼を言ってあげて」

真希に言われて、初めキョトンとしていた少女は、すぐにその意味を理解して小太郎の前に立った。

「む？ 何か用か？」

突然目の前に立った少女を訝しんだのか、小太郎が腕を組んで身構る。だが、少女はそんな小太郎に臆することなく、

「助けてくれてありがとう。お面のお兄ちゃん」

しっかりと礼の言葉を述べた。おそらく親のしつけが行き届いているのだろう。

「さ、いつまでもここににいるわけにも行かないし、とにかく歩道まで戻りましょう」

真希は少女の手を取って歩き始める。その背後でお面の頬をぽりぽりとかきながら、小太郎も真希の後に続いた。

ちょうど遠くからサイレンの音が聞こえてきた。誰かが通報したのだろう。まもなくここに来るはずだ。

「あ、そうそう」

真希は少し立ち止まって、背後を振り返る。

「なんじゃ？」

「あたしからも言わせてよね」

短い言葉。けれど、想いを乗せた大事な言葉。多分、その時が、

「助けてくれて、ありがとう」

真希のこれまでの人生で、一番の笑顔だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1419y/>

婚約者は鴉天狗

2011年11月4日11時04分発行